

---

# コードギアス反逆のルルーシュに憑依したぜ

刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードギアス反逆のルルーシュに憑依したぜ

### 【Nコード】

N8759N

### 【作者名】

刹那

### 【あらすじ】

何故かルルーシュに憑依した主人公。ルルーシュの知能を使い、ブリタニアを倒せ。まずはシャルル打倒のために反逆ライフだ。壮絶な親子ケンカが幕を開ける。基本真面目です。

## 第一話 始まりの時

東京ゲッターの一角、黒のトレーラーが止めてある場所に一人の青年が近づく。

青年はトレーラーのドアにカードキーを差し込んで中にはいる。

その事からこのトレーラーの関係者と言うことが解る。

トレーラーの中はゲッターの物とは思えないほど奇麗で、多額の金額が費やされていることが解る。

青年は中の人間の何人かに挨拶しながら奥の部屋に向かっていく。

「全く、ゼロはこんな時に呼び出すなんて。」

「準備が出来たんだろ。」

青年の愚痴を三十過ぎの男性が諫めるように言う。

「だって、ナンパしてる時に呼び出しなんて。」

「お前……………、そんな事してたのか。」

男性は青年の言葉に呆れながら肩を落とし額を抑える。

しかし青年の方は何処吹く風と言ったように惚けている。

「まあいい、とりあえず急いでいけ。あの御方も何かと忙しいからな。」

そう言つと男性はまた別の場所に行った。

とりあえず青年は呼び出された部屋の前に立ち、

「俺だゼロ。」

しかし返答はなく、青年の言葉だけがその場に響く。

「たつく、またなんか熱中しているな。」

入るぞ、そう言つて青年は室内に入る。

中には一人の少年が椅子に座り何か考え事でもしているのか、呼んでみても返事がない。

「ルルーシュ、俺だ。ナオトだ。」

そう言つてルルーシュの肩を叩く。

するとルルーシュはハツとしてナオトの方を向く。

『ナオトか、済まないな。考え事をしていたようだ。』

そう言うとルルーシユは一枚の資料をナオトに手渡す。

その資料を受け取り内容を確認するナオト。

しかしそれを見ても全く理解できないナオト。

思いつきり専門的な内容過ぎて理解できないのだ。

するとそれに気付いたルルーシユがもう一つの資料を手に取り、

『間違えた、それは私のだ。』

「間違えたって、君らしくないな。」

そう言つてルルーシユから資料を貰つ。

『この頃忙しかったからな、ろくに寝てないんだ。』

「そんなに突き詰めて資料を作っていたのか。」

そう言つとルルーシユはフウと溜息を付いて言った。

『いや、生徒会の仕事がたまつていてな。』

「そつちかよ。てかミレイちゃんも居るんだろ。」

ナオトはずつこけながら言つ。

しかしそれは正論である、AF学園の生徒会長はミレイであり、ルルーシユは副会長でしかない。

しかし考えても見て欲しい、あの人がまじめに仕事をするだろうか。

否、やるときはやるだろうが基本は貯まっただけからするのである。

この忙しいときにそれが重なれば嫌でも睡眠時間が減らされてしま  
う。

「じゃあ、どうやって睡眠時間を作ってるんだ。」

『決まっているだろう、授業中に寝ている。』

「学生の本分を忘れるな、そしてそんなことを胸を張って言うな。」

ナオトは大声を出して突っ込む。

しかしこの部屋は防音のため外には響かない。

『おお、それがジャパニーズツッコミか。』

「俺がお前を殴りたいというこの気持ちは間違っているのだろうか。」

そう言って拳を握りふるふるさせている。

しかしルルーシュはそれを何処吹く風と言ったように無視する。

『少なくともトップである俺を殴ろうとするのはいただけないな。』

全く悪びれなく言うルルーシュにナオトは諦めたように溜息を付く。

「そうだな、君はそう言う奴だったよ。あの頃の純粋な君が懐かし  
い。」

そう言って現実逃避を始めたナオトに追い打ちをかけるルルーシュ。

『あの頃の俺は演技だったぞ。』

「あの頃のときめきを返せ。」

『男にときめくなよ。』

ルルーシュの静かなつつこみを横目にナオトは頭を押さえて突っ伏す。

あんな可愛かったのにかWhy did I become i  
t in this way?とか言っている。

思いつきりブリタニア語だぞそれ。

『閑話休題として、あの作戦を行うことが決定した。』

そう言うと両者の顔は先程のおふざけモードから真面目な顔つきに変わる。

「と言うことは本格的に始めるんだな。」

『ああ、明日の作戦をかわぎりにブリタニアへの反逆を始める。』

そう言うと資料の説明にはいる。

『明日、三番隊が毒ガスの奪取を行う。しかしそれは、』

「契約者とか言う奴を奪還するための作戦なんだろう。」

『そつだ。』

ルルーシュは資料を見ながらそう言う。

『赤坂にはしてしたポイントまで逃げて貰う。その後は』  
「俺達が待ち伏せして、叩く。」

拳と平手を合わせて言う。

『俺は明日の先頭には直接は出ないが指示だけに行く。』

「ああ解っている、契約するためだろう。」

『そうだ。詳しいことはこの後幹部を集めて説明する。』

そう言うってルルーシュは仮面をかぶる。

とりあえず建前としては組織的なことを説明するときにはゼロの仮面を被ることにしている。

あくまで建前で幹部を含めて古くから居る者は全て素顔を知っている。

『ナオトは幹部を会議室に集めておいてくれ。』

「解った。一時間後に会議を始めることで良いんだな。」

そう言うとなオトは部屋から出て行く。

それを見送ったゼロは仮面を取り考える。

考えることはこれまでの人生についてだ。

憑依というのだろうか、はっきり言ってそんなの夢物語と違っていたら何時の間にはルルーシュに憑依していたのである。

ルルーシュだけ、天才、美形、モテモテと考えていたのも束の間。

その後のことを考えた。

つまりコードギアスの世界の主人公ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアに憑依したのだ。

KMFが生で見れるさわれる乗れる、と楽観的な考えとゼロとしてブリタニアへの反逆を考えると心が重い。

それにシャルル達の「ラグナロクの接続」を阻止しなければならぬ。

それについては原作通り進めばいいのだが実際原作は運頼みのことが多い。

そして第一に黒の騎士団メンバーが嫌いである。

特に扇とか扇とか扇とか、そしてナナリーとシュナイゼル、コーネリアも其処まで好きになれない。

ユフィは可愛かった、そして意外とカリリーヌも可愛かった。公には共にいけないが隠れて遊んでいた。

ギネヴィア姉さんやオデュッセウス兄さんにはよく世話になった者だ。

はつきりって俺はオデュッセウス兄さんの方が皇帝になるべきだと思う。

あの人にはシュナイゼルのような智もなければコーネリアのような武もない。

しかしあの人には心がある。それは優しさであり弱者を労る心だ。

そんな物がこの先生きていく上で必要になるのではないかと考えた。

マリアンヌ？論外である。

アニメを見ていなければカッコイイ母親なのだがアニメを知っているので好きになれない。

だがあの強さには呆気にとられた、だって話によればあのビスマルクを倒したんだぜ。

しかもあの未来線を読むギアスを使った状態なのだ。

しかもガニメデでだぜ、そしてガニメデのデヴァイザーは母上だけだから相手はグラスゴーだぜ。

確かにグラスゴーは近接戦闘も旋回能力もガニメデ劣るが機体スペックは比喩ものにならないはずだ。

それってどんな能力だよ、絶対原作最強のキャラだよ。

暗殺されて良かった、グツジョブ叔父上（不謹慎だけど）。

アレと戦うことを考えると、まああれからいろんな事を習ったけど。

そのお陰で原作ではモヤシだったこの体は少なくとも一般クラスより高い者となった。

そして俺が人質として日本に送られた。

その時俺はシュナイゼル兄さんに頼み込んでナナリーだけは助けて貰った。

その時俺が内心ガッツポーズをしていたのは内緒である。

そして向こうに行ってから苦勞の連続であった、スザクとの激戦。

母上ほどの速さも重さもない攻撃、捌いて捌いて打ち返す。

だがスザクもそれで終わる玉ではない、何度も殴り合う内にいつの間にか何故殴り合っているか忘れてし

まって両者ともダウンして笑った。

久しぶりに心から笑った。

そしてその時俺は思った、この世界でも俺は生きているのだと。

アニメの世界じゃない、俺は此処にいる。

迷いを吹っ飛ばした俺とスザクは仲良くなった。

最高の親友として何度も夢を語り合い、バカみたいな事もして見せた。

特に藤堂先生のお茶請けを盗んだときは危なかった。

策を設けなかったら危険だったかも知れない。

まあその後には油断を突かれて会えなく説教されたが。

そしてあの日が訪れた。

スザクの父親ゲンブは原作ほど性格は悪くなく、守りきれずに済まないと言っていた。

こんな所に原作とは違う相違点があることに気が付いた。

だがそれを気にしている暇はなかった。

アシユフォードに保護されてから俺は自分の軍を作ること専念した。

そしてその課程で多くの同士を見つけた。

日本人ながらも俺を信用し付いてきてくれる者。

そんな奴らには自分の素性、自分の目的を告げている。

俺の目的はシャルルの打倒だ。

それについては幹部クラスしか知らないが。

そしてその後、おっと。

時間が来てしまったようだ。

この続きはまた次にしよう。

## 第一話 始まりの時（後書き）

とりあえず何となく投稿してみました。  
存続希望がきしでは続けたいと思います。  
ただし亀更新です。

## 第二話 黒の皇子と蒼の騎士

前回の続きだ。

解らん奴は前回を見る。

と言うわけで会議室に全幹部が集結している。

『全員集まっているな。』

そう言っただけ見直す。

集結したのは黒の騎士団の中核を担う幹部である。

まずは戦闘司令官岡崎孝四朗。

零番隊長長紅月ナオト。

一番隊長長ミレイアシユフオード。

二番隊長長新橋京谷。

三番隊長長赤坂徹。

技術部長ラクシャータ・チャウラー。

技術補佐リリーナ・アルシド。

事務総長畑岡隆三である。

各部門のトップが出張っているためそれなりの緊張感が、

「ラクシャータさんそのお菓子取って。」

「赤坂、飲み物無い。」

「無い。」

「えー。」

無いようだ。

『お前等、俺の話聞け。』

少し低い声で言ったらすぐに此方を向く。

ルルーシュを怒らせたなら凄く怖いことは知っているからだ。

全員が注目したことに満足し説明を始める。

『明日、あの作戦を開始する。』

「ついに始めると言うことか。」

岡崎が呟くように言う。

岡崎はまさに軍人といった感じの強面な顔で神妙に頷く。

「ついにルルちゃんも反逆デビューだね。」

何故か優々と言っているミレイ。

あなたはブリタニア人でしょうというつつこみはない。

何せ彼は恋する少女、ルルーシュを愛する女性なのだからだ。

「やってやるぜ。」

ナオトがそういって拳を、ってそれは先ほどしたでしょう。

『みんな、この作戦を行えば間違いなく引き返せなくなる。

引き返すなら今が最後だぞ。』

ゼロはそう言っただけ。

はつきり言っただけの言葉が意味がないことは知っている。

しかし言っただけでおかねばならないと思っただけだ。

これから進むは修羅が道、それは並大抵なことではない。

「何言っただよ。」

「そうそう、俺達は付いていきたいからついてるの。」

「私もそうよ。」

「我ら一同君に命を預ける覚悟だ。」

「私は君が気に入ってるんだみよん。」

そう言っただけみんながゼロに言う。

『フッ、そうだな。今回の作戦を説明する。』

するとゼロが疎開とゲッターを示す地図を画面に映し出す。

地図には目的地であるターゲッターと逃げるルートが示してある。

『三番隊はターゲッターの奪取後、逃走ルートを通り疎ゲッターの

角に逃げてくれ。

其処は住民もいない上崩壊したビルや住宅が広がっているだけだ。

その方が奇襲戦には適している。

そして二番隊はゲッターの住民を攻撃してくる部隊の撃破を。』

「任せてくれ。」

「了解」

二人はそう言っただけ自分のやるべき事を確認する。

『一番隊は三番隊が引きつけてきた敵を攻撃して貰う。この部隊に岡崎指令も入って貰う。』

「このミレイさんに任せなさい。」

「敵の殲滅を行おう。」

『零番隊は私の本陣突入時に共に戦って貰う。』

「おっしゃ、任せてくれ。」

ナオトは嬉しそうに言う。

『ラクシャータ、機体の状況は。』

「ゼーんぶ、最高の出来よ。あんたの機体もちゃんと出来上がって

いるわよ。」

「他の機体も準備完了しています。」

ラクシャータはそう言いながらキセルをふかす。

リリーナは真面目に説明する。

『畑岡は物資の確保を頼む。』

「任せてくれ。」

騎士団の中で数少ないまともな畑岡はゼロからの信頼は高い。

それ故に元一般人ながらも事務総長の座にいるのだ。

ゼロは大まかに指示を終えた後、一人一人に入念に指示を行う。

何処に潜伏するか、どういったように迎撃するか。

どのルートで逃走するか。

突入ルートの確認。

これまで調べ上げたゲッターの地理、ルルーシュの頭脳に俺の補足知識。

それを考えてから全部隊への指示を終える。

そして明日に備え全員解散となった。

「テロリストは疎開からゲッター方向に逃走中。至急援軍を要請します。」

そう言って何機かのヘリが逃走中のトレーラーの情報逐一本部に伝える。

それに従ってブリタニア軍も進行する。

「投降しなさい、今なら弁護人を付けることも可能です。」  
そう言いながら包囲するように展開するヘリ達。

するといきなりトレーラーの後方部分が開いてハーケンが飛び出てくる。

ヘリはそれを交わす暇もなく撃墜されていく。

「ヘリの殲滅を確認、これよりBの第四ルートを使用しゲッターに逃走する。」

トレーラー内部の通信士が連絡する。

しかし、いきなり周囲にナイトメアの信号が現れる。

そしてトレーラーの進行方向を指定するように一つの道を空けて出現する。

その時トレーラーから飛び出たKMFが純血派のサザーランドを切り裂く。

あまりの速さに周りのパイロット達も反応できない。

そしてそのKMFはジェレミア・ゴットバルト边境泊が乗るサザーランドに攻め掛かる。

「嘗めるな。」

「さすがは純血派のリーダー、一筋縄ではいかんか。」

赤坂は舌打ちしながらゲッター方向に逃走する。

そして先程の騒ぎの内にトレーラーは囲みを抜け予定通りのルートを通り逃走する。

それを見た純血派のメンバーは慌てて追撃する。

そして時を同じくして聖庁ではクロヴィスが声を荒げていた。

「まだアレは見つからないのか。」

「はっ、アレはゲッターの一角に逃げ込んでいます。」

「ならばその一体を一斉に搜索せよ、ナンバーズ共を使っても構わん。」

「ははっ。」

そう言うとバトラーは足早に去っていく。

それを見届けたクロヴィスは溜息を付きながら徐に一枚の写真を取り出す。

「ルルーシュよ、私にはやはりこの仕事は辛すぎたのかも知れないな。」

最愛の弟が亡くなった地、ならばせめてその地を平穏にしたいと思いいこの地の総督になったのだ。

しかし理想と現実とは全く違う、殆どが部下に任せっきりである。

「全く不甲斐ないな。」

そう言いながらも自身が指揮を執るべくG1トラーラーに向かう。

そしてクロヴィスの命令でゲッターに侵入したブリタニア軍は純血派から知らせられる情報を元に包囲を行っていく。

しかしゲッターの地形を利用して中々包囲が縮まらない。

そして痺れを切らせたブリタニア軍が不用意にトラーラーに突撃する。

「馬鹿者、統率を乱す行為を行な。」

ジェレミアの言葉もむなしく何部隊かが突撃する。

そしてトラーラーに近づき威嚇攻撃を行おうとしたその時。

『ミレイ、岡崎。』

「了解」

「承知」

ゼロの指示に反応して一番隊が姿を現す。

「なっ、何!!」

いきなりの包囲に狼狽するブリタニア軍。

「今よ、殲滅するわよ。」

「後方の敵部隊に注意しながら敵を討つのだ。」

ミレイの月下二式、岡崎の紫炎を中心に出現した一番隊が一斉射撃で撃破していく。

そして更に三番隊も加勢して敵を屠っていく。

「畏か」

「ジエレミア卿、此処は一時撤退を。」

「これが計算していたことだとすると殿下が。」

そう言うのと純血派が後退しようとする。

しかしそれを見逃すほど黒の騎士団はお人好しではない。

ゲッターの影から現れた無頼改式の出現で後退を妨害する。

足が止まっている内に岡崎の紫炎が何機かを連れて追撃する。

「己、テロリスト共めが。」

ジエレミアのサザランランドと岡崎の紫炎がぶつかり合う。

両者共に生粋の軍人であり、機体スペックでは圧倒している岡崎と

ラウンス級の腕前を持つジエレミア。

しかし悲しきことに幾ら腕が良くともそれに見合った機体でなければ

は全力は出せない。

岡崎の紫炎にジリジリと押されていく。

それは他の部隊も同じのようだ。

機体スペックはそう変わりないが、単機ではなく二機以上の連係攻

撃を行ってくる。

しっかりと訓練された部隊であることがよく分かる。

「この機体、敵ながら凄まじいな。」

「このジエレミアとか言う男、ただ者ではない。」

「しかし、負けられん」「

両者の攻防は未だに続く。

このエリア周辺に存在するゲッターの住民に向けてブリタニア軍が

攻撃を仕掛けようとする。

見た者は許さない、つまりは不安要素を消すためだ。

『敵がそちらに行った、二番隊は迎撃せよ。』

「はい。」

新橋はそう気楽に心えると部隊を進ませる。

しかしその陽気な外見や物言いからは予想も出来ないほどの腕前で

敵を撃破していく。

戦力はブリタニア軍の方が圧倒している。

しかしまともに指揮を執れる純血派のジェレミアは現在敵の策に掛かり混戦状態で指揮系統に乱れがあり、士気は著しく低下している。これでは数で勝るブリタニア軍も簡単には黒の騎士団を撃退できないのだ。

そして両者の戦術目的が違いすぎたことも勝敗の要因だろう。

ブリタニア軍はゲットーのイレブンを殺害するためであり、黒の騎士団はそれを防衛するのが目的である。

そうならば騎士団の戦意は自然と高まるに決まっている。

無論それもルルーシュが狙ってやったことである。

しかしその為ブリタニア軍は攻め倦ね逆に騎士団の攻勢に後退を始める部隊も出てきている。

『所詮は兄上の部隊だ。ジェレミアさえ押さえれば軍部は大したことはない。』

純血派は一番隊が、ジェレミアは岡崎が押さええている。

更にゲットーに進行したブリタニア軍は二番隊が押さええているはずだ。

フツ、やれるやれるぞ。』

内心かなり心配していた。

なんと言っても作戦を立てることは出来てもそれを実行する段階になれば失敗することも有り得ると考えなければならぬ。

そう、自分のミスで多くの人間を殺してしまうかも知れないからだ。だからこそ入念に、仲間を出来るだけ死なせないために、犠牲無くして勝利はないと解っている。

それでも犠牲を少なくして、犠牲になつた者が無駄死にならないように、それを糧に成長し学んでいく。

いくつものパターンを考え出し、いくつもの結果を考え出す。

決められた結果があるだけでは駄目だ、どんなときでもイレギュラーは現れる。

特に白兜とか白兜とか白兜とか。

毒ガスも此方の拠点に保管してある。  
中身はまだ開けるなよと言ってある。

『つまり、これで条件はクリアした。』

ゼロは零番隊に繋ぐ。

『零番隊、突入せよ。』

「よっしやあ。」

ゼロの指示の元、ナオトの乗る蒼月一式を先頭に零番隊がG1ベースに向けて進軍する。

『これでチェックだ。これにどう対抗しますか、兄上。』

そう言つて自身も無頼改式に乗って進む。

無論それをブリタニアの兵達も気付く。

しかしすぐに蒼月につぶされていく。

「碎け散れ。」

ナオトの言葉と同時に敵機のサザールランドに左手を翳して副射波動を浴びせる。

するとサザールランドは内部から崩壊して爆散する。

それを見たブリタニア軍は蒼月を警戒する。

「一斉射撃で撃破しろ。」

指揮官からの命令にサザールランドが一斉に蒼月に向けてアサルトライフルを連射する。

しかし、蒼月はまるで消えたかのようにそれはかわす。

「上だ。」

そうナオトは蒼月を跳躍させて一斉射撃を回避したのだ。

関節部分を使った第七世代特有のアクションである。

そして上空からの射撃で指揮官を撃破する。

それに混乱した部隊を団員達が叩いていく。

「やれる、俺達でも」

「ゼロの指揮があればやれるぞ。」

団員達も自然と高揚し敵と当たっていく。

その為他に兵を当てすぎた本陣は崩壊を始めようとしていた。

だが、このままでは終わるはずがなかった。

「特派に知らせる。新型の力を見せてみるとな。」  
「そう言つてすぐさま特派につなげる。」

「殿下、やっと思番ですか。」

「お前の玩具を見せてみる。」

「ランスロットとお呼び下さい、殿下。」

それを聞いてすぐさま特派の面々が準備を始める。

「スザクくん、目標は敵の排除。まずは本陣であるG1ベースまで急いで。」

「了解しました。」

セシルの説明を聞いたスザクはキーを差し込み準備を完了する。

「じゃあ、セシルくんお願い。」

「了解しました。では、蒼導兵器Z-01ランスロット。」

「MEブースト。」

そう言つて操縦桿を握り準備する。

「ランスロット、発進。」

スザクはペダルを踏み込み、発進する。

「あつはー、いきなりフルスロットルとは。」

スザクの乗るランスロットはいい気に黒の騎士団零番隊目掛けて進軍する。

それを無頼から感知した男が居た。

「此処で来るか、スザク。Q-1は白兜を止める。他の機体はそのまま前進。」

「解つた、敵も第七世代か。だが負けられない。」

蒼月のペダルを踏み込み白兜に向けて進む。

次世代機と次世代機の激突はどちらが勝つのか。

## 第二話 黒の皇子と蒼の騎士（後書き）

何となく第二回投稿。

気が向いたときはすぐ更新できるけど気が向かなければ放置してしまします。

ちなみに次回は、ジェレミアVS岡崎、スザクVSナオトの構図になります。

よろしければ感想下さい。

### 第三話 新宿ゲッター

敵の新型、つまりはランスロットに向かったナオトはランスロットの進行ルートに待ち受けていた。

そして少しするトレーダーに敵機の反応が現れてそれがだんだん強くなり、此方に向かっていると解る。

そしてそれは肉眼でも捕らえられるようになっていた。

「へえ、アレが敵の新型。第七世代ナイトメアフレーム、ランスロットか。」

『気をつけるナオト。なめてかかると逆にやられるぞ。』

「解ってるって、俺に任せておけ。」

ルルーシュの言葉を笑って流して敵に備えながら言う。

「俺が今までお前の期待に応えなかったことあるか。」

そう言われるとゼロはフツと笑い言った。

『そうだな。なら、我が騎士紅月ナオトよ。敵の新型を破壊せよ。』

ルルーシュはナオトに命令を下す。

「了解。」

そう言っでランスロットに向けて進んでいった。

それはスザクの方からも確認できていた。

「アレがテロリストの機体。ロイドさんの話じゃかなりの高性能って言っただけ。」

そう言っでいると向こうも此方に向かつて爆進してくる。

その速さはランスロット以上とも言えるほどの速さで向かってくることに驚く。

「なんて速さだ。」

しかしスザクも負けじと敵に突っ込む。

そして両機体がぶつかり合う寸前でそれぞれ武器を取り出す。

廻転刃刀とメザー・バイブレーション・ソード、通称MVSを取り

出す。

両方の武器がぶつかり合い火花を散らす。

一手目の攻撃は互角、一旦離れて相手の様子を窺う。

そして再度剣を構えてぶつかり合う。

ガキーン！！

ギイン！！

数合ぶつかり合わせた事で相手の力量が解る。

「強い、少なくとも僕よりかは技術は上だ。」

「強いな、才能は俺より上か。」

「だが/だけど、負けられない。」

ナイトメアを進ませ、両者は激突する。

この戦いはまだ長引きそうである。

そして激戦はもう一カ所でも起きていた。

ガキイーン！！

ガアアン！！

バキイーン！！

凄まじい音を立ててランスと廻転刃刀がぶつかり合う。

「このテロリスト、かなりの手練れ。だが、このジェレミアも負けられぬ。」

そう言つてランスを突き出す。

しかし紫炎はそれを回避して刀で突きを放つ。

「甘い。」

サザーランドも同じように回避しながら開いた左手をスタントフア撃ち込む。

「当たりはせん。」

紫炎は刀で逸らすように防いで、右の拳でサザーランドの顔面部分を殴りつける。

「！！！！」

ジェレミアはとっさにレバーを引きサザーランドを下げる。

するとサザールランドの頭部があつた場所を紫炎の拳が通過していた。あと少し反応が遅れていたら完全に破壊されていただろう。「なんたる性能、まともにも当たるのは得策ではないな。」ジエレミアはそう言いながら仲間の様子を確認した。

ガキーン！！

サザールランドのランスと月下二式の廻転刃刀がぶつかり合う。

「くっ、このテロリストが。」

純血派用にカラーリングされたサザールランドを駆るのはヴィレッタ・ヌウである。

彼女は純血派の中でも優れた腕前の持ち主であるが、

「まだまだ。」

ミレイ駆る月下二式の性能には苦戦を強いられる。

機動力では完全に負けている上パイロットの腕前もかなりの物だ。

この分ではそう遠くないうちに負けてしまつたろう。

その為近いうちに撤退するのが得策であるが、自分の周りの純血派のメンバーは敵の新型に苦戦しているため撤退は難しいだろう。

それにかのジエレミア卿まで敵のエース機に足止めされている。

状況は最悪といえる状況である。

「はあああ！！！」

「！！！」

考え事をしていて一瞬気を許してしまったため不意を突かれてしまった。

とっさにレバーを引き後退する。

「くっ」

回避が間に合わず左腕を失ってしまった。

パイロットの腕はほぼ直角な上、機体がこれでは勝ち目はない。

「隙有り。」

「しまった。」

片腕を失つたことで困惑してる隙を更に追撃された。

ガシンン！！

しかしミレイが放った攻撃は横から入ってきた攻撃によって阻まれた。

攻撃が阻まれたことによってミレイは一度後退し距離を取る。

「無事がヴィレッタ。」

ヴィレッタへの攻撃を防いだのは岡崎と戦っているジェレミアであった。

しかしジェレミアも無事ではない、ヴィレッタの危機を感じて急行したため右腕を失っている。

「申し訳ありませんジェレミア卿。」

「ヴィレッタよ。貴殿は残った部隊を連れて戦線を離脱せよ。」

感謝の言葉を言ったヴィレッタへジェレミアが返した言葉は予想外の言葉であった。

しかしジェレミアの言葉には余裕は感じられない。

恐らく先程の言葉を返す余裕もないほど焦っているのだろう。

確かに、この状況なら撤退するのが良い方法だ。

しかしこの状況で殿を務めれば間違いなく負けるのは目に見えている。

どうせこの人のことだ、自分が残るつもりなのだろう。

そうなれば純血派はどうなる、純血派の中にはジェレミア卿をしたって入った人が意外と居る。

それにこの人あつての純血派といえるだろう。

「お断りさせていただきますよジェレミア卿。」

ヴィレッタがそう言ってジェレミアの隣に並ぶ。

「その通りだジェレミア卿、君が居なければ詰まらんからな。」

キューエルがそう言ってヴィレッタの反対側に並ぶ。

「俺ですよ。」

「私もです。」

そう言って残った純血派の者は全て武器を構える。

既に数でも負け、機体性能でも劣っている、それでもなお、立ち向

かう。

「負けるわけにはいきませんか（それに私は……………）。」

「ふっ、この馬鹿者共が。」

そう言うと自らが先頭に立ち黒の騎士団に向かっていく。

各地で戦闘が繰り広げられている中、ルルーシュは単身G-1ベースの内部にいた。

生憎原作ではギアスを持っていたためすんなり入れたが現在の俺は持っていない。

どうやって入ったかだって、決まっているじゃないか。

入室のためのカードキーを偽造したのである。

ちなみにこれは俺だけの力ではない。

アシユフォードの各研究部との連携によって完成した物です。

言っておくがアシユフォード学園の生徒の中にも黒の騎士団は居るぞ。

それも意外と多くいるはずだ。

幾らルルーシュのスペックを持っているからと行っても所詮はかつてはしがない高校生をやっていた男だ。

ならばどうすればいいか。

決まっている、他から補って貰うのだ。

原作ルルーシュは一人で全てをしていたためイレギュラーが起これば窮地に陥っていた。

しかしそうならないためには他人を信用するようになればいいのだ。人は自分の力だけではどうにも出来ない。

だからこそ助け合うことが肝心なのだ。

その為制服を事前に盗んでおいて中に入れば簡単である。

「結構簡単にいけたな、後は兄上の元に行くだけだな。」

ルルーシュはそう言って内部を進んでいく。

外では戦闘が行われているのだらう、爆音が鳴り響いている。

後数分すれば仕掛けておいた装置が作動して停電を起こすはずだ。その隙にリーナがシステムをハッキングしてくれるはずだ。リーナほどの腕ならものの数分でシステムを制圧することが出来るだろう。

俺が動くのはそれからだ。

その為なるべくクロヴィスが居る部屋の近くで待機することにした。そして少しするといきなり周りの光が消え、真っ暗になる。

しかし現在消えているのは光だけで扉は開いている。すると中から数人の人影が出てくる。

恐らく原因の究明に向かったのだろう。

すると一人が俺に気が付いた。

「貴様は殿下をお守りするのだ。」

「イエス、マイロード」

そう答えて中に入る。

好都合だ、そして中にはクロヴィス一人しか居ない。どんだけ不用心なんだよ。

そう思いながら俺はクロヴィスに近づく。

「殿下、私が護衛しますのでご安心下さい。」  
なるべく顔を見せないようにそう言う。

そう言うとクロヴィスは安心したように息を吐く。

「ありがとう、所で君の名前はなんて言うんだい。」

「どんだけ呑気な奴だ。」

「アラン・スペンサーと申します。」

原作でルルーシュが使った偽名をそのまま使うことにした。それからすぐに光がつく。

どうやらリーナが上手くやってくれたようだ。

そして次の瞬間俺はクロヴィスに銃を突きつける。

それに気付いたクロヴィスが焦ったように言う。

「ど、どうということだい。き、君は何を言っているのかな。」

しかしその問いに答えることはしない。

「まずは、全軍に停戦を呼びかけてください。」

その頃G-1ベースの近くでは黒の騎士団とブリタニア軍が戦闘を続けていた。

しかし戦闘と言っても黒の騎士団の包囲作戦で手薄になったブリタニア軍本陣に奇襲を仕掛けた為、ブリタニア軍は完全に劣勢だが、零番隊はなるべくG-1ベースを傷つけないように敵を破壊していく。

「中にはゼロ様が居るんだ。」

「速めに敵を制圧し、危険を排除するんだ。」  
団員はそう言つて敵を撃破していく。

無論ナオトも同じくランスロット相手に激戦を繰り広げていた。

何とか目の前の機体を突破して救援に駆けつけたいスザクと敵を近づけないように決定打を打たせないナオト。

両者は拮抗した戦闘を繰り広げていた。否、繰り広げさせられていた。

はきつりいつてこの時のスザクはランスロットに始めて搭乗したのだ。

それに対してナオトは蒼月一式に何度も乗っている。

パイロットの能力はスザクが多少勝っている。

しかし機動力なら蒼月一式の方があり、機体慣れしている分有利に戦闘を進められていた。

もちろんそれはスザクも十分理解している。

(相手の腕は此方と同等、しかし機動力の差か。)  
スザクは内心毒づきながら戦っている。

このままでは埒があかない、そう考えたスザクは一気に行動に出る。一旦離れて距離を取り、スラッシュハーケンを蒼月に向けて放つ。無論それは簡単に回避されてしまう。

スザクもこれが当たるとは微塵も思っていない。

しかし蒼月が横に回避したことでスザクはさらなる行動を起こす。ヴァリスを蒼月の足下に向けて撃ち込む。

それを跳躍することで回避する蒼月。

しかしそれこそがスザクの狙いだ。

「貰った。」

ハーケンを空中にいる蒼月に向けて放つ。

しかしそれを蒼月は回避したのだ。

一本を廻転刃刀で防ぎ、その反動でもう一本をかわす。

「さすが、でも!!」

スザクがそう言うとなオトは後ろでバキツと言う嫌な音がした。

そしてその瞬間相手の狙いが解った。

先程のスラッシュハーケンは自分を狙った物ではない、後ろにある建物を狙ったのであると。

ハーケンによつて碎かれた瓦礫が蒼月に向けて降り注いでくる。

それを回避しながらランスロットを探すナオト。

先程の攻撃で見失ってしまったのだ。

しかし此処で運が悪いことに瓦礫に足を取られてしまい、致命的な隙を生じてしまう。

それをスザクが逃すはずがなかった。

何せルルーシユとのケンカでは一瞬の隙を見逃せば負けてしまうのだ。

ある意味ルルーシユのお陰でスザクも原作当初より色々スペックが上がっている。

物陰から現れヴァリスを撃ち込んでくる。

そしてそれが蒼月を捕らえた、そう思ったときであった。

ギューーン!!

なんと蒼月の左腕がヴァリスを受け止めたではないか。

それには呆気にとられたスザク、次は自分が致命的な隙を作ってしまった。

「しまった。」

しかし気付いたときには後の祭りである。

蒼月渾身の右ストレートがランスロットを襲う。

そしてそれをもろに喰らったランスロットは吹き飛ばされてしまう。蒼月は追撃の姿勢を見せたが動きを止める。

スザクは何事かと思っただらゲッター全体にブリタニア軍の放送が流れる。

「停戦せよ。私はエリア11の総督であるクロヴィス・ラ・ブリタニアである。

繰り返す、停戦せよ。これ以上の戦闘は認めない。」

その放送が聞こえたのである。

すると目の前の機体は放送の通り撤退を始めていった。

「これで十分かい。」

「ええ、結構です。」

そう言うトルル・シユは銃を降ろす。

しかしいつでも引き金が引けるようにする。

「次はどうすればいいかな、チエスのお相手でもしましょうか。」

「懐かしいですね、昔よくしましたよね。」

そう言うクロヴィスの顔に困惑が走る。

顔は解らないが同世代でチエスをした相手など数えるほどしかない。

しかしそのもの達はまだ本国にいるはずだ。

ましてやイレブンに肩入れするなど。

いや、まてよ。

『よく俺が勝ってましたけどね。』

居るじゃないか一人だけ。

だか彼は既に。

『しかし今はそんな暇はないのですよ。』

しかし誰が決めたそんなことは。

誰が彼が死んだと決めた。

「ま、まさか。」

クロヴィスは信じられないように口を開いた。

「ル、ルルーシュなのかい。」

そして今、運命が回り出す。

既に史実とかけ離れた歴史。

世界を変えるために動き出す少年達がぶつかり合う。

これはそのほんの序章でしかないのだから。

### 第三話 新宿ゲッター（後書き）

ずいぶん遅くなって申し訳ありません。

しかしこれからも頑張っていきたいですので応援宜しくお願いします。

## 第四話 七年という時間

「ル、ルルーシュなのかい。」

クロヴィスは信じられない物を見たように言った。

仕方がないとルルーシュは思った。

何せ自らは七年前に死んだと思われているのだ。

ナナリーを本国に返した後に混乱の中で命を落としたと報告させたからだ。

『ええ、そうです殿下。帰って参りましたが、地獄の底から。』

そう言っただけをする。

しかしそんな言葉は全くクロヴィスには聞こえていなかった。

不意にクロヴィスが立ち上がる。

ん、どうした、と思いつながらルルーシュは顔を上げる。

そしてその瞬間悪寒を感じた。

別に悪寒と言ってもヤバイというわけではない。

いや、ヤバイのはヤバイのだが。

「ルルーシュ。」

クロヴィスもといブラコン（ルルコン）がルルーシュに抱きつかうとする。

しかし無駄に鍛えていないルルーシュはそれを辛うじて回避する。

「何故避けるんだい。」

当たり前だ。誰が好んで男に抱きつかれたいと思うんだ。

生憎俺にはそんな趣味はないためクロヴィスを拒絶する。

「そうかい照れてるんだね。全くルルーシュは可愛いな。」

何故だろう、こいつは殺して良いと思えるんだ。

クロヴィスは今後のこともあるため体良く利用するために生かしておきたいのだが。

やっぱりこいつ殺して良いだろうか。

「安心しなさいルルーシュ、安心して私の胸に飛び込んできなさい。」

「プチッ！」

自分の中で何かキレる音がした気がした。気のせいではない、その証拠に自分は拳を握っている。恐らく凄まじい表情をしているのだろう。

クロヴィスがこの世の終わりのような絶望した顔になっている。しかしそんな物関係ない、この物語はシリアスで真面目な話の筈である。

その証拠に前は中々シリアスに終わっていたはずだ。

しかし何故だ、何故こいつ（クロヴィス）はその空気をぶちこわす。思えば昔からこいつはそうだった。

昔はそれで諦めていたのだがどうやら久しぶりだったのでキレてしまったようだ。

「フ、フハハハハ。どうやら此処で潰える覚悟があるようです。ね。良いでしょう、此処でいっそのことあなたを殺してからブリタニアへの反抗を始めましょうか。」

もはやキレて壊れてしまい作戦を無視し出そうとするルルーシュ。

しかしそんなことで挫折してはいけない。

何故かこの先もこの様な状況がありそうな気がしてしまうが、それはもはや諦めよう。誰とは言えんが。

そんなルルーシュを見てクロヴィスは先程と一転して跪いて謝り倒している。

「ごめんよ、ルルーシュ。頼む、頼むから殴るのだけは。」

ルルーシュは一度額に手を当てて感情をコントロールする。

「クロヴィス殿下、顔を上げてください。私は怒ってはいませんよ。」

「ひいひいひい！！！」

しかしクロヴィスはルルーシュの言葉に悲鳴を上げる。

当たり前だ、ルルーシュの笑顔は顔は笑っているが目は笑っていないという実際に見たら凄まじく怖い物である。

それを見たクロヴィスが恐れおののいたの仕方ないだろう。とりあえずクロヴィスが冷静になるまで待つとしよう。それから数分後。

「すまないねルルーシユ、情けない姿を見せてしまつて。」  
何とか総督としての対応を取り戻したクロヴィスは椅子に座つて対応する。

それを見てルルーシユはやつと立ち直つたかと思ひながらこうしていれば中々総督らしいんだがと思つていた。

元々クロヴィスは他人に任せすぎなのである、任せる前に本人の能力を上げて統治すると言うことに重要性を教えるべきなのである。それに関してはブリタニアという国は放任主義過ぎであると思える。弱肉強食の国であり力のない物は消されていく国。

しかし言い換えれば絶えず内乱が起きるかも知れない国でもあるのである。

皇帝シャルルの間は大丈夫であろう、彼は良くも悪くも力がある。内乱など起きればすぐにでも鎮圧されるだろう。

しかしその後は、次の世代が良くてもその次の世代は。

そしてそう言う国は能力のある人間が埋もれていくのであるため最後は内乱で崩壊するのが目に見えている。

『構いませんよ殿下。それより私の話を聞いてくれますか。』

「ああ、だがその前に一つ良いかい。」

『ええ、何ですか。』

何だろうと思ひルルーシユは聞く。

「その殿下というのを止めないかい、昔のように兄上と呼んでくれ。」  
「

そう言う途端ルルーシユの表情が険しくなる。

しかしそれもクロヴィスは仕方がないと思つた。

『申し訳ありませんが、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは死にました。』

此処にいるのはただの亡霊でもあり、復讐者です。』

そう言いきる。

この何処か憎めない兄を巻き込むことは出来ない。理由を知れば必ず協力するとか言い出すはずだ。

俺はなるべく巻き込みたくないのだ。

しかしそんな心の内を見破るかのようにクロヴィスはルルーシュに言う。

「嘘をついてはいけないよルルーシュ。君は復讐する気など無いだろう。」

そう言ってきたのだ。

それにはさすがにルルーシュも驚く。

こんなにクロヴィスは鋭い人間だったか。

これでは原作の知識など意味がないかも知れない。

まあ、そんな物始めから当てにしてないのだが。

「根が優しい君は復讐を本気でやるうなんて思わないだろう。」

そう言われるとルルーシュは更に困惑する。

確かにブリタニアなど憎くはない、憎いのは父親一人だ。

そしてクロヴィスはルルーシュに対して一言言う。

「確かに僕には君に兄と呼ばれる資格はないだろう。あの時も助けなかった。」

そしてそれから手を差し伸べることなどしなかった。

君が恨むのは仕方がないだろう、君が復讐を望んでいることなど無いというのは何故だが解るよ。」

そう言うクロヴィスの表情は悲しさで溢れていた。

しかしそんな考え方が出来るのなら原作では死ななかつたのではないだろうか。

そう思いつつ、クロヴィスが言った言葉に感動していた。

「君に兄上と呼べとは言わないが、君がやることの協力をさせてくれ。」

そう言いきる。

その顔は何処か清々しそうであった。

俺はそれを見て笑みがこぼれる。

『フツ、全く。兄上はどうして人の心を動かすのが得意なんでしょうか。』

そう言うとかロヴィスは感激の表情をする。

恐らく俺が兄上と言ったことにたいしてだろう。

『しかし、あなたのことを完全に信頼したわけではありませんから。』

そう言うとかロヴィスは変わらず笑顔で言う。

「それでも構わないよルルーシュ。」

そう言うって二人で笑う。

先程と違って不敵な笑みではなく信愛する者に対する笑みで。

『それでは兄上、ジエレミア卿を連れてきてくれませんか。』

「お呼びでしょうか殿下。」

そう言うってジエレミアが入ってくる。

そしてすぐにジエレミアはルルーシュ（ゼロ）の姿に気付き身構える。

格好からして先程のテロリストの一人であると言うことは解る。

「貴様、何者だ。」

そう言うって銃に手をかける。

しかしそんなジエレミアをクロヴィスが止める。

「止めよジエレミア卿。」

そう言うとかジエレミアは少し考えた後に手を離す。

「急に呼び出してすまなかったなジエレミア。まあ、そこにかけてくれ。」

そう促す、しかし開くまで臣下の礼を取るジエレミアは座らない。

ならば仕方がないと言ってクロヴィスは話を続ける。

「君を呼んだ理由は一つだ。この者と話をさせたくてな。」

そう言うってゼロを指さす。

しかしジェレミアはゼロを見て身構えてしまう。  
漆黒のマント、漆黒の仮面に身を包む男性と思われる姿に不信感を  
持ったのだ。

そしてゼロもクロヴィスに促されて立ち上がる。

『初めましてジェレミア卿。いや、直に合うのは二度目ですね。』  
そう言う。

しかしジェレミアの知り合いにこんな格好をするのはいないはずだ。  
約一名こんな格好を見て喜びそうな変わり者はいるが。  
そう思っていると開いてもどうやらその考えに察したのか、肩を落  
として言う。

『さすがにこの格好では不振すぎたか。』

そう言うのと仮面の一部を触り操作する。

するとシャキン、と言う音を立てて仮面の後方部分が開く。

そしてゆっくりと仮面をはずす。

その顔を見たときジェレミアは目を大きく開いて驚いた。  
まるで自らが尊敬する人の生き写し、そしてその養子が該当する人  
物と言えば一人しか居ないはずだ。

「ル、ルルーシュ殿下。」

ジェレミアは信じられない物を見たかのように言った。

『久しいなジェレミア、アリエス宮以来か。』

そう言うって微笑みかける。

しかしジェレミアはそんな場合ではない。

死んだはずの皇族がいて、それは自分の尊敬する人の息子で。

それが何故テロリストを？色々な考えが交差して混乱する。

『混乱するのも解るが落ち着いて聞いてくれ。これから二人には聞  
いて貰いたいことがある。』

そしてそれから二人にはシャルルの目的を全てではないが話した。  
計画が完遂すればどうなってしまうか。

それを止めるためにはどうすればいいか。

そして数十分かけて全ての話を終える。

さすがに整理しきれしていないのか二人はしばらく信じられないという顔をしていた。

しかしすぐに二人は言葉を返す。

「なるほど、それで私はどうすればいいのでしょうか（いいんだい）」

その辺とうにルルーシュは驚いた。

『二人とも、この話を信じてくれるのですか。』

こんなまるで夢物語のような話。

はつきり言っただけ信じるという方が可笑しすぎる。

しかし二人はこの話を信じてくれた、それはルルーシュにとって嬉しいことであつた。

「殿下の言葉に嘘はないと、私はそう思いましたので。」

「僕は君がそんな顔で話すときは嘘ではないと知っているからね。」

少し呆れてしまった。

『そんな理由で』

そう言うと二人は笑顔で返してくれた。

「それで十分じゃないか、弟の言葉を信じれずにどうするんだい。」

殺す気がなかったとは言え自らに銃を向けた相手によくそう言える者だ。

「主の道がもし違っていればそれを正するのが臣下の務めです。」

いつの間にか俺は主にされていたらしい。

しかしどうやら二人はこの件に協力する気満々らしい。

『全く、あなた達は。』

そう言っただけ果ててしまう。

「所で私たちは何をすれば良いんだい。」

「このジェレミア、殿下のためとあらばいかなる敵でも蹴散らしますぞ。」

そう言っただけ二人は、協力の意志を完全に見せる。

此処に後にルルーシュ最高の騎士と言われる男と、恒に傍らでルルーシュの才を愛し、絵にしていた男の二人が完成したのである。

後にこの繋がりが大きな功をなそうとは誰にも解らなかつた。

## 第四話 七年という時間（後書き）

今回は戦闘無しの会談でした。

次回も恐らく戦闘は無しで日常話だと思います。

この話での日常をお楽しみ下さい。

## キャラクター設定

ルルーシュ・ランペルージ

アッシュフォード学園高等部の二年生。

さわやかな笑顔と多少天然な所があり、ファンクラブが存在する。身体能力は低くはないがウザクやバカレンに比べると低い。

実は憑依者でとりあえずはラグナロクの接続を阻止するために奔走する。

心優しく、原作ほど力はないので（運動神経はよい）多くの部門で活躍している。

元は日本人なのでイレブン（ナンバーズ）の扱いに対して嫌悪を示す。

ナナリーは終戦後ブリタニアに返しており、原作では仲の良かった皇族とは原作ほど仲がよいわけではない（少なくともルルーシュはそう思っている）。

基本的に扇グループのことは嫌っている。

生徒会メンバーには皇族であることを話している。

賭けチエスで稼いだ金は孤児院などに寄付しており、休日などは孤児院で過ごしている。

皇族の仲ではオデュッセウスやギネヴィア、カリーヌと仲が良く特にカリーヌには恋心を抱かれていた。

KMFの腕は原作より高く、身近な者を守るためにギアスの力を手に入れる。

独自のレジスタンス組織を持っており、科学者としてラクシャータが居る。

原作のように全てを自分で使用とせずに色々と頼っている。

碧神 ハヤト

ルルーシュに転生した日本人。  
享年25才。

紅月 ナオト

カレンの兄。

極東事変のすぐ後にルルーシュと出会い主と定める。  
現在はルルーシュの片腕として戦場を舞っている。

カレン並みの腕前と並の指揮官では太刀打ちできない程の指揮能力  
を持ち、ゼロ不在の時は自らが指揮を執る。

基本は騎士としていつも側にいる。

ルルーシュの本当の願いを知っており、シャルル打倒のため戦っている。

岡崎 孝四朗

黒の騎士団のメンバー。

元軍人であり、引き締まった肉体と顔の刀傷から歴戦の強者というのが伺える。

生粋の軍人で上から命令をキツチリと遂行する事からゼロからの信頼は厚い。

KMFの腕も高く、専用機も存在している。

最年長者として軍を率いるゼロを息子のように思っている。

畑岡 隆三

黒の騎士団のメンバー。

ゼロに勧誘されて入った元一般人。

戦闘よりも組織内部の仕事の方が向いているため事務長を務めている。

個性豊かな騎士団の中で数少ない普通の人。

ルルーシュと苦勞を分かち合う。

ミレイ・アシュフォード

黒の騎士団メンバー。

黒の騎士団をルルーシュが設立したことを知って脅は……、交渉して入団する。

KMFの腕は意外と高く、乗りの良い一番隊隊長である。

リーナ・アルシド

黒の騎士団のメンバー。

技術部所属でラクシャータの補佐を務める凄い人。

ラクシャータの暴走には胃を痛めている。

新橋 京谷

黒の騎士団のメンバー。  
独特なしゃべりが特徴な変人。  
意外とKMFの腕は高い。

ラクシャータ・チャウラー

騎士団の技術部長。

数々のKMF作り出ししており、騎士団に貢献する。  
かなりの変わり者である。

赤坂 徹

黒の騎士団のメンバー。  
穏和な性格で他人から頼られるタイプの人間。  
人柄の良さで騎士団を支える。

## キャラクター設定（後書き）

多少心配のある設定ですが、どうか応援宜しくお願いします。

**第五話 襲来する魔女（前書き）**

更新遅くなり申し訳ありませんでした。

## 第五話 襲来する魔女

アシユフォード学園。

極東事変、つまりはブリタニアによる日本侵攻時に日本に滞在していたアシユフォード家によって作られる。

アシユフォードはかつて皇妃マリアンヌ、つまりはルルーシユの母親であるその人の後見人を務めていたがマリアンヌ暗殺事件の際に地位を大きく落とし更に爵位を取り上げられたのである。

この学園は一見普通の学園に見えるが裏ではルルーシユを守る要塞、防衛施設として設計されている。

学長ルーベンもルルーシユと契約を結んだ上で入学させている。

しかし契約とは名ばかりにルーベン自体がルルーシユを気に入っているため反抗活動の手助けを行っていたりもする。

また在学している生徒もかりで一部の学生はルルーシユに忠誠を誓っており、研究を行っていたり諜報活動をしていたりする。

更に黒の騎士団の中でもナイトメアの制作をしており、かつての技術力を持って今でも多くの研究が行われている。

イレブンでも関係なく通えることからゲッターの支持も高い。

無論そのイレブンもルルーシユの支援で通っており、その多くがルルーシユに忠誠を誓っている。

中身は違えどもルルーシユはルルーシユであると言えることもかもしれない。

それにこのルルーシユは重い物を背負っているが原作のルルーシユほど気負っていない為、フレンドリーな関係を築いている。

そして頭の良さもかなりの物である、これは彼の前世でもかなりの学力を持っていたためたいして苦労はしなかった。

ルルーシユにスペックがやはりかなりの恩恵である、一度見た相手を忘れないなどのチート能力。

かなりの観察力を有するルルーシユだからこそ出来るナイトメアの

動き。

体力もルルーシュと全く同じかと思ったが幼い頃の特訓が物を言った。

幾ら能力が低いとは言えそれが上昇しないわけがない。

地道な基礎練習が何年後かには大きな力となるのだ。

幼い頃はかなり苦勞したが。

母親の地獄の扱きで何とか力もついた。

と、こんな説明をしているところではなかった。

現在ルルーシュ達は生徒会で書類の処理をしている。

生徒会メンバーも勢揃いしていて全員掛かりで行っている。

生徒会のメンバーは原作通りで、その部分は別に変えずとも構わないと思っっている。

もちろん生徒会のメンバーも黒の騎士団については色々関わっている。

ちなみに残念ながらカレンの姿はない。

シユタツトフェルトにいるのかそれとも日本解放戦線にいるのか解らないがこの付近にいないのは確かだ。

まあ、別にカレンが欲しいとは思わないので構わないのだが。

しかし敵となつてくると厄介に超したこと無い。

どうにかして対策を練らないといけんな。

しかし俺も器用になつたものだ。

書類をかなりの速さで処理しながら考え事をするなんて。

始めの頃からでは考えられなかっただろう。

「ルルーシュ、書類手伝ってくれよー。」

隣から聞こえてきた情けない声に溜息をついて面倒くさそうに応える。

『はー。リヴァル、俺はお前の倍以上の書類を処理してるんだが。』

そう言うとリヴァルは、

「会長ー、何でこんなになるまでほつといたんですか。」

どうやらミレイに質問したようだ。

恐らく俺が手伝わないと踏んだのだろう、懸命な判断だ。

俺は他人の仕事を自分でやるようなことはしない。

自分でやるから成長するのだ、それが失敗でも成功でも同じ事だ。だからこそ、自分の分は自分でやる。

………。嘘だ。単純に面倒くさいからと言うこともある。

「そうですね会長、こんなに貯まってたら水泳部の方もいけないじゃないですか。」

「ミレイちゃん、さすがにこれは。」

シャーリーとーナも文句を言う。

確かにそうだろう、この頃俺が黒の騎士団で不在だったとは言え、ミレイは少なくとも俺頼かは学園にいたはずだ。

思い出したように俺が処理をしていたが焼け石に水だったようだ。

「とりあえず張り切っていくわよー。」

三人の意見など無視するかのようにミレイは書類を片付ける。

無論ルルーシの方が断然多いが。

なんだこの不合理は。などと思いつつも片付ける。

「まずは各部活の部費の処理でしょう。」

「去年みたいに乗馬部が馬で乗り込んできたりしたら大変ですよ。」  
リヴァルがそう言うのと生徒会の隣の道を乗馬部が通る。

タイミング良すぎるだろうが。

『まあ、ため込みすぎというのは納得だな。』

「ガーッ!」

ルルーシの愚痴を遮るようにミレイが声を発する。

『何ですか、藪から棒に。』

いきなりの言葉にまたかと溜息をつきながら一応質問するルルーシ。  
ユ。

「ミレイさんのやる気が出る魔法よ。」

「なんて子供仕掛けな。」

ミレイの言葉にリヴァルが呆れたように呟く。

そんな中ミレイがシャーリーの耳元で何かを呟く。

（これが早く終わればルルーシュとデートが出来るかも知れないわよ。）

それを聞いたシャーリーは俄然やる気が出た。

「私、頑張ります。」

その一言に全員が反応する。

「買収されたな。」

「ミレイちゃん人を操るの得意だから。」

『完全にやられたな。』

ちなみにこの後ルルーシュは二年生代表として一年生の交流会の準備があるためシャーリーとはデートなどしていなかった。

世の中そう甘くはないのである。

交流会の準備を終えたルルーシュは一路クラブハウスに向かった。た。

あの後もミレイの悪のりが炸裂して思った以上に時間が掛かってしまった。

原作通りにクラブハウスに住んでいるルルーシュは寮生とは違って賄いがでない。

その為自分で作るか後は誰かに作ってもらうしかない。

後は誰かに作ってもらうのだが毒物が入っている可能性があるかも知れないため基本は自分で作っている。

原作ではそんな描写はなかったが有り得ないことはない。

絶対に安全な場所などこの世界には存在していない。

少なくともルルーシュはそう思っている。

しかしどうしても遅い場合は彼女に作ってもらっているのだ。

彼女とはすぐに解ると思うが忍者の末裔で、何でも出来るハイスベツクなメイドさんだ。

扉を開けて中にはいると其処にはメイド服を着たさよこさんが料理

の準備を終えて待つていた。

原作でも知っているが彼女はかなり能力が高いのであり、はっきり言って俺以上かも知れない。

『すまないさ咲世子、生徒会で立て込んでいてな。』

そう言つて上着を脱いで渡す。

「構いません、夕食の準備は終わっています。」

そう言つてルルーシュを席に着かせる。

『そう言えば咲世子。』

「はい、何でしょうかルルーシュ様。」

ルルーシュが喋りかけると咲世子は手を止め返事をする。

『あれはどうした。』

「ルルーシュ様の自室に待機させています。」

あれとは言わなくとも解ると思うがココの事である。

そうか、と返事をして両手を合わせて。

『いただきます。』

その時には既に咲世子さんの姿は消えていた。

基本食事の時は他の部屋で作業をするか、休憩などしている。

彼女なりの心遣いなのだろう。

食事をしながら俺は考え事を始める。

ギアス、俺が手に入れるギアスは十中八九絶対遵守のギアスであるう。

俺敵にはビスマルクのギアスの方が良いのだがシャルル達の野望を打ち砕くには絶対遵守のギアスではならない。

しかし現段階でそれを手に入れるかはまた別である。

両目に宿らせるには果たして何度もギアスを使うしかないのだからか。

ギアスとは願い、ルルーシュがそう言っていたではないか。

つまりは強い願い、強力な願望を願えばいいのだ。

『まっ、そんな簡単にいけば苦労しないがな。』

そう言つて食事を続ける。

食後の片付けを咲世子に任せたルルーシュは自室へと向かった。

『相手は何百年も生きた魔女。俺の武器は知識だけだが何とかなるだろ。』

そう言っただけ扉を開ける。

すると部屋の中には俺のベットに堂々と寝転がりながら此方を睨んでいる。

はつきり言っただけでも怖い。

さすがは魔女、相手を威圧するのはお手のものらしい。

『申し訳ございません魔女殿。此方も立て込んでいましたので。ぜひと遅れてしまいました。』

努めて腰を低くして相手の出方を待つルルーシュ。

「ほう、お前は私のことを知っているかのような口ぶりだな。」

CCは俺が自分のことを知っていると言うことで驚いているようだ。ほんの少しのそれも一瞬であったため熟練者でも気付くのは難しいだろう。

しかし嘘の世界で生きてきたかつての俺からすればそんなもの丸解りだ。

だが、そんな特技を身に着けた自分に嫌になる。

『さて何のことでしょう。私には何のことかサツパリ。』

それは嘘である。

かなり昔であるがアリエス宮で何回か見たことがある。

そしてこいつが俺を知っていて近づいてきたことも。

そう思いながらそんなことを全く出さずに眉一つ動かさず話す。

無論これもルルーシュ以前の俺の特技だ。

しかし今はそんな昔話は良いだろう。

「ふん、まあいい。どうやらお前はブリタニアに対して反逆を始めたらしいな。」

その発言にも全く反応を示さないルルーシュにCCはさすがに不信

感を持つ。

これに対してはルルーシュも予想の範囲内の質問であった。そして此処はアシユフォードの施設内部。

此処にいる殆どのものは寮にいる。

ここら一体の警備をしている者達も此方の指揮下にある。

ハッキリ言つてこの場でのココの状況は悪すぎた。

『ええそうですが。それがなにか。』

「反逆を始めたとは言え、ブリタニアを倒せるとは私は思わん。」

一度そこで区切り、ルルーシュの反応を見るがルルーシュはさして気にしていない。

「そこでだ、お前に力をくれてやろう。」

勝ち誇つたようにココが言う。

祖国を深く憎み、父を殺そうとしている人間が力を求めるのは道理。無論ココもルルーシュがギアスを望むと思つているため自信たっぷりな目をしている。

『（目は口ほどに物を言うというがどうやら本当だったらしいな。）』

』

先程も言つていたが現在ギアスを得る意味など無い。

『生憎、そんな物に興味はないんでな。』

俺はバツサリと切り捨てる。

『力をくれる、そんな奴の言う力はだいたい高いリスクを負う上にいらん負担まで掛かる可能性の方が高い。』

それにそんな力など無くてもブリタニアを倒すなどやってみせる。

まず強力な力があつたとしても一人では勝てない、数を揃えて軍を作つて、それを強化することが大切なんだ。』

ココも此処まで拒絶されるとは思つていなかったのか、目を点にして此方を見ている。

生憎俺はギアスによつて起こってしまった悲しみも多く知つていからである。

『まあ、ブリタニアの皇族達に俺の所在を知られても嫌だからな。』

あなたの身の上は保証しましょう。」

そう言って一礼する。

しばらく唾然としていたCCはハッと我に返りいう。

「良いだろう、契約はまた今度にしよう（くそっ、どっいう事だ。何故こいつこんな知っているんだ）。」

CCとルルーシュの会合はルルーシュの圧勝に終わった。

**第五話 襲来する魔女（後書き）**

感想お願いします。

## 第六話 仮面を外す日（前書き）

えー、どうも期末試験やら資格試験やらでろくに寝ることも出来ず約一週間ぶりにパソコンを触る刹那です。

何とか試験諸々が終わったのでこれから挽回するつもりで頑張ります。

## 第六話 仮面を外す日

### 東京租界港区

数多くの倉庫が並び立つ港区には多くの業者が存在している。しかしそれは麻薬などの違法物を持ち込む業者もいると言つことである。

バババババツッ！

ゼロの駆る月下二式の銃弾がブリタニアのナイトメアを破壊する。それを合図に黒の騎士団のナイトメアが周囲を制圧するように進む。無論相手もナイトメアを出して反抗してくる。

しかし此方に向かつてきているナイトメアの殆どがナイトポリスなのである。

『愚かな、警察もグルという訳か。』

「クロヴィスの頃もそうだったが総督不在でブリタニア内部も腐っているのだろっ。」

ルルーシユの呟きに岡崎が応える。

総督が現在不在の中であるため軍部にもゆるみが出てきているのは確かなことだろっ。

無論それを利用しない手はない。

しかし、

「解つていても嫌な物ですね。」

『赤坂か。』

「ええ、此処に集まったナイトポリスは数は多くありません。」

「おそらく、イチブの暴走でしょうナー！」

相変わらずテンションの高い新橋が喋りながら敵機を破壊していく。

『確かに、新橋の言う通りかもしれんな。』

「だが、こんな事をする軍人や警察などが存在していると言つこと

だ。」

会話を続けながらも三人は敵機を蹴散らしていく。

売人などは歩兵が制圧しているため逃げ出させない。

「リフレイン、かつての幸せな記憶を呼び覚まし幻覚を見せる薬か。」

「

「ただし一度使えば依存性が高いため何度も使用しなければなりません。」

「使用を欠けば強力な不安と悪夢に襲われるか。麻薬のような物だな。」

「原理はおそらく同じでしょう、その効果が多少違いますが。」

「まずは、此処を落としましょうー！！」

「そうだな。」

岡崎の月下が正面のナイトメアを切り裂く。

あくまで鎮圧が目的なので、コックピットを切り裂きはしない。

ナイトメアの四股を切り落として活動不能にして歩兵にパイロットを捕縛させる。

そう言う作戦でいっている。

『フツ、これで敵にチェックをかけたな。』

そう言ったときいきなり目の前が爆発する。

おそらく敵の攻撃だったのだろう。

既に見切っていたルルーシュは容易く回避する。

そして砲撃の方角に照準を合わせると其処には他のナイトメアとは色の違う機体が立っていた。

『あれはサザールランドか。よくそんな物がある物だ。』

こんなにも早く流出している軍に呆れながら言う。

サザールランドはこの時期なら重要な機体なのだ。

多くの読者は所詮サザールランドなどと思うかも知れないが第一期の序盤ではブリタニア軍の主力を担っていたのだ。

サザールランドのお株を奪うようにグロースターや月下、紅蓮やランロットなどが登場したため完全にやられ役が定着したが実際優れ

た機体である。

なにせ、第二期のギアス奮団襲撃の際にはジェレミアはサザランドエアを使っているのだ。

つまりはこの時代のサザランドはかなり高価な物というのが理解して欲しい。

それがこうも容易く軍から流出していることが情けない。

「己、邪魔をしおつて。」

相手からの通信が来る。

どうやらかなり頭に来ているようだ。

しかしこんな事をしているのだから暴かれたときに逆ギレするのは止めて欲しい。

相手するのが面倒くさいから。

相手のサザランドがランスを構えて突っ込んでくる。

さすがにナイトポリスの機体とは全くスペックが違う。

『そんなことは関係ないがな。』

そう、確かにこの時期のサザランドは貴重で強力なナイトメアだ。だが所詮は第五世代だ、第二期でも序盤のみの活躍で後半はガンガンやられていた。

それに対してルルーシュが乗るのは月下二式だ。

第七世代相当である月下を更に改良したこの機体と所詮第五世代のサザランド。

相手は訓練を行った軍人でもない、それではこのマシンスペックを覆せるわけがない。

ルルーシュは冷静に機関銃で両足を破壊して倒れたところを制動刀で両腕を切り裂く。

これで機体の動きを封じた。

後は歩兵に任せておけばいいだろう。

状況確認のために後退していった。

そしてこの事件は後日大きく報道されることとなった。

東京租界とゲッターの境目近くにある場所。

其処にはある一つの施設が建っていた。

かつては小学校として使われていたがエリア11となったときに廃校になったためそれをルルーシュが買い取ったのだ。

買い取り金額はただ同然でそれにリフォームなどを行っただけなので大した値段はかかっていない。

そして現在其処は多くの子供達が生活する孤児院となっているのだ。ブリタニアとの戦争で親を失った子供達、孤児達が数多く存在している。

ルルーシュはそれをこの施設で預かっているのだ。

理由は幾つかある。

一つ目は良心からの行動だ。

目の前で苦しんでいた子供達を助けたかったという良心。

しかし全ての子供達を救えるわけではない。

目の前で苦しんでいた少数の子供達しか救えていない。

確かに他のゲッターからも子供を預かることも出来るだろう。

しかしそれではあまりにも効率が悪い。

食い扶持が増えればそれだけ支出が増える、そうなれば軍事的に使う金銭も減ると言うことだ。

だが、人の命を救うのに効率などあるのだろうか。

そう考えてしまうと、自分の行っていることはただの偽善だ。

『フツ、我ながら醜いな。だが、偽善と言われても守りたいものがある。』

そう呟きながら孤児院の門を開け中にはいる。

すると中には中庭程度の広さの芝生の広場が広がっていた。

そして其処には十人ぐらいの子供が元氣そうに走り回っている。

それをベンチに座って笑顔で見守っている女性が居るだけだ。

門から入ってきたルルーシュに一人の子供が気付く。

「あっ、お兄ちゃんだ。」

そう言つて走つてくる。

そしてそれを聞いた他の子供もルルーシュの方に向つてくる。

「兄ちゃん久しぶり。」

「兄ちゃん遊ぼう。」

「ルルーシュ兄ちゃんだ。」

口々に言葉を発しながら近寄ってくる。

ルルーシュからすればそれは自分に寄ってくる弟妹のようなのでかなり嬉しい。

どうやらルルーシュという人間は元々シスコ……弟妹を大切にしようだ。

まあそれは別に良いが。

『ああ、翔と綾も久しぶり。光輝大きくなつたんじゃないのか。』  
一人一人話しかけて頭を撫でてあげる。

子供達もルルーシュに頭を撫でて貰い嬉しそうに笑う。

そうしていると先程まで子供達を見守っていた女性がルルーシュの方まで歩いてくる。

「ルルーシュさん、忙しいのに来てくれてありがとう。」

そう言つてルルーシュに微笑みかけるのは子供達の世話をしている  
柊美代だ。ひこいぎ みよ

柊はルルーシュと大して変わらない年だが両親を亡くして倒れていたところをルルーシュに介抱されたのだ。

元々この孤児院を黒の騎士団のメンバーと協力して経営していたルルーシュだったが誰か専属の人間が欲しいと思つていたところなのですぐに柊を個人の副院長に雇つたのだ。

ちなみに院長はルルーシュだ。

『いや、美代もこの孤児院を任せてすまないな。』  
院長がイレブンだと何かとうるさいからだ。

ちなみにこの孤児院にはミレイ達も来たりする。

「いえ、私もあなたに恩がありますし、それに楽しいですから。」  
この会話を聞いた一人の子供が笑いながらルルーシュに言う。

「美代姉ちゃんはルル兄ちゃんが来るって聞いたら凄く喜んでるもんね。」

「じゃあ、お姉ちゃんはお兄ちゃんのことを好きなの。」  
それを聞いた柊が子供達に言う。

「こ、こら。そんなこと言わないの。」  
しかし顔をそんなに赤くしていても説得力がないことを柊は知らないのだろうか。

「でも兄ちゃんミレイ姉ちゃんとも仲が良いから。不倫だ不倫。」  
『何処でそんな言葉憶えたんだ。』

成長著しい子供達に呆れながら言うルルーシユ。  
しかしそう言っている子供達やそれを聞いているルルーシユと美代も笑顔で話している。

原作のルルーシユにはなかった光景であると言える。

原作ではいつも何処か無理をしていたような気がしたが今は頼れる者が存在しているため自由の時間が存在している。  
全てを一人でやるなど非効率的すぎる、だがかつての黒の騎士団を考えるとそれも仕方がないだろう。

ただ一人でやるのが面倒くさいというのもあるが。  
「とりあえずこれからお昼の準備をするんですけど手伝ってくれませんか。」

『そのくらいなら構わないよ。』

「えー、兄ちゃんと遊びたいのに。」  
一人の子供がそう言う。

『そう言うな、昼からしっかり遊んでやれるから。』  
そう言うって子供達を振り切ってキッチンにはいる。  
キッチンには多くの食材が並んでいる。

育ち盛りの子供達にはそれがちょうどよいのかも知れない。

『この食材からして今日はカレーか。』

「ええ、良い食材が入ったので。」

カレーは日本人なら誰もが愛する食だ。

ブリタニア人のルルーシュにしても元日本人であるためカレーは好きだ。

ちなみにカレーは元タイギリスの物である。

元はインドのカリと呼ばれており、香辛料を合わせたのが元祖カレーなのだが、香辛料を合わせるのが面倒なイギリス人がカレー粉を作ったのが現在日本に伝わるカレーの始まりと言われている。

それが明治時代に日本に伝わり日本風にアレンジされた物が現在のカレーライスとなっている。

補足だがカレーは全世界に広がっておりその地域の特色を持ったカレーが多く存在する。

香辛料をふんだんに使ったインドの元祖カレー。正式にはカリとも言う。

実際インドにはカレーという単語は存在していない。

主に汁物系が多いタイのカレー、タイ語ではゲーンと言う。

後はベトナムのカレーはカリイと呼ばれる物でタイカレーのような用法でそれプラス日本の食材も使うという物である。

何故俺はカレーの説明をしているのか謎だがとりあえずこれで説明を終えよう。

施設の子供全員集まったの昼食。

今日はルルーシュが居ると言うだけあって皆ルルーシュに話しかけている。

昨日は何があったのかこれから何して遊ぼうだとか。

複数の子供達に話しかけられているがさすがはルルーシュスペック、普通に会話できる。

多少慣れるのに時間が掛かったが今では複数の話を同時に聞くことなど楽に出来る。

『そうだな、今日はかくれんぼでもするか。』

そう言う子供達も喜ぶ。

此処に集まっている子供達の大半が小学生ぐらいの歳だ。

子供の遊びというものを体験させつつ日本の伝統的な文化に交わら

せなければならぬ。

無論かくれんぼだけではなく鬼ごっこなども行つたと言つことは言わずとも解るだろう。

そして夕食を終えた夜。

遊び疲れた子供達はすぐに寝てしまい起きているのはルルーシュと柊だけとなつた。

「今日は本当にありがとうございました。」

「いや、おれもたまには息抜きしないと持たないからな。それに子供は好きだしな。」

そう言つて中庭のベンチに座つて月を見上げながら二人で話す。

この会話の後しばらく二人とも喋らずに黙り込む。

しかしその沈黙は気まずいものではなく何処か心地よいものであつた。

美代の黒い髪を撫でるように風が吹き抜ける。

「私はルルーシュさんには感謝しています。ルルーシュさんが居なかつたら私は此処にいませんでしたから。」

おそらくそれは美代を救つたときのことを言っているのだろう。

「あれはただの偶然だつた、それに個人のがなければ助けなかつたかも知れないぞ。」

「それでも私はあなたに助けられました。」

そう言つて美代はルルーシュに微笑みかける。

それを見てルルーシュは照れくさそうに頭をかいた。

「俺も美代には感謝している、色々助けられることがあるからな。」

「いえ、私なんてただルルーシュさんの帰りを待つしかできませんから。」

「それが大切なんだ。」

「え？」

「帰りを待つてくれる存在が居るだけで人は力が出せる。だから、俺は感謝してるよ。」

「そうですね。」

それからまた沈黙が続く。

そして美代がルルーシュの肩に寄り添うように寄りかかる。ルルーシュは少し反応したが視線を変えずに月を見上げる。

「もう少しだけ、こうしていいですか。」

ルルーシュの返事はない。

しかしそれが了承の合図でもあった。

月の光は黒の皇子とそれに寄り添うものを見守るように照らし出す。ただ吹き抜ける風が今日は心地よかった。

## 第六話 仮面を外す日（後書き）

何故だ、初出場のキャラがルルーシュと良い関係に。

なんか恋人同士っぽい気がします。

カップリングはまだ未定です、もしかしたらハーレム？

ルルーシュくんの性格が全く違いますがあくまで憑依ですのでルルーシュのスペックに他人の思考と違っててください。

## 第七話 決戦に向けて

エリア11新総督赴任。

そのニユースは既に黒の騎士団の耳にも届いていた。これを知ったのは先月のことだ。

先月の終わりにゼロが情報収集中にこの情報を察知、すぐに真意を調べる。

その結果今月の初めに赴任することが決定しているらしい。

そしてそれと同時期にエリア11に総督以外にも皇族が訪れるようだ。

新たに赴任する総督はコーネリア・リ・ブリタニア。

一部の情報では訪れる皇族は彼女の妹らしい。

その知らせを聞いてルルーシュは原作の展開を思い出す。

『（おそらく総督以外で来る皇族はユフィのことだろう、だがそれ以外にも来るといふ情報がある、原作との相違か。）』

今居るのは黒の騎士団本部のゼロ特別室だ。

ゼロの部屋は日用品が揃っており泊まり込みで作業が出来るようになっていいる。

この先のことを考え、起きる戦いを想定しなければならぬ。

まず一番近い大きな戦いと言えばナリタでのコーネリア率いるブリタニア軍と日本解放戦線の戦いだ。

原作では逆落としてこれに乱入したがこれはまだ烏合の衆であった黒の騎士団の士気を高めるための作戦に過ぎない。

よって現在の黒の騎士団には不要だろう。

しかし逆落としという形は好ましいと言える、それに数で劣る黒の騎士団がブリタニア軍と戦闘を行うというのなら奇襲し勝てはないだろう。

土砂崩れを起こす必要はない、そしてこのナリタでの戦闘で京都に

黒の騎士団の存在をアピールできるだろう。

一人で考え事をしているルルーシュは部屋に入ってくる人間に気付くのが少し遅れてしまった。

「ゼロ。」

「ああ、岡崎か。どうかしたのか。」

ハッと顔を上げて岡崎を見ながら言う。

それを見て岡崎が心配したように言う。

「ゼロ、無理はするなよ。」

「ああ、だが。今度来るといふ皇族、コーネリア・リ・ブリタニア。」

」

「それは私も聞いている、「ブリタニアの魔女」だったな。」

ブリタニアの魔女、帝国の先槍と言われるギルフォート・GP・ギルバートが騎士にそれ以外にも多くの勇士を親衛隊に持ち彼女自身も先頭に立ち戦うことからそう名付けられた。

「君の姉上だけあってやりにくいか。」

「いや、コーネリアの方は問題ない、あれは良くも悪くもブリタニア人だからな。」

「では何が問題なんだ。」

「妹のユフィだ。彼女の行動パターンは読めん、何を考えて行動しているかすら解らん。」

「…………それは何も考えてないのでは。」

「それでいて、時には俺をアツと驚かせるような考えを思いつくときがある。」

何やらばからしいことで悩んでいるルルーシュに岡崎は言い言葉をかけることが出来ない。

何故かバカらしいからだ。

「そう言えば岡崎の用事は何だったんだ。」

思い出したようにゼロが言う。

「それが本題だったな、実はラクシャータが君の新型の最終調整を行いたいとの事だ。」

ラクシャータに頼んだゼロ専用の新型機。

これから先の戦いは多くの困難があるだろう。

それにすぐ対処できるように自らも強化したナイトメアで戦わなければならぬ。

その為にゼロはラクシャータに専用機を作らせたのである。

『すぐに向かおう。』

そう言っただち上がる。

そして他の部署に持って行くべき書類を持って部屋を出る。

それから数日が経ちエリア11の情勢は大きく変動していた。

コーネリアが総督として赴任し副総督としてユーフェミア・リ・ブリタニア、そして驚くことにナナリーが来ていたのだ。

まあ頼れる弟妹が少ないこともあり一緒に来たのである。

原作では黒の騎士団のデビューに使ったホテルジャックはコーネリアの作戦で僅かな犠牲と共に終結した。

今回は生徒会メンバーが行っていなかった為黒の騎士団も出勤していない。

黒の騎士団は正義の味方と名乗っているが全ての事件に関われる時間はない。

知名度を上げる為に関わってきた事件の変わりに軍備を整えているのだ。

そして、決戦の時はすぐ近くまで来ている。

ナリタの戦いだ。

ナオトや岡崎などの主力をフル出勤させて決戦に挑むつもりだ。

作戦は逆落としを使うことになるだろう。

しかし土砂崩れで起きる被害を考えれば土砂崩れは使うべきではないだろう。

現在の戦力ならば通常の奇襲で何とかなるだろう。

ただし、少し細工を加えさせて貰うが。

現状を考えれば此方の思惑通りだ。

『後は、スザクを此方に引き込みたいものだが。』  
しかしそれは欲だというものだろう。

『此処まで来たら、もう後には戻れない。』

俺は、日本を取り戻す。俺に付いてきてくれた奴らの為にも。』

第八話 黒の剣（前書き）

久々の投稿です。

## 第八話 黒の剣

新型の調整からしばらくしてエリア11の総督であるコーネリアがナリタに攻め込むという情報を得た。

黒の騎士団も無視できない勢力だが現在エリア11の反抗勢力の中で最も力を持っているのは日本解放戦線である。

そしてブリタニアはその日本解放戦線の本拠地の在処を見つけたのだ。

それがナリタである。

敵の本拠地が解れば己の手でつぶしに向かう、それがコーネリアだとルルーシュは知っている。

そうなればこの戦闘にはブリタニアの大部隊が作戦を行うことになるだろう。

そうなってしまうえば日本解放戦線は間違いなく壊滅するだろう。

解放戦線は旧日本軍の士官達を中心となった組織であり、いわば日本復興の旗印でもあるのだ。

最大勢力であるためそれを潰せばこのエリアの反抗は小さくなる、ブリタニアはそう思っているのだろう。

だが、日本人はそう簡単に他の国家に従えるほど素直ではない。

そして現在のイレブンへの扱いを考えるとそれは間違いなく無理だろう。

『解放戦線が今破られると此方も都合が悪い。あと少し囷となつて貰おうか。』

そう言つて地図を片手に布陣を考えていく。

そのルルーシュに後ろからCCCが抱きつく形で寄りかかってくる。

「何だ、自分の姉妹と戦いに行くのか。」

CCCは挑発混じりにそう言う。

それに対してルルーシュはフツと笑う。

『当たり前だろう、姉上はエリア11の総督、俺は黒の騎士団の総

帥だ。』

姉妹と戦うことにさして気にした様子もなく応える。

実際ルルーシュはコーネリアと戦うことなど気にしていない、ユフイのことは多少気にしているが前線に出てこないなので気にする必要はないだろう。

後の問題はスザクだ、しかしランスロットならナオトの蒼月が居る。

「全くいじりがいの無い奴め。」

『それは悪いことをしたな。』

「ふん、私にそんな口をきける奴はお前と彼奴ぐらいだぞ。」

そう言つて離れて何処かへ行く。

彼奴とはおそらくマリアンヌのことであろう。

そう言うところは血を引いているのだろうか。

『ま、スザクの相手はナオトに任せるとするか。』

そう言つて席を立ち部屋を出る。

ゼロが向かった先は会議室である。

ゼロが入ると其処には全幹部が勢揃いしていた。

『君たちも聞いていると思うが、今回の作戦はナリタの解放戦の本拠地を攻めるブリタニア軍との戦闘になる。』

そう言つと岡崎がゼロに質問する。

「ゼロ、この作戦の意味は何だろうか。今さら解放戦線などと協力しなくとも良いと思うが。」

岡崎の言う分も解る。

現在解放戦線の旗色は非常に悪い。

沈み掛けの船に手を貸せば此方も沈みかねない。

岡崎はそう言っているのだ。

『確かに協力する必要など無いかもしれん。しかしいずれ一斉蜂起を起こす際に味方は多い方が良いだろう。』

解放戦線が最大の勢力というのは間違いないこと。

反乱を起こすには兵はいるだけ良い。

『そしてこの作戦にはもう一つの意味がある。』

「もう一つの意味？なんだそれは。」  
ナオトがまさに意味が分からず問う。

しかしゼロの言葉に何人かはそれに気付いているようだ。

『私たちが日本人の味方と言うことを世間に示すためだ。』

「俺達は日本解放のための組織だろ、何で今さら。」

赤坂がそう言うとな新橋がゼロの代わりに応える。

「君バーカですか。」

「あ？」

「私たちは現在ブリタニアに反抗するレジスタンスと見られているのだ。」

新橋に任せられぬと畑岡が説明する。

「そう言う事よ、だから今回の作戦で解放戦を助ければ。」

「日本人の見方はただのレジスタンスではなく、日本のために戦う組織となる。」

「そう言うことよねゼロ。」

『その通りだ。』

ラクシャータ、リーナ、ミレイの言葉に頷きながら応える。

『故にこの戦いは黒の騎士団の行く末を左右する戦いとなる、貴殿等の活躍を期待している。』

そう言うて味方の士気を高める。

組織を率いていく上でこの様な行為は大きな意味をする。

後に某黒の騎士団幹部がゼロについて、

「彼は凄い人だ。だが、多少変わっていたが。」

と行っていたのはこのせいかもしれない。

決戦の時は刻一刻と近づいていた。

エリア11の総督であるコーネリア・リィ・ブリタニア率いる精鋭部隊がナリタ連山に襲来した。

前もって避難勧告すら出されていなかったため日本解放戦線はこれ

を早い段階で察知できなかった。

その為完全に奇襲される形となり対応が後手に回っていた。  
更に藤堂以下四聖剣の面々もナリタに居らず、解放戦線本部は風前の灯火となっていた。

「各部隊敵ナイトメアを殲滅しつつ前進。敵本部の入り口を特定しろ。」

コーネリアの号令でブリタニア軍が前進を進めていく。  
だが未だ後方で動かない部隊があった。  
特派である。

一応参陣しているもののコーネリアは戦場への参入を認めていない。  
それに特派はコーネリアの傘下ではなく第二皇子であるシュナイゼル・エル・ブリタニアの指揮下にあるのだ。

そんな部隊が前線で活躍するのはコーネリア派の者達からすれば面白くない。

その為特派は後方に置かれているのだ。

『よくまあこれだけ集めたものだ。』

ゼロの姿に身を包んだルルーシュが山の頂から見下ろしながら言う。  
眼下ではブリタニアと解放戦線の両軍が激突している。

奇襲された形になったとは言え日本最大の反抗組織の本拠地だ。  
かなりの兵力が存在する。

「こんな大軍と大軍のぶつかり合いは七年前以来だな。」

ナオトが言っているのはブリタニアの日本侵攻だろう。

『だが解放戦線が崩れるのも時間の問題だ。』

「まあな、それじゃ、ぼちぼち始めるか？」

ナオトがそう言うのとルルーシュはフツと笑う。

『そうだな。』

そう言っつて黒の騎士団の通信チャンネルに切り替えて全軍に通信する。

『これより我らは逆落としを仕掛け、ブリタニアに奇襲をかける。ゼロとしての言葉が団員達に伝わる。』

『全軍に命じる、この戦、絶対勝つぞ。』

「当たり前だ。」

ナオトが力強く応える。

「任せろゼロ。」

岡崎が信頼に応えるべく同意する。

「このミレイさんに任せなさい。」

ミレイがいつも通りの軽い口調で緊張をほぐす。

「必ず勝ちましょう。」

赤坂が眼鏡を外して言う。

「いつきますかー。」

新橋が軽い口調で応える。

「私の自慢の新型達が負けるわけ無いわ。」

「皆さんが頑張ってください。」

ラクシャータとリーナが応援するようにつ。

「ゼロ後方支援は俺に任せてくれ。」

畑岡がそう言って各隊に情報を伝達する。

全ての幹部の言葉を聞き届けてからルルーシュが号令をかける。

『黒の騎士団、出撃。』

ゼロの声と共に一斉にナイトメアが飛び出していく。

『零番隊を先頭に切り込むぞ。一番隊は南東のブリタニア軍を』

「了解。」

そう言って一番隊が離脱する。

『二番隊は南西だ。』

「OK」

二番隊も離脱する。

『三番隊は岡崎の遊撃隊と共にブリタニアの目を引きつけてくれ。』

「承知」

「了解しました。」

三番隊と岡崎の遊撃隊が離脱する。

これで零番隊の進路を阻む部隊は一つしかない。

『ナオトは正面の軍に切り込め、他の者はそれに続け。』

「任せとけ。」

そう言つて廻転刃刀を抜刀して切り込む。

それを援護するように周りの無頼改式が銃器を以て援護する。

「何だ。」

「て、敵だ。」

いきなりの奇襲でブリタニア軍は混乱する。

その隙をついて一気にナオトは二体のサザールランドを切り裂く。

そして他のサザールランドを周りの無頼改式で殲滅する。

素早い奇襲のためか大した抵抗を受けずに殲滅する。

他の場所でも同じようなことが起きていた。

ミレイの月下二式が敵のサザールランドを破壊する。

ミレイ率いる一番隊は騎士団内で最もブリタニア軍の数が多い。

それをミレイの妙なカリスマで統制している。

世話好きのミレイに隊員は信頼を寄せている。

その為連携は他の隊より優れているだろう。

「一気に突き崩すわよ。」

一番隊は南東で戦闘を行っていたブリタニア軍と交戦を開始する。

「敵は多勢、少し本気を出しちゃうかな。」

新橋はそう言つて敵を切り倒していく。

廻転刃刀の使い方は隊長クラスのなかでもトップクラスの新橋。

性格は変だがかなりの使い手である。

「隊長、突出しすぎないでくださいね。」

副隊長がそう言つて制止を呼びかける。

しかしその声にも大して力はない。

言つても意味のないことを知っているゆえだ。

この隊は苦勞が多いことだろう。

三番隊と岡崎率いる遊撃隊はブリタニアの部隊を強襲して自分たち

を印象づける。

「我らの役目は敵の目を引くことにある、無駄な消費は避け持久戦に持ち込め。」

「木々を利用してなるべく敵と二対一、もしくは一対一の状況を作り出せ。」

そう言つて赤坂、岡崎が敵を撃つてそれに続いて三番隊の面々が敵を誘い出し沈めていく。

一番隊、二番隊、三番隊が次々に敵を撃墜していつている。その報を聞いて零番隊も前進させる。

『よし、此処までの条件はクリアだ。』

ゼロはそう言つて機体を走らせる。

ゼロの黒い機体が山の斜面を滑るように走らせ疾走していく。

正面から数機のナイトメアが向かってくる。

『各機迎撃態勢を取れ。行くぞ。』

ゼロはそう言つて自ら敵に向かつていく。

対するブリタニア軍も謎のレジスタンスを撃つために迎撃する。

「このイレブンのテロリスト共が。」

「死んで後悔すると良い。」

そう言つてアサルトライフルを連射する。

しかしそれを先頭に行く蒼月は容易く避け廻転刃刀で切り裂く。

「ゼロ、一時の方向からナイトメアの部隊が接近中です。」

畑岡の報告してきた情報通り敵が別方向から迫ってきている。

それは聞いたゼロは隊員に通達する。

『ナオト他四名は此処で敵部隊を殲滅してくれ。後の者達は私に続け。』

「了解死ぬなよ。」

ナオトがゼロにそう言つ。

『フツ、愚問だな。』

そうゼロが返して部隊が二つに分かれる。

ナオトはゼロを追撃しようとする敵を牽制して撃破する。

「生憎テメエ等は俺が相手だぜ。行くぞ野郎共。」  
「任せてくだせえ。」

そう言つてナイトメア部隊に突っ込む。

ゼロ達も同じく敵部隊と交戦を始めようとしていた。

「敵の黒い機体を狙え、おそらく隊長クラスの筈だ。」

ブリタニア側に正確な命令が出される。

それを傍受していたゼロは、

『ほう、ブリタニアにも中々優秀な指揮官が居るようだな。だが、  
なおもゼロは自らの機体を先頭に立たせ前進する。』

「愚かなこの数に何の盾も無しに突っ込むとは、構わん撃て。」

その言葉と共に一斉に銃器が火を噴く。

それが一斉にゼロの機体を狙う。

『確かに優秀だが、残念だったな。』

ゼロがある操作を行う。

すると直撃するはずの銃弾が何かに止められる。

「どうやら成功したみたいね。」

山頂付近のトレーラーでラクシャータが呟く。

「はい実験段階でした放射牆壁、しっかりと発動を確認しました。」

リーナがそう言つて応える。

「放射牆壁は大抵の実弾を防げるから心強いけどその反面、自動で  
発動するのが難しいのよね。」

まず発動のタイミング。

放射牆壁はエナジー消費があるため発動のタイミングが大事な  
のである。

そして発動中の操作。

発動中はしっかりとレバーのスイッチを押しておかなければなら  
ないため集中力があるのである。

それらのことが一般の団員所か隊長クラスでも難しいのだ。

「でもゼロのならばそれが可能で、それにあの子のお陰でデータが取ればもつと簡単になるしね。」

ルルーシュによってデータを取り、簡易化して各ナイトメアに設置するればゼロの狙いである。

その為まずは自らが試しているのだ。

「十分に作動してますから量産化は可能ですね。」

「そういうこと。」

そうやってラクシャータはゼロの機体を眺める。

黒を基調としたカラーリングでまさにゼロの機体であることを思わせる物だ。

機体の名はミラージユ。

ラクシャータ開発陣がゼロのために作った渾身の作品だ。

そのスペックは蒼月や紫炎を越えるほどの物だ。

「ば、馬鹿な。」

「実弾が効かないだと。」

これだけの銃弾が防がれたことにブリタニア軍は動揺を隠せない。集団であるため一つの同様は多くに伝わる。

生憎それを防げるほどの指揮官は居ない。

「くそ、私に続け。所詮はナンバーズの屑だ。」

そうやってランスを構えて突撃する。

それに対してゼロは背中の大剣を抜き、突撃してきた指揮官を切り裂く。

「わ、私がイレブンの猿如きに。」

そうやってコックピットを巻き込んで爆発する。

隊長を一瞬で失ったブリタニア側は為す術もなく破壊されていく。

ブリタニアの軍人とはいえ、マリアン又直々に鍛えられていたルルーシュには敵わない。

マシンスペックもあるがそれに含めて。

『潜ってきた修羅場の数が違うんだよ。』

そして背負う物の重さもな。

そう小さく呟いて更に前進する。

「あの大剣はデュランダル、大剣でもミラージユのスペックと合わせれば素早い剣を振るうことも出来る。」

ま、それにしてもかなりの技量はあるんだけどね。」

そう言って面白そうに眺める。

『零番隊は私と共に敵を討つ。他の部隊は解放戦線の援護だ。』  
そう言ってゼロはミラージユを走らせる。

かつて姉と呼んだ者の元へ。

## 第八話 黒の剣（後書き）

ルルーシユの専用機搭乗です。

機体名の意味を考えればすぐに名前の意味がわかります。

次回はある人物が主役になります。

## 第九話 武士の戦い

ゼロからの命令を聞いた岡崎は一隊を率いて解放戦線の援護を行っていた。

「無事か」

また一人の解放戦線の兵士を助ける。

「あ、ありがとうございます。」

「私は黒の騎士団の岡崎孝四郎だ。」

そう言つと兵士が驚いたような声を上げる。

「岡崎孝四郎！！あの蔵島の奇跡と言われる藤堂中佐と肩を並べる旧日本軍三大将の一人ですか。」

「其処まで大した者ではないが、我ら黒の騎士団が解放戦線を援護する、君は後退してきなさい。」

そう言つと兵士は恐縮したような声を上げる。

「は、はい。ありがとうございます。」

そう言つて無頼が走っていく。

おそらく本拠地に撤退していくのだろう。

それを見ながら岡崎は自嘲気味に笑つ。

「日本最強の将か、だが私は自らを越える存在に出会ってしまったからな。」

それはかつて岡崎がまだ日本解放を目指そうして、ただのレジスタンスとして戦っていた頃。

とあるゲッター。

そのゲッターで岡崎率いるレジスタンスはブリタニア軍と戦闘を行っていた。

圧倒的な戦力差、自身の指揮能力には自信があった岡崎もこの状況下では負けを覚悟していた。

このまま全滅するのも時間の問題であろう、そう思っていた。そんなときであった、自身の元に発信者不明の電話が掛かってきたのは。

そして私はそれを手に取り出してみた。

すると其処から予想を超える声が聞こえてきた。

『勝ちたいか。』

それだけであった。始めは何を言っているのかわからなかった。

「君はいったい…」

『勝ちたいのかと聞いているんだ。』

私の声を遮って話しかけてくる謎の男。

始めは何かの策略かと思った。

しかし今の状況でそんなことをしても意味はない。

だからこそ、私は話を聞いてみようと思った。

「ああ、勝ちたい。」

そう言う声の主は、そうかと応えた。

そして、

『良いだろう、勝たせてやろうその代わりに私の指示に従え。』

そう言われた。

畏か、策略か、だが今は関係ない、信じるしかない。

「わかった。松平、全員につなげる。これからこの声の主の指示に

従え。」

その言葉に動揺する仲間達であったが何とか説得した。

それから少ししてまた連絡があった。

『私からのプレゼントがある、B1のポイントに向かえ、其処にプ

レゼントがある。』

そう言われて此処にいる全員がそこに行った。

すると其処にはトレーラーがあり、中にはサザンランドがあった。

『それに乗って私の指示に従え。』

「そうすれば勝てるのか。」

そう聞くと声の主は。

『愚問だな。』

そう答えた。

「よし、みんな、乗るんだ。」

そう言つて全員が搭乗する。

するとまた連絡が入る。

『まずは自分のナイトメアの画面に自分の表示シグナルがあるはずだ。』

自分の前にはL1と表示されていた。

他の者も同じだろう。

『そちらの情報がない今、その名で呼ばせてもらう。いいか。』

「構わない、良いなみんな。」

『よし、まずはP1、P2、P3、P4、P5はその先南東三十メートルの位置に向かえ。』

そこで二十三秒後に敵ナイトメアが通過するはずだ。』

「了解。」

そう言つて五機のサザンランドが進んでいく。

そして二十三秒後。

『撃て。』

そう言われて撃つと、本当に敵のナイトメアが破壊される。

「すげえ、本当だ。」

そう言つて驚く仲間達。

『P6、P7、L3、L4は東に通過する部隊を強襲。』

言われたとおり潜伏していると来たのでその敵を全滅させる。

その仲間全員に希望が生まれた。

自分では出来なかったことをやってのける声の主に嫉妬を憶えたが

それ以上に尊敬の思いが強かった。

『次にL1、L2、B1、B2は南西を通過する部隊を強襲。』

そして言われたとおり私も動き敵を殲滅していった。

それから彼の指示は見事なまでの正確さで敵を殲滅していった。

『B1はへりを破壊。』

スラツシユハーケンが放たれ敵の航空戦力を打ち落とす。

『B2、L3は挟み撃ちで敵を討ち取れ。』

二機は彼による作戦で孤立していたナイトメアを破壊する。

『L2、B5、B6、B7は一斉射撃。』

正面から来ていた部隊を一気に殲滅する。

『Pグループはそのまま前進。』

Pグループはライフルを撃ちながら敵を破壊しつつ前進していく。

『L1は残りを引き連れH3の位置に終結させる。』

それを聞いて私は全員を終結させる。

彼による指示で被害はほぼ皆無に近かった。

それから間もなくしてブリタニア軍の総攻撃が始まった。

しかし住民は既に逃げた後だったらしい。

おそらくあの声の主が戦っている間に逃がしていたのだろう。

つまりあの指示を出しながら避難を成功させていたのだ。

自身との差を感じさせられた気がした。

だが今はそれを気にする余裕はない、何せブリタニア軍の一団が此方に向かってきているのだ。

此方も全兵力を持って迎撃態勢を取るが差は歴然だ。

「くっ」

完全に負ける、それは誰もが思ったことであつた。

だが、次の瞬間、私たちは目を疑つた。

此方に向かってくるブリタニアの軍団が算を乱して後退し始めたのである。

そして聞こえてくる爆音、もしかしたら。

私はそう思った。

最初に現れたのは蒼い機体、サザーランドでもなく無頼でもない。

そして続々とナイトメアが現れる。

『そちらの状況はどうだ。』

通信でそう聞かれた。

私は呆然としていたがその声で我に返った。

「あ、ああ。此方は何ともない、全員無事だ。」

『そうか、それは良かった。』

その声は戦闘時に聞こえた厳しい声ではなく優しい声だった。

話していると前方のナイトメアが二列に別れて並び出す。

そしてその間を通るようにして一気のナイトメアが現れる。

黒い無頼を更に黒く塗ったナイトメア。

そしてそれが私たちのすぐ近くまで来る。

それを見手渡し無頼を降りた。

それに反応するかのように他の仲間もナイトメアを降りる。

それを見てかななのか、向こう側のナイトメアのハッチが開き降りてくる。

彼の仲間には多くの者達が居た、中にはブリタニア人もいた。

そして黒い無頼のコックピットが開き、一人の少年が降りてくる。

黒いマントを羽織り、黒い仮面を被った少年。

『あなたが岡崎孝四朗さんですね。』

「ああ、そうだ。きみは？」

『私はゼロ、ブリタニアを破壊する者。』

その言葉に皆が息をのむ。

あの大国ブリタニアを破壊する。

そんなことが可能なのか？

だが今回の戦いで彼の能力が底知れないと言うことがわかった。

そして彼は私にこういった。

『その戦いは苦難の道、私を信じて力を貸してくれないか。』

そう言っって手を差し出してきた。

いや、差し伸べてくれた。

だから私はいや俺は、

「君を信じよう。黒き仮面の騎士よ。」

そう言っって差し出された手を取った。

それが私と彼との出会いであった。

考え事をしていると仲間からの通信が入ってきた。

「隊長、正面に敵影が見えます。」

「そうか。」

そう応えて画面を見ると確かに敵の一団が見える。気を引き締めねばいかん。

「行くぞ松平。」

「承知。」

そう言つて自らが先行して進む。

たとえどんな敵が現れようとも、私はそれを打ち砕く、彼の願いのために！

## 第九話 武士の戦い（後書き）

今回は岡崎が主役でした。

次回も岡崎は活躍します。

意外と作者が好きなキャラだったりします。

## 第十話 決戦の終結

敵の目を引きつけるべく先行した岡崎は逆落としの奇襲によって戦力を半減させられて後退するブリタニア軍を追撃していた。

この分で行けばあと少しで接触できるだろう。

そう思っているトレーダーに写っているマークが此方を迎撃するようには止まっていることに気付いた。

おそらく殿であろう。

「敵の殿を討ち、麓の敵本陣を脅かす、ただし深追いはするな。」

岡崎の指示が飛ぶ。

それに隊員は応え全員武装を整える。

少し行くと少し広い平地に出る。

木は切り倒されて居るためおそらく何らかの建造物を建てる予定だったであろう。

そして正面には敵の機体が見える。

敵の数は五機。

此方は八機。

数の上では互角だ。

相手のナイトメアは一機がグロースターで他はサザードだ。

だが全員が落ち着いており、優秀な兵士であることが伺える。

「これは一筋縄ではいかんか。」

岡崎は舌打ちしながら呟く。

「各機それぞれは連携して当たれ、グロースターには私が当たる。」

「承知」

そう言っで一気に向かっていく。

まずは牽制として機関銃を撃つ。

グロースターはそれを容易く回避して持っているランスで突きを繰り出してくる。

岡崎の紫炎はそれを廻転刃刀で受け止めて防ぐ。

両者の武器が火花を散らしてつばぜり合いが始まる。

「相手のグロースター、中々の腕の持ち主。」

岡崎が呟く。

「テロリストにこれだけの力量を持つ者が居ようとは。」

グロースターの乗り手も岡崎の技量に驚きを隠せない。

「ふんっ」

「はあっ」

両者が一旦離れてまた打ち合う。

それからまた離れて向き合う。

他の隊員も同じように戦闘を行っている。

すると向こうからオープンチャンネルで話しかけてきた。

「我が名は、ギルフォート・GP・ギルバート。貴殿の武誠に素晴

らしきもの。」

そう言ってきた。

生粋の騎士なのであろう。

ならばこれに応えるのが武人としての勤めであろう。

「我が名は、黒の騎士団岡崎孝四郎。」

「なに！」

その名を聞いてギルフォートが驚く。

岡崎は日本軍でも名の知れた名将、それと出会えると思っていたいな

ったのだ。

「岡崎孝四郎、天地人の一人とされる日ノ本三大将の一人か。」

「貴殿の名も知っているぞ、帝国の先槍と恐れられているからな。」

「それは光栄だ、天の赤坂、地の藤堂、そして人の岡崎。かつてこ

のエリア十一を守護し続けてきた者の一人と此処でぶつかり合える

とは。」

そう言ってギルフォートは槍を構える。

対して岡崎も刀を構える。

「負けるわけにはいかない。」

「姫様のために。」

「信じる者のために。」

「ギルフォート・GP・ギルバート」

「岡崎孝四郎」

「いざ参る。」

その言葉と共に両者が進みぶつかり合う。

「はああああ！！！」

「うおおおお！！！」

そして両者の武器がぶつかり合う。

岡崎がギルフォートと戦闘を行っている頃、ルルーシュ達も同じく戦闘を行っていた。

ブリタニアの総大将、コーネリア・リイ・ブリタニアの元に行くためその障害となる部隊を破壊しながら進んでいた。

幾ら奇襲が成功し戦力が各包囲に分散されたといえども数はまだ負けている。

時間が経てばブリタニアが盛り返し大挙して押し寄せるだろう。

そうなれば幾ら黒の騎士団といえども脱出は難しくなる。

『ここからは時間の勝負だ。』

「俺達がブリタニアが盛り返すより先にコーネリアを仕留めるか撤退に持ち込む。」

『そうすればブリタニアは撤退するはずだ。』

そう言いながらも立ちはだかるナイトメアを切り裂いていく。

そんな時畑岡からゼロに通信が入った。

「ゼロ、現在地より南に進めばコーネリアのところに付くはずですよ。」

「

『そうか、わかった。』

そう言ってゼロは零番隊に通信をつなげる。

『聞いての通り零番隊はこれよりコーネリアを討つ。』

ゼロの指示を聞いた零番隊の表情が引き締まる。

今から自分たちは味方の命に関わる重要な任務を行うのだ。やれるのか？勝てるのか？そんな気持ちで渦巻いていた。

だがそんな気持ちをナオトが吹っ飛ばした。

「テメエ等。俺達はゼロが居なきゃとうの昔に死んでんだ。だってら、ゼロと心中するつもりで行くぞ。」

その声に零番隊の面々はハッとなった。

「そうですね。」

「ゼロを信じましょう。」

「ゼロとならば出来る。」

そう言っただけを鼓舞する。

それを聞いてルルーシュはフツと笑う。

こんな仮面の男を信じるとは、

『全く、お人好しな奴らだ。』

「俺達はテメエを信じててんだよ。」

そう言っただけが笑う。

『良いだろう、共に行くぞ、付いてこい。』

「……了解。」

ゼロの言葉に零番隊が応えて突撃する。

『（これで終わらせる。姉上、あなたを倒して。）』

林を抜けると道路開発のために開かれた山道をコーネリアが進んでいた。

ナオトは機関銃を構える。

『コーネリア、覚悟。』

ゼロのその言葉を合図に機関銃をナオトが放つ。

「なにつ！」

奇襲のため察知できずに直撃しそうになったが別のサザーランドが盾になったことでなんと助かる。

『チッ、一撃しとめられなかったか。』

時間をかければスザクのランスロットが来る。

そうなればかなり面倒なことになる。

「ゼロ、貴様がゼロか。」

コーネリアがオープンチャンネルで話しかけてくる。  
それに俺は応える。

『ええ、初めましてコーネリア総督。私はゼロ、黒の騎士団の総帥です。』

「フン、黒の騎士団だと、所詮はイレブンのテロリストだろう。」  
そう言って言い捨てる。

それにナオトは表情を険しくするが手は出さない。

『降伏しろ、もはやあなたは袋のネズミだ。』

そう言ってなるべく冷酷な声で言い放つ。

その声にコーネリアは凄まじいほどの悪寒を感じる。

「巫山戯るな、私はテロリスト如きに降伏などするか。降伏するぐらいなら死を選ぶ。」

そう言ってランスを構えて此方に突っ込んでくる。

『そうですか、ナオト。』

「了解。」

ゼロがナオトの名を言うとナオトは蒼月をゼロとコーネリアの間に滑り込ませてコーネリアのランスを刀で弾く。

「クツ、邪魔をするな。」

「アンタの相手俺だ。」

そう言って二人が向き合う。

今のナオトならコーネリアをすぐに捕獲できるはず。

そう思っていた、事実スペックのテクニクもナオトの方が上だ。  
だが世の中にはいつでも思わぬ出来事というのが起こる。

想定外な出来事が。

二機が打ち合おうとしたその時であった。

ドゴオオオオン！！

その爆音と共に山の斜面が削られ。

岩肌が破壊され、その煙の中から一機のナイトメアが現れた。

「総督ご無事ですか、救援に参りました。」

『ランスロット、予想より早い。』

ランスロットの乱入により更にこの場は混沌とした者になった。

『ナオトはランスロットを討て、私はコーネリアを討つ、零番隊はその他のナイトメアを足止めしろ。』

その命令でそれぞれが己の役割を果たす。

蒼月はすぐにコーネリアのグロースターを離れランスロットに向かう。

零番隊は機関銃や刀を以てブリタニア軍を牽制する。

そしてミラージュはコーネリアのグロースターに向かう。

「行くぞ白兜。」

「またあの蒼いナイトメア。」

スザクとナオトは共に火花を散らし。

「ゼロ、貴様を討つ。」

『コーネリア、あなたを倒す。』

そう言つて武器を取り向かい合う。

スザクとナオトの戦いは熾烈を極めていた。

両者共にトップレベルの腕を持ち、現在最高峰の技術をつぎ込んだ機体を持つ。

その両名がぶつかり合ったのだ。

常人では入り込めない戦いとなるのは当たり前だろう。

MVSで切り裂こうとすれば刀で受け流され。

廻転刃刀で切り裂こうとすれば素早い動きで回避され。

機関銃やヴァリスの攻撃も回避する。

「さすがに強い、でも僕は。」

「枢木スザク、前回より強くなっている。」

かつては初めて乗ったことでまだ機体になれていなかったが今回は違う。

シミュレーションや訓練を行ってきたのだ。

「だが、俺は負けられない。あいつのために。」  
「くっ、これ程の腕でテロなんて。」  
そう言つてスザクは離れる。  
だがスザクはなるべく此方の戦いを早く終わらせなければならぬ。  
向こうでは今コーネリア総督が交戦しているのだからだ。

ルルーシュとコーネリアの戦いはスザクとナオトと違いルルーシュが優勢であつた。

かつて共に遊んだりした相手だ。

手の内を読んだり性格を読んで戦うことなど簡単だ。

「ゼロがこれ程の武人とは。」

「コーネリア、やはりあなたは強い。」

優勢であるが決定打を打てていない。

まだミラージユの機体性能が完全でないこともあるがそれを差し引いても強いだろう。

「だが、私も黒の騎士団を束ねる者、そう簡単に負けられないのですよ。」

そう言つて更に攻撃を苛烈にする。

そして次第にコーネリアのグロースターが損傷していく。

「不味いな、このままでは。」

そしてその考えがコーネリアに一瞬の隙を作らせた。

「もらった。」

「しまった。」

そう感じたときには遅かつた。

デュランダルがコーネリアのグロースターの両足を破壊する。

その瞬間コックピットが飛び出して脱出する。

「逃さん。」

ハーケンを出してコックピットを狙い撃つ。

しかしどこからか投げられたランスに弾かれる。

『何!』

崖の上を見れば一機のグロースターが立っていた。

ギルフォートは岡崎が押さえている、となれば。

『ダールトンか。チツ、コーネリアに逃げられたのならば長居は無用だ。』

そう言いながら黒の騎士団全員につなげる。

『コーネリアは退けた。全体ルートDから撤退しろ。』

そう言つて零番隊が交戦しているナイトメアを牽制し撤退させた後自らも撤退しようとする。

『ナオト、お前も急げ。』

「ああ、任せとけ。」

そう言つたナオトは一旦ランスロットと距離を取る。

そして機関銃で足下を撃つて回避させる。

その瞬間にチャフスモークを放つて後退する。

機動力ではランスロット以上の蒼月である。

スザクが追撃を行おうとしたときには既に追いつけないところになっていた。

この後コーネリアは軍を再編させ、再侵攻するも既に解放戦線は逃亡していた。

それに対してコーネリアは自らの侵攻で解放戦線は逃走し戦いに勝利したと報道。

だが、黒の騎士団の内応者により黒の騎士団の参入の為でブリタニア軍が苦戦しコーネリアが撤退したことなどが民衆に広まる事となる。

その為黒の騎士団は解放戦線に取って代わる日本の星となっていた。そして京都もこの噂を聞いて黒の騎士団に興味を持ちだしていた。何よりあの桐原が大いに期待していたからだ。

「（あやつめ、中々やりおるわ。）」

桐原はかつて日本を解放し、ブリタニア皇帝を倒すといった少年を  
思い出していた。

「桐原殿、黒の騎士団、いかに見る。」

その質問に桐原は薄く笑いながら答える。

「ならば儂があやつらの真価を問うてみるとしよつ。」

そう言つて笑つていた。

そして黒の騎士団に京都より招待状が届いたのだった。

その頃赤坂に一通の手紙が届いていた。

## 第十話 決戦の終結（後書き）

今回も岡崎大活躍でした。

次回は赤坂編です。

赤坂編なのにこの小説全体に関わる重要な人物が出てきます。  
ご期待。

## 機体設定

今回は作中に搭乗する機体の説明です。  
作者が突発に考えた物もありますのでご理解を。

### ミラージュ

搭乗員 ルルーシユ

ラクシャータがルルーシユ用に作ったKMF。  
後方指揮の能力が高く、遠中近の攻撃に優れているのだがルルーシユは作中で近接戦闘ばかりしている。  
装甲が厚いため近接戦闘を得意としても行ける  
デュランダルは廻転刃刀を両手持ちにしたような剣で両手持ちになっている。

現在黒の騎士団最強の機体

### 第七世代相当機

#### 武装

高速走駆動輪

飛燕爪牙×6

内蔵機関銃

デュランダル

輻射牆壁

蒼月一式

搭乗員 ナオト

紅蓮二式の元になった機体。  
スペックが異常に高く、乗りこなせるデヴァイザーが居なかったが  
ナオトが搭乗している。

簡単に言えばLost Colorsのライ（デフォルト名）の専用  
機である月下先行式の強化版。  
ミラージユと並ぶ黒の騎士団最強機。

第七世代相当機

武装

推進機関 ランドスピナー 高機走駆動輪

輻射波動機構

廻転刃刀×1

43mmグレネードランチャー×1  
スラッシュハーケン  
飛燕爪牙×2

チャフスモーク

蒼月可翔式

搭乗者 ナオト

蒼月一式の強化版。

原作の紅蓮可翔式をモデルに制作された。  
トップクラスの機体出力を誇る。

武装

飛翔滑走翼

推進機関 ランドスピナー 高機走駆動輪

輻射波動機構

廻転刃刀×1

43mmグレネードランチャー×1

スラッシュユハーケン  
飛燕爪牙×2

チャフスモーク

紫炎

搭乗員 岡崎 松平

岡崎の専用機。

機動力に優れ敵を切り倒していく。  
原作の月下藤堂専用機を紫にして少し外見を変えたような感じ。  
岡崎の熟練した剣術と相まって黒の騎士団の中でもトップクラス。  
上記の二機と並ぶ最強機。  
一番活躍している。  
後に岡崎の部下である松平の機体となる。

## 武装

推進機関 ランドスピナー 高機走駆動輪  
左文字（廻転刃刀の強化版）  
内蔵機関銃  
スラッシュユハーケン  
飛燕爪牙×2  
チャフスモーク  
マシンガン

## 紫電

搭乗者 岡崎

岡崎の新しい専用機。  
紫炎を上回る出力で近接戦闘だけでなく遠距離にも対応した機体。  
しかし岡崎の能力の高さもあり近距離戦も最高レベル。

## 武装

飛翔滑走翼  
推進機関 ランドスピナー 高機走駆動輪  
宗近（近接戦闘用武装）  
内蔵機関銃  
スラッシュハーケン  
飛燕爪牙×6  
マシンガン

月下二式

搭乗員 ミレイ 新橋 赤坂

隊長クラスが乗る機体。  
機体ポテンシャルが原作の月下より高い。  
後に発展機が作られる。

武装

原作の月下同様。

暁

搭乗者 各隊長

月下二式に変わる隊長機。  
原作同様の高いポテンシャルを誇る。

武装

スラッシュハーケン  
飛燕爪牙 × 2

廻転刃刀（折り畳み式） × 1

内蔵型機銃 × 2

ハンドガン / バズーカ / 粘着輻射弾

月下一式

次世代一般機

無頼改式に変わる一般機。

二式ほどのポテンシャルはないが第七世代相当のKMFである。

武装

月下 + 飛翔滑走翼。

無頼改式

一般機

通常の団員が搭乗する機体。  
基本的に機動力に優れた機体。

## 機体設定（後書き）

本編も一気に加速し激化を始めます。  
作者も努力しますので感想お願いします。

## 第十一話 父親（前書き）

完全に変です。

思いつきりコードギアスから離れています。

この話は読まなくともストーリーに関わらないので読みたくない方は飛ばしてくれて構いません。

## 第十一話 父親

赤坂は変わり者揃いの黒の騎士団でまともな人間である。穏和な性格で部下から慕われていてゼロからの信頼も厚い。

だが彼の過去を知る者はそう多くは居ない。

彼の父は日本の将校であった。

多くを語らず、常に背中を示す漢。

その姿は赤坂にとつても尊敬できたし自分もそんな風になりたいという願望もあった。

しかしその父も戦争で死んでしまった。

死因は知らされていない。

だが任務中の名誉ある死であるとされている。

しかし幼い頃から聡明であった徹はそれが真実であると思えなかった。

だから知りたかった、父の本当の死因を。

それを知るためにゼロと協力した。

その為に黒の騎士団に入った。

ゼロの正体は知っている、学生であると言うこと、ブリタニアの皇族であったと言うことも。

そしてあの悲劇の皇子であることも。

それを知ってそれまで父のためだけだった戦う理由が変わった。

あの少年の背負う物を少しでも軽くするためにも。

黒の騎士団も多くの者が集まった。

最古参の幹部である赤坂も隊長として各方面で尽力している。

今はあの少年と共に戦おう、そう心に決めて。

でも心の隅に常にあった、父の死の謎への気持ち。

手元には差出人不明の手紙が一通。

書いてある文字からして日本人であると言つことは理解できる。だが今の自分に手紙を出す人間など限られている。

その者達が名前も書かずに送つてくるとは思えない。

「誰からの手紙だ。」

そう言つて封を開け中の紙を取り出す。

その中身を見た瞬間赤坂は自分の表情が凍り付いたことを理解した。動揺からか手が震える。

「どうした赤坂、そんな顔して。」

ナオトが話しかけてくるがその声すら遠くに聞こえる。

「な、何でもない。少し外の空気を吸つてくる。」

何とか気取られないようにして外に出る。

しかしおそらく今の自分は怪しいの一言だろう。

それほどまでに動揺していたのだ。

「何だつたんだ赤坂の奴？」

ナオトは首を傾げながら見送るがすぐに宴の中に戻る。

それから数日後、赤坂は姿を消した。

それに気付いたのは彼の隊の者達であった。

彼の部屋を搜索しているとある手紙が見付かったのでゼロの届けに来たのだ。

「ゼロ、これが隊長の部屋にあつた手紙です。」

「置き手紙のようですが。」

そう言つて息を切らせながら手渡してくる。

『赤坂からか。』

そう言つて封を開け手紙を見る。

一枚目は退団届け。

そして二枚目は、

黒の騎士団総帥 ゼロへ

君なら俺が黒の騎士団に入った理由を知っているだろう。今回私が出て行ったのはそれが理由でもある。

この行為は組織の人間としてやってはならないことだと思う。だが安心して欲しい、絶対に黒の騎士団のことは口外しない。それは誓って言おう。

私は自分の戦いにピリオドを打つ、たとえ結末がどうであれ私は構わない。

私は君にこれ以上の物は背負わせられない、迷惑をかけたくない。だから君は気にせず自らの行く道を行ってくれ。

これは俺の戦いだから。

これまでありがとう、君のお陰で俺は此処まで進めた。

赤坂 徹より

それを読み終えたゼロの手が痙攣しているかのように震えている。

読み終えた手紙をすぐにナオト等に回す。

無論それを読んだナオト等も震えている。

「ゼロ、すぐに赤坂のところに行きましょう。」

ミレイがそう言って詰め寄る。

「彼を連れ戻すのですヨ。」

新橋も同意する。

「仲間を見捨てておけない。」

「これ以上仲間を失う気はない。」

「彼が何処に行ったか見当は付きません。」

そう言つて幹部全員が詰め寄る。

だがそんなこと関係ない。

俺のやるべき事は一つだ。

『畑岡、すぐに赤坂の向かったポイントを割り出せ。』

そう言つと畑岡はすぐにパソコンで赤坂の居る場所を割り出す。

先程確認したが赤坂の月下が無くなっていた。

すぐに場所がわかるはずだ。

『各隊の隊長はすぐに出発の準備だ。岡崎は赤坂の部隊を率いて出撃しろ。』

そう言うのと全員が応えて準備に取りかかる。

その中でゼロは一人考えてた。

『迷惑だと、俺達は仲間だ。そんなことを気にしてどうする。』  
大切だから、自らと切り離す。

『わかっている、だがそんなの良いわけ無い。』  
必要だと思うから。

『それでも絶対に連れ戻す。』

そう言うって席を立つ。

## 第十二話 仲間（前書き）

今回も完全におかしいです。

ですが今回はストーリーでおそらく深く関わってくる存在が出てきますので読むことをオススメします。

## 第十二話 仲間

赤坂は手紙に書いてあった場所まで来る。

場所はとあるゲットー。

「私が赤坂徹だ。言われたとおり来たぞ。」

そう言うのと正面の高台の上から一人の男性が姿を現す。

その男は白い仮面を付けておりフードを被っている。

しかしその姿から異常な存在であると言ったことがわかる。

「良く来ましたね、黒の騎士団三番隊隊長、赤坂徹殿。」

「生憎既に黒の騎士団は辞めていてね、今はただの赤坂徹さ。」

そう言うて謎の男を見る。

「あなたの父、赤坂幸斗。彼の死の謎を知りたいのでしょうか。」

そう言うて笑う、いや笑ったような気がする。

「私はかつて、あなたの父上の部下でした。彼は実に優秀だった。

でも優秀すぎた。」

「どういう事だ、優秀すぎた？」

そう言うて聞く赤坂に男性は高台を降りて来る。

「彼は気付いてしまった、ブリタニアの真意に、シャルル・ジ・ブ

リタニアの狙いに。」

日本侵攻の狙い。

かつてルルーシュ君から聞いたことがあった。

ギアスという力の存在を。

父は自力でそれにたどり着いたのか。

「それはあつてはいけないこと、だから。」

「殺したとでも言うのか。日本のために戦っていた父を！」

そう言うて睨み付ける。

「当たり前ではありませんか、所詮彼は凡人、選ばれた人間である

私に敵うわけがありません。」

選ばれた人間だと。

「巫山戯るな。そんな物関係ない、アンタは所詮人殺しだ。それも仲間殺しのな。」

「仲間？私はシャルル陛下に認められた至高の存在、下等な存在と一緒にしないでくれますか。黒の騎士団も所詮は下等の集まり。」

「貴様！！」

その言葉に赤坂は腰の刀を引き抜き月下を飛び降り斬りかかる。

それに仮面の男も刀で受け止める。

「貴様だけは、俺がこの手で。」

「全く、父と似て下等な考えだ。」

「黙れ！！」

そう言つて横一閃に斬り払う。

それを跳躍することかわす。

少し離れたところに着地してやれやれといった感じで赤坂を見る。

「あなたがどう足掻こうと私には勝てないのですよ。」

そう言つて刀を向ける。

「知ったことか、俺は俺の戦いに決着を付ける。その為に貴様を倒す。」

普段の温厚な話し方から荒々しい話し方になる。

そして男に斬りかかる。

男もそれに応じて斬り合う。

型も何も無い、殺しのための刀。

両者ともに高いレベルで斬り合う。

鉄と鉄がぶつかり合い火花を散らす。

憧れた父の背中、追いつこうと必至に追いつがった。

「たとえ笑われても良い、下等だと、凡人だと笑われても構わない。」

「

それでも、

「それでも、仲間を侮辱する奴は許さねえ。」

「むかつくんですよ、仲間とか、絆とか言う奴が。」

両者が突っ込んで交差する。

その一瞬、赤坂の刀が確かに男を捕らえる。  
そしてそのまま斬り払う。  
男は胸から血を流して倒れる。  
間違いなく致命傷だ、助かるわけがない。  
だと言っのに、

「さすがはあの男の息子、さてあなたは私を何回殺せますか。」  
そう言っで立ち上がる。

「馬鹿な、死なないだ。」

赤坂が驚愕の表情に変わる。

「あなたの父は私は十回殺しましたよ。」

「化物め。」

そう言っで刀を構える。

そこで仮面の男の元に連絡が回ってくる。

それを聞いた瞬間男はニヤツと笑う。

「礼を言いますよ赤坂くん、君のお陰で黒の騎士団を尋ねる暇が省  
けました。」

「何？まさか！」

「その通り私の狙いは始めからゼロただ一人。彼を始末すること。」  
そう言う。

つまり自分が餌にされたのだ。

迷惑かけないとか言っで迷惑をかけている自分が情けない。

「生憎これあなたの相手をしている暇はなくなりました。」

そう言っで刀をしまう。

そして指を鳴らすと周りから無頼が現れる。

「解放戦線、いや違う。」

「その通り、私の支配下の者達ですよ。」

つまりこの男の部下が乗っただけで何だろう。

解放戦線の者は殺したと言っことか。

「あなたの相手は彼らに任せましょう。」

そう言って男はやって来た無頼に乗る。

俺はその瞬間一機には知って月下に乗り込む。

「クソ、また迷惑をかけた。」

そう言って月下を起動させて無頼に備える。

「この数を突破できるのならやってみなさい。」

そう言って男は無頼に乗って逃げていく。

すると無頼達が動き出して武器を構える。

「良いだろう、俺は天地人が一人、赤坂幸斗が一人息子、赤坂徹だ。」

「

そう言ってカタナを構える。」

その頃ゲッター付近では黒の騎士団が無頼の一団と交戦していた。無頼の数は此方の倍以上、大した機動力はないがこの数は厄介だ。

「邪魔をするな！」

ナオトが叫びながら無頼を破壊していく。

ミレイや岡崎等幹部団も同じように破壊していく。

だが遅々として進まない。

『これでは赤坂救出に時間が掛かりすぎる。』

ルルーシュはそう言いながら大剣で無頼を切り倒していく。

なんとしても助け出さなければならぬ。

「仲間の命が掛かってんだ、さっさと道開ける。」

「この岡崎孝四郎、友のために貴様等を討つ。」

既に何機の無頼を破壊しただろうか。

敵はまだ多くいる、だがほんの少しだけ正面に隙がある。

其処を突破すれば救出に迎えるだろう。

その先には細い通路があるだけ。

殿さえ置けば追撃は大丈夫なはずだ。

だがその殿は助かる確率は限りなく低い。それにすぐにやられれば意味がない、幹部クラスでないと意味がないだろう。

『それでもやるしかない。正面を突破する、全機行くぞ。』  
そう言つと黒の騎士団の全機体が正面に殺到する。

すぐに正面の敵を殲滅して後方に備える。

そしてルルーシュは指示を下す。

『ナオトは零番隊を指揮して各隊前進しろ。』  
そう言い放つ。

「ゼロ！」

「松平、三番隊を頼む。」

そう言つて紫炎がミラーージュに並び立つ。

「岡崎さんまで。」

ナオトがそれを見て止めようとする。

しかしそれをミレイが止める。

「行くわよナオト君。」

「ミレイ！」

「あの二人が無頼に負けるわけ無いでしょ。」

そう言つてミレイは一番隊を率いて進む。

新橋も二番隊を率いて。

松平が三番隊を率いていく。

「『行け、ナオト（紅月君）』」

「絶対死ぬなよ、零番隊俺に続け。」

そう言つてナオトも先に行く。

それを追撃しようとする三期の無頼が突っ込んでくる。

それ内二機を、

「はっ！！」

岡崎の紫炎が切り裂く。

残った一機をルルーシュのミラーージュが斬る。

「『ここから先は一步も通さん』」

そうやって二機が構える。

「構うな、数で押しつぶせ。」

指揮官の命令で一気に二機に殺到する。

対して二機はそれを受け止めて流れるような動作で斬り倒していく。正面、後方から来る敵を斬り倒して。

左右から来る敵の攻撃を回避して同士討ちを狙い破壊する。

圧倒的数的さがあるにも関わらず二機に傷一つ付けられない。

数が多い場合は連携して倒し、包囲されれば背中合わせで倒してお互いを狙う敵は二人で倒して。

ルルーシュはミラージユの輻射牆壁を駆使して大剣デュランダルを振るい。

岡崎は紫炎の機動力と改造刀左文字を以て。

敵を斬り倒す。

誰一人突破させない、

「たとえ百を超える敵が来ようとも。」

『友との絆でそれを討つ。』

立ち回り立ち替わり敵を斬り倒していく。

『友との絆がある限り。』

「戦う心は折れはせん。」

銃器を撃つてくる敵には回避して此方も銃器で応戦する。

「『友を救うまでは。負けるわけにはいかない。』」

そう叫んで斬り倒す。

先に進んだナオト達もさらなる敵と交戦していた。

「一番隊は敵の右翼を砕け。二番隊は左翼の敵を防げ。」

ナオトの指揮で数的差を覆す。

包囲されぬように動き回り敵を駆逐していく。

それに各隊の隊員達も応える。

「私たちが嘗めるんじゃないわよ。」

ミレイがそう言つて無頼の軍団を攻撃する。  
廻転刃刀で斬り倒して機関銃で敵を破壊する。  
その動きはさすが黒の騎士団の幹部であつた。  
「ワタシも斬つて斬つて斬りまくりましょう。」  
新橋が得意の剣術で斬りまくつていく。  
その姿に敵も怯えて後退していく者も出始める。  
「はああああ！！！」  
ナオトが叫んで敵を斬り倒す。  
そして向かつてくる敵に副射波動を浴びせる。  
「弾けやがれえ！！！」  
無頼を副射波動で破壊して周りを確認する。  
今敵を突破できる部隊は。  
「行つてきなさいナオト。」  
「さつさと赤坂クンを救つてきなさい。」  
ミレイと新橋が無頼を斬りながらナオトに言う。  
「ナオト隊長行つてください。」  
「赤坂隊長を救つてください。」  
松平の指揮下にある三番隊の奴らも応戦しながらナオトに言う。  
「一番隊、二番隊、三番隊のお陰で敵は足止めできている、だったら。  
「零番隊、俺達はこれより赤坂救出に向かうぞ。」  
そう言つて目の前の無頼を斬り捨てて囲みを突破する。  
蒼月に続いて無頼改式が続く。  
零番隊が突破したのを見てミレイと新橋は無頼と交戦を再開する。  
「此处で敵を釘付けにするわよ。」  
「承知しましたよアシユフオード君。」  
「了解しました。」  
ミレイの呼びかけにロイドと松平が応えて再びカタナを構える。

殿を任されたルルーシュと岡崎は襲いかかる無頼を相手に戦つてい

た。

既に二機で斬り捨てた無頼は数十機。

かなりの数を破壊したがまだ残っている。

しかし二機もまだまだ戦える状態だ。

「な、何をしている、さつさと始末しろ。」

指揮官が叫ぶが部下は先程からの二機の活躍により怯え腰になっている。

命令しても誰も戦わない。

その瞬間岡崎の紫炎が突撃して指揮官の無頼を上段斬りで真っ二つに一刀両断する。

あまりの速さに反応できずに指揮官機は一瞬で爆発する。

半分以上やられた仲間、死んだ指揮官。

こうなつてはこの部隊は混乱を始め撤退を始める。

残つて戦おうとした者も二機の前に消し炭とがす。

この場の戦いは終結したも同然であった。

赤坂は圧倒的な数で迫り来る無頼に手を焼いていた。

まさに孤軍奮闘。

スタントファンで攻撃してくる敵を斬り捨てては破壊して。

それに合わせて遠方より攻撃してくる敵の攻撃を避けて反撃する。

いかせん数が違いすぎる。

これだけの戦闘をすればエナジーの消費が早くなる。

「くっ、まだ増えるか。これじゃきりがない。」

そう言いながらも廻転刃刀で斬って伏せる。

既に何発か被弾しており、危機的状况にある。

だが信じている、あと少しすれば仲間が来ると。

しかしこの月下が破壊されるのは時間の問題だ。

どうする。

そんな時であった月下に通信が入ったのだ。

『聞こえるか赤坂!』

それは自身が最も信頼する者からの通信。

『既にナオト達がそちらの救出に向かった。あと少しだ。』

「ゼロ、俺はお前達にこれ以上の迷惑はかけられない。」  
そう言つて敵を破壊する。

だが次に返答してきたのはゼロではなかった。

「既に仲間達が君の帰還を待っている。」

岡崎からであつた。

父と同じ場所に立ち共に戦つた憧れの人。

「でも」

「ざけんな!!一緒に戦う仲間迷惑と考へんな。」

「!」

ナオトの叫びに涙腺がゆるむ。

「ナオトさん戻つてきてください。」

「絶対助けますよ。」

ミレイと新橋もそう言つ。

「隊長待つててください。」

「絶対助けに行きますから。」

三番隊の声も聞こえる。

「馬鹿言つてんじゃ・・・」

『迷惑ならこの騎士団創つたときからかけてるだろうが!!俺達全員誰かに迷惑をかけてる、でもそれを補つて支え合つのが仲間だろうが。迷惑だつていつて出て行く方が迷惑だ。それに今さら迷惑の一つや二つ増えたところで誰も気にしないだろうが。』

だから!!』

「ゼロ。」

消え入りそうな声で名を呼ぶ。

「『『『戻つてこい!!赤坂(君)』』』』」

「みんな。」

瞳から涙があふれ出る。

その通信の途中も無頼は攻撃を仕掛けてくる。

「俺は、もう迷わない。」

決めたから。

父に、仲間、友に、だって俺には。

「俺は生きる、生きて仲間と友に行く。」

そう言った瞬間的の囲いの一角が崩れる。

そして其処から数機のナイトメアが現れる。

「待たせたな赤坂。」

最高の仲間達がいるから。

## 第十二話 仲間（後書き）

やってしまいましたでしたが後悔はございません。  
今回登場した謎の存在は後々にも大きく関わってきます。

### 第十三話 キョウト

赤坂を連れ戻したルルーシュは桐原に会うべく京都に来ていた。黒の騎士団のメンバーは現在別行動を取っている。

ただ桐原泰三と会うだけなので大丈夫だと言って断ったのだ。ルルーシュは枢木家にいた頃から知り合っている。

後々のことを考えれば必ず必要になると思っていたからだ。

そしてナオトの蒼月や岡崎の紫炎、幹部達の月下も京都の支援の元で創られているのだ。

ルルーシュの専用機であるミラージユは純日本製ではないが京都の支援のお陰で強化できたことは間違いない。

その京都の主格とも言える桐原と親交があると言っことはそれだけで強い後ろ盾が出来るのだ。

現在のエリア11でそれはとても貴重な物なのだ。

『そして今、京都六家も黒の騎士団に興味を示している。桐原翁だけでなく京都六家の力を得たとならば日本人の期待の目は黒の騎士団に向く。そうなればブリタニアに対抗できるだけの求心力が手にはいる。後はタイミング、そしてブリタニア側と協力できる者が現れるだけだ。』

現在案に出ているのはクロヴィス、彼ならば協力してくれるだろう。皇位継承権も問題なレベルだ。

そう考えていると桐原がいる別荘にルルーシュは到達する。

「ルルーシュ様、桐原翁はおそらく中でお待ちでしょう。」  
言っていないかったが実は咲世子も同行している。

元々京都に仕える篠崎家の忍なのだ。

ルルーシュの案内はもちろんのこと護衛も務めている。

『すまないな咲世子。』

「いえ、私はルルーシュ様をお守りする影ですの。」  
そう言って咲世子は微笑む。

それにありがとうと礼を言いながら屋敷の中にはいる。屋敷に入るとすぐに仕えの者が現れる。

その男性は咲世子からルルーシユの荷物を預かると丁寧を持って運んでいく。

そしてもう一人の女性が、

「お二人のお部屋は此方となっております。」

そう言つて案内する。

ん？二人？

「ちよつと待て、二人だと。」

そう言つと女中はにこやかに応える。

「はい、主からそうするように言われておりますので。」

『あの狸爺。』

そう思いながら横を見ると頬を赤く染めながら、「まあ」なんて言っている咲世子がいる。

彼女の天然は昔からなので最早気にする気もない。

まあそれは後々桐原翁に相談するとして。

『桐原翁は何処に。』

「はい、奥の間でお待ちなのですが、先にお部屋の方に行かれては。」

そう言つて案内する。

案内された部屋はずいぶんと大きな部屋であった。

さすがは桐原翁と言つたところか。

「この部屋は防音ですのでご安心を。」

前言撤回、今すぐ殴らせる。

『ありがとうございます。』

礼を言つと女中は部屋から出て行く。

出て行つたのを確認してからルルーシユは溜息を付く。

この先のことを考える疲れてきた。

『とりあえず俺は桐原翁に挨拶するが咲世子はどうする。』

「もちろんお供させていただきます。」

そう言つて二人は部屋を出る。

奥の間は使用人もあまり入らない秘密の会談などに使用する部屋である。

『全く桐原翁は。』

「あの御方の奇行はいつものことではないでしょうか。」  
笑顔で読図している咲世子を横目に奥の間に歩いていく。

奥の間に行くとその中に一人の老人が座っている。

ルルーシュと咲世子にはそれが誰かすぐにわかった。

『お久しぶりですね、桐原翁。』

「お久しぶりです、桐原様。」

そう言つと桐原と呼ばれた影は楽しそうに笑いながら応える。

「久しぶりじゃな、ルルーシュ、咲世子よ。」

いかにも老獪と言つたような老人。

政略の優秀な人であるというのがわかる。事実優秀である。

「それにしても大きくなつたなルルーシュ。」

まるで孫を見るような目で見ると  
「それに良き目になつた、さすがは黒の騎士団総帥ゼロと言つたところかの。」

『桐原翁には感謝してきれませんよ。あなたのお陰でナイトメアの数も揃つた。』

「何を言つ活動資金はお主のポケットマネーであろうが。」

黒の騎士団の活動資金の殆どというか九割以上はルルーシュのポケットマネーである。

ナイトメアなどは桐原からの支援だが、運送費や食費、団員の衣服なども全てルルーシュが出している。

その為働くことの出来ないものなどが来たりするのだ。

故に人員は多い、戦闘員以外にもバイト感覚で参加できる諜報員などの仕事もある。

主婦のパート感覚とでも言つておこうか。

『しかしあなたの後ろ盾があるお陰でこの段階動くことが出来たの

ですよ。』

最悪あと三年は待つ覚悟であった。

しかし三年も待てば上手くいく保証はなかった。

エリア十一の支配を盤石するために京都の弱体化を図るだろうし世界地図を変わるだろう。

ブリタニアの支配国が増えれば動くのは難しい。

それにラグナロクも発動されるだろう。

その為にこのタイミングで動く必要があった。

『それは良いとして何故私が咲世子と同じ部屋なのですか。』

「何じゃ不満じゃったか。」

『そう言う問題ではありません、女性である咲世子と同じ部屋なのが可笑しいと言っているんです。』

「堅いことを申すな、儂としてはそのまま。」

『なりません、少なくとも今はそんな暇はありません。』

それはいつかという意味合いにも聞こえてくるのだがルルーシュはそれに気付いていない。

それを聞きながらも咲世子はニコニコ笑っている。

一緒になって抗議して欲しいとルルーシュは思うが無駄であろう。

さすがは老獪桐原。ルルーシュを弄ぶのはお手のものだろう。

「じゃがお主を呼んだのは他でもない。」

そう言うのと桐原の表情が真剣な物になる。

それは先程のおふざけの感じではない。

それを見たルルーシュも表情を引き締める。

『京都六家のことですか。』

「その通りじゃ、ナリタでの活躍を聞いてな。黒の騎士団に興味を示しだしたようじゃ。」

どうやらナリタでの作戦は上手くいったようだ。

「そこで儂がお主の真意を問うと言ったのじゃ。」

桐原は京都の中でも重鎮だ、彼が認めれば周囲も納得するだろう。

桐原翁の影響力は未だにブリタニアといえどもないがしるに出来な

い。

『真意ですか、あなたにとっては今さらでしょう。』

「じゃああの頃とは間違いなく違うじゃろう。」  
確かに。

あの頃に比べて守るものも出来たし、大切な存在も多くなった。ただブリタニアと戦っただけであったあの頃とは違う。

『ええ、確かに俺には守らねばならない者が出来ました。』

「守る者が多ければ多くの負担を強いられることになるぞ。」  
わかっている。

だがそんな事始めから覚悟している。

『覚悟の内です、俺はその全てを守るために戦い抜きます。それに支えてくれる仲間がいますから。』

「よう言うたわ。良からう、和氏ら京都は全面的に黒の騎士団を支援させてもらうぞ。」  
そう言っただけ。

これにより黒の騎士団の活動はさらに大々的になっていくことだろう。

だがルルーシュのことだ、美味く立ち回りブリタニアの包囲網をかいくぐるだろう。

いかに戦うことに飛んだコーネリアといえどもこの混沌としたエリア1で伊達に何年も生き延びていない。

この会談を機に、黒の騎士団とブリタニアの戦いは熾烈を極めていくのであった。

後にこの会合を桐原は日本の命運を左右した重大な会談として自ら語り継いだという。

「京都戦略会議」、後にそう言われる会談であった。

「おお、そうじゃった。」

『どうかしたのですか桐原翁。』

いきなり声を上げた桐原にルルーシュが質問する。

何か思い出したのだろうか。

「お主、神楽耶を憶えておるか。」

神楽耶、記憶の中に確かに存在する少女だ。

かつてまだこの国が日本と呼ばれていた頃、スザクと友よく遊んでいた少女。

スザクに比べると体力もなく、まあ比べる相手が悪すぎるが。どちらかというと聡明で頭を使った遊びの方が好きであった。良く将棋や碁などを打ったものだ。

ブリタリア人であった自分に良く懐いてきたのは憶えている。

和菓子などを勉強して創ってあげたときの笑顔は今でも憶えている。誰だロリコンといった奴は、あの時は俺もまだ十歳だったから別に問題など無い。

『当たり前でしょう、忘れるわけ無いでしょう。』

それがどうしました、と尋ねると桐原はそうかそうか、と安心したように笑う。

一体どうしたのであるうかとルルーシュは思う。

「実は今その・・・」

桐原が何か言いかけたときであった。

バタンツ！！

後ろの扉が勢いよく開けられる。

何事だと振り返る。

咲世子が構えていないということは敵襲ではないだろう。

開けられたとピラを見ると其処には可憐という言葉がピッタリな少女が立っていた。

その少女は走ってきたのか、息を整えている。

その少女には見覚えがあつた、神楽耶とどこことなく似ている気がする。

少女はルルーシュの顔を見るとニコツと笑って走り出す。そして、  
「ルルーシュにいさまー！！」

「グフツ！」

少女の強烈なタックルがルルーシュの腹部を直撃する。わかる、きつと抱きつこうとしたのだろうとわかる。しかし威力が強すぎる。

だが鍛えているルルーシュはそれを何とか持ちこたえて、少女の髪を撫でる。

「久しぶり、神楽耶。」

そう優しく声をかける。

すると蔓延の笑みを浮かべた神楽耶が此方を見てくる。

ルルーシュも優しく微笑みを返す。

「兄様、お久しぶりですわ。」

間違いなく神楽耶だと確信する。

「神楽耶様、皇家の当主としてもう少しお淑やかに入ってきなされ。」

「まあ桐原。久しぶりにルルーシュ兄様に会うというのにそんなこと気にしていられませんか。」

皇族としての礼儀をそんなことと斬り捨てる神楽耶、まったく成長した物だ。

ルルーシュが違うベクトルで感心していると神楽耶が一旦離れる。

「お久しぶりですわルルーシュ兄様、七年ぶりと言った物でしょうか。」

「そうだな、最後にあつたのはアシュフォード家に保護されるときだったな。」

「はい、あの頃よりまたお会いできると信じておりましたわ。」  
そう言つて微笑んでくる。

皇神楽耶にとってルルーシュとは兄のような存在で憧れの存在だ。ルルーシュにとって神楽耶は守るべき妹的な存在だ。

ある意味原作のナナリーのように可愛がっていた。

そうなれば神楽耶がルルーシュに懐くのも当たり前である。

先程までの重苦しい雰囲気は何処にもない、咲世子も二人のことを

ニコニコしながら見ている。

咲世子にとつてこの二人は弟と妹のような存在なのだ。

桐原からすればできの良い孫達と言ったところであるうか。

それから四人は床に座って色々な話を話し始めた。

もしかしたら桐原はこのことを予想していたのかも知れない。

やはり食えない男だ。

「全く兄様は少しぐらい連絡してくださいれば良かったのに。」

「全くですな、神楽耶様など常にルルーシュ殿のことを考えていた

からのう」

「桐原！」

桐原の発言に神楽耶が頬を赤らめながら声を荒げる。

それを見てルルーシュは微笑みながら神楽耶の髪を撫でる。

『ありがとう。』

ルルーシュは一言そう言った。

それから数日間京都で過ごしたルルーシュは東京へ帰る。

新たな決意を胸に秘めて。

## 第十四話 ギアスユーザー

東京に帰ってきたルルーシュに一つの報告が来る。  
その報告を聞いたルルーシュはやっとかと呟く。

「枢木スザクです、宜しくお願いします。」  
スザクが転校してきたのだ。

本来なら既に転校してきているはずなのだがルルーシュがクロヴィ  
スを殺害せずにしたため、自然と純血派の混乱を起さずにするだ  
ためユーフェミアとスザクが親しくなるイベントが起きなかったの  
だろう。

だが今回のナリタでの活躍でユーフェミアと知り合ったのだろう。  
そして結果的にアシュフォード学園に転入してきたのだろう。別に  
作者が忘れていたわけではない。

自己紹介を終えたスザクが近くに来る。

「宜しく枢木君。」

意味ありげな笑みを浮かべてスザクに言う。

それを見てスザクも察したのか。

「宜しくランペルージ君。」

その後リヴァルが絡んできたが其処は省いておこう。

そして休み時間にスザクに向けて合図をして教室を出る。

それを見たスザクも少し時間をおいてから教室を出る。

二人は屋上で話を始めた。

「しかし驚いたぞスザク、お前が転入してくるなんてな。」  
ルルーシュが笑いながら話す。

「うん、ある人の好意だね。」

「ユフィか。」

「うん、ってなんでわかったの？」

スザクはルルーシュがいきなり当てたことに驚く。

当たり前だ、一般人の筈のルルーシュがすぐに当てたのだから。

『簡単だろう。まずは学校に通わせることが出来るように出来るほどの力を持つ人物はこのエリア11でもごく僅かだ。』

そしてその中から最も可能性が高いのはユフィ以外にはいないからな。』

それを聞いてスザクは啞然とする。

「ルルーシュ、君この七年間で更に能力が上がってない。」

昔から優秀すぎたルルーシュの能力を知っているスザクであったが此処までとは思わなかった。

まあ原作を知っているからであってただ考えられる相手が納得できるこじつけを言っただけなのだが。

『スザク、やっぱり軍人になったんだな。』

それを言うときスザクは少し悲しそうな表情をして応える。

「まあね。せめてこの国を守りたいんだ。」

『同胞を討つことになってもか。』

「覚悟は出来てるよ、たとえ裏切り者や悪だと言われても構わない。」

スザクは真つ直ぐな目でそう告げた。

『そうか、わかった（スザクを此方に引き込むなんて、無理だな）。』

あの真つ直ぐ下目には強い信念があった。

その信念が揺らぐ大きな事が起きない限りあいつはあちら側にいるだろう。

『がんばれよ、スザク。』

全く変わらぬ信念を貫く強さを持つ幼なじみにそう言って笑いかける。

久しぶりにクラブハウスに帰ってきたルルーシュが目にしたのは机いっぱい広がるピザの箱の山であった。

犯人など考えるまでもない。

『CCC』

「何だ。」

一切悪びれる感じもなくCCCが応える。  
それが直奇立たせるが気にとめない。

『同居するというのは相手に迷惑をかけて言い訳でない。自分で汚した物は自分で片づける。』

「面倒だ。そもそも私が何故。」

CCCがあしらうように言う。

『CCC。もう一度言うぞ、自分の分は自分でやれ。それが此処での鉄則だ。』

そう言つてCCCの肩を掴む。

はつきり言つて現在のルルーシユの表情はかなり怖い。

肩を掴まれるまでルルーシユの顔を見なかったCCCはその阿修羅のような形相に声にならない悲鳴を上げる。

『CCC。』

「な、なんだ。」

気丈に振る舞うがかなり怯えている。

まあ誰でも逃げ出したいと思うだろう。

『次は無いからな。』

そう言つて片付けを始める。

ピザの箱を綺麗に整頓してゴミ箱の中に入れる。

主婦顔負けの速さで汚れた箇所を拭いていく。

だがルルーシユは知らなかった。

CCCを狙う影がすぐ近くまで迫ってきていることを。

「CCC、やっと君に会えるよ。」

ヘッドフォンを耳に付けた男性が空港に降り立っていた。

この男の願いがルルーシユをさらなる修羅道へと誘う。

王の力を得ると引換に。

## 第十五話 ギアスとの戦い

ルルーシュは租界を歩きながら買い物をしていた。

学校は休日の為無い、生徒会の仕事も全て終わらせてあるため気にせず出来るのだ。

ただし現在ミレイは貯まっている自分の分の仕事をリヴァルの援護を受けながら処理しているのだが。

『まあリヴァルも会長と一緒にいられるんだ、本望だろう。』

そんなことはないだろう、彼も休日は休みたいはず。

「ごめんねリヴァル。」

「大丈夫ですよ会長（サンキュールルーシュ）。」  
訂正とても満足している。

生徒会室で二人つきりという状況にリヴァルは悪友に礼を言うのであった。

そんなことを知ってか知らずかルルーシュは外出用の革ジャンとジーンズを着て探索する。

『おじさん、いつものをお願いします。』

「おつ、坊主じゃねえか。ちよつとまつとけすぐに用意するから。」

この和菓子屋はルルーシュの行きつけであつて、租界にできたときから言っている。

今ではこの様な会話で注文が出来るレベルである。

料理上手のルルーシュは中学の時に此処で和菓子の修行をしたという経歴があるのだ。

「ほらよ坊主。」

『ありがとうございます。また来ますから。』

そう言つて袋をもらつとルルーシュは帰つて行く。

ちなみにこの和菓子は自宅用と生徒会用である。

その後目の付いた場所をうろつろしていると日も傾き夕暮れ時になつていた。

帰宅する人や外食に向かう人が多くいるためルルーシュは人が少なくなつた公園へと来ていた。

夕日が照らし奇麗に噴水の水が光この公園、ルルーシュはいつもと違う感覚を覚えた。

『何だ、妙に強い視線を感じる。』

まさかココが抜け出てきているというのではないだろうな。

そう思つたまさにその瞬間であつた。

『いきなり視線が強くなつた、』

それは殺気にも似たような視線であつた。

何処にいる。

そう思つて周囲を見渡す。

だが此方に強い視線を向けている人物は見られない。

『だが間違いない。この近くに。』

そう言つた瞬間であつた。

後ろに気配を感じた。

「誰がいるのかな。」

そう言われた瞬間急いでその場を離れて後ろを向く。

其処には背の高い男性がいた。

馬鹿な、こいつ何時の間に。

「いつからいた、かな。」

俺の考えを読んだ。

そうかこいつがマオ。

思考を読み取るギアスの持ち主か。

「へえ、何で僕のギアスのこと知ってるの。」

『（何故疑問を持つ、俺の前世の記憶を読めばすぐにわかるはずだろっ。）』

マオのギアスなら前世のことをすぐにばれる。

だからなるべく速めに始末したい、そう思っていた。

だがどうやら前世の記憶については何故か読めてないらしい。

『（こいつが彼奴の言っていた記憶のブラックボックスって言う奴

か。』

この世界に送り出した存在が言っていたことを思い出す。

「噂通りの頭の持ち主だね。僕のことを考えている最中にまた別のことを考える。」

そしてこの状況をどうするかと言うこともまた同時に考える。」

そう言っただけで拍手する。

『貴様、一体何者だ。』

CC関連であることは間違いない、だが俺はギアスを持っていないはずだが。

「CC関係であることは間違いないよ、でもギアスは関係ない。僕はCCに会いたいただけなんだよ。」

つまりはルルーシュのCCに対する記憶を辿ってきたらしい。

『なるほどな、だがCCに一体何のようだ。』

「君には関係ないよ、捨てられた皇子さま。」

やはり、ギアスか。

間違はなく原作通りのギアスの持ち主だ。

「原作？なんだいそれは。」

チツ、こいつの前では下手なことは考えられない。

「まあいいや、今日は挨拶程度で済ましておくよ。」

そう言うとマオは何処かへ歩いていった。

『予想以上に厄介な相手だな。』

ルルーシュはそう言うのと落とした荷物もって帰路につく。新たに現れた強敵に備えるために。

『CC』

ルルーシュはCCの部屋の扉を開けて中にはいる。

そこにはチーズ君を抱いて寝転がっている。

「なんだルルーシュか、どうした？」

だるそうにCCが尋ねる。

『マオという男を知っているか。』  
そう言うとココの表情が一瞬固まった。

『いやわ』そうか、やはりな。』まだ最後まで言っていないぞ。』  
ココの言葉は当てに出来ないと知っているの、表情だけで読み取るルルーシュ。

『まあいい、そつだ私の契約者だ。』  
ココが諦めて言う。

こうした場合のルルーシュは絶対に詮索を諦めない。  
共に過ごしている内にそう言うトコには気付いたよつだ。

『思考を読み取るギアス、厄介相手だな。』

『ほう、もう見破つたのか。さすがと言うべきか。』  
ココは感心したように言う。

『むこうが種明かししてくれたからな。それでどうするんだ。』  
『どうするというのはどうということだ。』

ココは起きあがって聞いてくる。  
『簡単だ、マオの元に行くかと言うことだ。』

『私はマオを捨てた。今さら会うことはないさ。』  
そう言つてチーズ君に抱きつく。

しかしココの顔には後悔や苦念の想いがあつた。  
やはりココも人だ。

そう思うことが出来た瞬間だつた。  
そんな時であつたルルーシュの携帯に着信が来た。

相手の名を見たとき、ルルーシュの表情が凍り付いた。

「No Number」  
確かにそう書いてあつた。  
ルルーシュは携帯に出る。

『何のよつだマオ。』  
「ルルーシュには用はないよ、僕はココに用があるんだ。」  
どうやらマオはココと話がしたいよつだ。

まあ予想は出来ていたが。

『CCC、マオからだ。』

そう言ってCCCに携帯を渡す。  
するとCCCは話を始める。

ルルーシュは話の邪魔にならないように外に出る。  
それからしばらくするとCCCが出てくる。

「世話になったな、私はマオの元に行く。」

そう言うのと携帯をルルーシュに返して歩いていく。

そして外に出るための扉に手をかけたとき、ルルーシュが口を開いた。

『マオを殺すのか。』

「!!--」

CCCの手が止まる。

「何を言っている。」

だがその言葉にいつもの堂々としたものはない。

『いや、そう思ったただけだ。』

「その通りだよ、わたしはあいつを捨てたのだからな。」

そう言うのとドアを開けて外へ出て行く。

それをルルーシュはしばし見つめていると。

不意に隣に気配を感じる。

「ルルーシュ様、バイクの用意が出来ました。」

咲き世子そう言うってキーを渡してくる。

『相変わらず用意が良いな。』

「ルルーシュ様の護衛ですから。」

『咲世子には勝てないな。』

笑いながらそう言う。

「護衛として共に参りましょうか。」

そう言われてルルーシュは考える。

『頼む。』

そう言うのとルルーシュはバイクの老いてある地下車庫まで走って急ぐ。

サイドカーに咲世子を乗せて自ら運転する。  
全速力でクロヴィスランドへとバイクを走らせる。  
『勝手にやられるんじゃないぞCC、借りは返してもらっからな。』

CCはクロヴィスランドの中でマオが来るのを待っていた。  
おそらく近くにいるだろう。

すると急にクロヴィスランドの灯りがつき始める。  
観覧車が周り、メリーゴーランドが動き出す。

するとメリードローラン度で回っている白馬の中の一匹にマオが乗っていた。

それからマオが降りて、CCと話を始める。  
それを監視カメラでルルーシュは確認する。

『マオ、お前は悲しい男だ。』  
ルルーシュはノートパソコンを操作しながらそう呟く。

『CCに固執するあまり、自身を失っている。』  
ただ一つだけに固執すれば周囲が見えなくなる。

それは周囲からすればただ厄災となる。  
『ただCCと共にいたいと願う事は間違いじゃないさ。』

ただその為の方法が周囲からは認められないだけ。  
『俺はお前を否定はしない。だがな、乗りかかった船だ。最後まで

付き合ってやるさ。』  
そう言っつてノートパソコンを閉じる。

「CC、やっぱり君は僕を撃てなかった。」  
マオの持つ銃によって撃たれたCCは膝を付く。

いかに不死身とは言え痛覚はある。  
CCはマオに向かって呼びかける。

しかし笑いながらマオはCCを撃つ。

最早狂っているとしか言えない。

ついにマオはチェーンソーを持ち出す。

おそらくココを切り刻んでバツクに詰めるのだろう。

『ココを思うあまりココの心が見てない、だからお前はココから捨てられたんだよ。』

その言葉と共に二人の目の前のヴィジョンがルルーシユの姿を映し出す。

「ルルーシユ、何で。」

『俺の家にかけて住み込んで勝手に出て行くと、借りも返さずに』

ルルーシユはココに対して優しく語りかける。

「僕のココに勝手に話しかけるな。」

マオは叫ぶように言う。

『マオお前のギアスは読めている、さすがにこの東京タワーからは貴様のギアスも聞かないだろう。』

マオに向かって勝ち誇ったような顔で言う。

「確かに僕のギアスは君には届かない、でもそれでどうするって言うんだい。」

確かにそうである。

東京タワーからでは何をしてもマオを倒すことは出来ない。

それを知ってかマオは少しばかり冷静さを取り戻す。

『マオ、お前は勘違いをしているぞ。』

「何をだよ。」

マオの目は血走っておりルルーシユを締め殺さんとしている。

『俺はお前と違ってギアスを持っていない。なのに何故ココが俺の元にいたと思う。』

「何を言ってる。」

『ココはギアスを与えたお前よりもギアスを与えなかった俺を選んだんだよ。お前が得られなかったココからの信頼を得たんだよ。』  
お陰で色々面倒を被ったが。

それでも俺はココを家族として扱った。

『お前は自分のことだけしか考えていない、だが俺はココのことも思いつている俺はお前が得られなかった信頼を勝ち取ったんだよ。』

「嘘だ。」

『嘘じゃないさ。もう一度言っぞ、ココは俺のものだ。』

「違う、違う違う違う違う。ココは、ずっと昔から僕の。」

最早マオに冷静さなど存在しなかった。

ココのみに執着したマオには育ててくれる相手がいなかった。

それがマオがルルーシュに勝てない理由だ。

確かに相手の心を読むというのは舌戦では有利だ。

しかしそれを封じられたら？それしか勝ち目がないマオにルルーシュの言葉に太刀打ちできるはずがなかった。

そしてその先にある物は。

「ルルーシュ、出てこい！！お前をのぞき見てやる。」

そう言っつてヴィジョンをチェインソーで切り刻む。

『マオ、お前の負けだよ。』

「何を言っつてんだ、もういい、僕はココを」

マオがそう言っつた瞬間であった。

パン！！

「！！！！」

一つの銃弾がマオの肩を貫く。

後ろを振り向くと其処には拳銃を構えて立っているルルーシュの姿があった。

「何で、どうして。」

『お前馬鹿か、録画だよ。』

「嘘だ、だつて僕と会話していたじゃないか。」

確かにルルーシュはココやマオと会話をしていた。

『簡単だろっ、ココやお前の思考を読んだんだよ。ココは兎も角お前は単純だからな。』

そう、ルルーシュはマオに対して自らが東京タワーにいるという事を印象づけたのだ。

そして会話でマオの頭をヴィジョンに釘付けにしてその隙に近づくとあまり近距离に近づきすぎるとばれるのでマオがヴィジョンを斬りつけて冷静さを完全に失ったときに一気に近づくと。

精神が不安になったときのマオのギアスは数？に狭まる。

「僕の気を逸らすためにモニターを使った。」

『そう言うことだ、マオ。』

「君を此処で殺してやる。」

マオは持っているチェインソーでルルーシュに斬りかかる。

「死ねえ！！」

しかしルルーシュはそれを左右に動きながら避ける。

「なんで当たらないんだよ、君の動く方向を読んでいるのに。」

『残念だったな、俺は避け方を考えながらお前の刃の動きで避けているんだ。』

来たものをただ避けるだけ、それに思考はいらない。

あるのは直感だけだ。

それならばマオのギアスは意味をなさない。

「はあはあはあ。」

『それがお前の限界だよ、マオ。』

「だまれええええ！！」

もう一度チェインソーを構えようと振りかぶる。

ヒュン

ザクッ

「ぐあっ！！」

いきなり飛んできたクナイの所為でチェインソーを落としてしまう。

その隙をルルーシュは見逃さなかった。

マオの側に駆け寄り拳を握りしめる。

『吹っ飛べ。』

顔を思いつき殴り飛ばす。

力一杯殴り飛ばされたマオは吹っ飛んで近くの建設物に衝突する。

『これでお終いだ、マオ。』

そう言っつて銃口をマオに向ける。

「君を絶対殺す、僕が絶対に。」

マオが叫ぶ。

『言い残すことはそれで十分か。』

そう言っつて引き金を引こうとした瞬間。

マオが懐から何かを取り出し投げてつけてくる。

それはルルーシユは撃ち抜く。

その瞬間それが破裂して周囲に煙幕を振りまく。

『くっ!!!』

煙幕が張れたときには既にマオの姿はなかった。

『ちっ、逃げられたか。』

「追いますか。」

咲世子が現れる。

『いや良い、いずれまた姿を現すだろう、その時必ず殺す。』

そう言っつとルルーシユはココを抱き上げる。

『全く、無茶をしてくれる。』

「なんでだ?」

『なにがだ?』

ココの言葉にルルーシユが聞き返す。

「なんでお前はこんな私を助けに来てくれる。私はマオを捨てて、

そしてお前まで利用しようとした。それなのに。」

『そんなことは関係ない。』

「何を」

言っつている。そう言っつとするとココを遮っつてルルーシユは話す。

『お前は短いとはいえ、同じ屋根の下で過ごしたんだ。俺はお前が

どう思っつているかは知らんが家族だと思っつている。』

「私とお前は。」

『家族は血のつながりだけじゃない、共にいたいと思っつこと、守り

たいと想うこと、そんな絆を持つ家族も俺は好きだ。』  
だから家族を傷つける奴は許さない。

ルルーシュはそう言いはなつた。

ルルーシュの中では咲世子も家族であり、共に過ごしたCCも家族だと思っっているのだ。

「初めてだよ、私を家族だと言ってくれる奴は。」

CCはそう言った。

これまで不老不死だったことで多くの嫌な思い出があった。  
クロヴィスのように実験道具にされることも会った。

だがルルーシュのように家族と言ってくれる存在はいなかった。

「しらゆきだ。」

『?』

「私の名前だ。」

ルルーシュは驚いた。

CCが名を教えたことに。まさか自分に教えてくれると思っていなかったのだ。

『ならシラユキ、頼みたいことがある。』

俺は行こう、修羅の道へ。  
再び。

## 第十五話 ギアスとの戦い（後書き）

えー今回出てきたココの本名。

原作ココの本名ではありませんので。

あくまでこの話のみのオリジナル設定ですのでご注意ください。

## 第十六話 王の力

マオとの戦いを終えたルルーシュは学校の授業を受けていた。元々頭の良いルルーシュだ、基本授業は適当にしても良いが真面目に受けている。

こういうところで頑張らなければ成績が良かろうとも出席日数的に危なくなるからだ。

スザクも同じく軍部に所属しているため欠席は多い、補習の場合は道ずれにしよう。

なんて思いながら授業を受ける。

そしてチャイムの音と共に先生が授業を終えて出て行く。

これから昼休みだ。

ルルーシュは席を立つとスザクの机に風呂敷に包まれた箱を置く。

「ルルーシュ、これ。」

『お前の分の弁当だ、どうせ持ってきたカリーメトで食べようと思ったんだらう。』

その言葉にスザクはうつ、と言う。

凶星だったようだ。

『軍に所属しているんだからせめて飯ぐらい今期のつくものを食べ。』

『  
「ありがとうルルーシュ、何せ職場の人の作る料理は。」  
フツと溜息をつきながらスザクはセシルの作った料理を思い出す。

それを知っているルルーシュも、

『それはドンマイだな。』

「言わないでよルルーシュ。」

そう言いながらスザクはもらった弁当をルルーシュは自分の弁当を開ける。

其処には素晴らしい料理の数々が広がっていた。

スザクはこんなもの食べるの何時ぶりだろうと遠目をする。

『スザク、悟ったような顔をする前に食べ。』

「そうだね。」

そう言つてスザクは弁当にありつく。

そして一口食べて、

「相変わらず凄まじい腕前だねルルーシュ。」

あまりのうまさに涙が出てきそうになったスザクであった。

『そう言えばお前勉強の方は大丈夫か。』

「愚問だね。」

元気よく言つがどう考えても駄目な方の意味だろう。

スザクの馬鹿さはよく知っている。

昔から枢木家の跡取りというのに遊んでばかりだった。

そう言う意味では神楽耶の方が聡明であった。

『わからないところがあつたら放課後暇なときに来い、少しぐらいなら教えてやる。』

はあっと溜息をつきながらルルーシュは言う。

「ありがとうルルーシュ。」

スザクが笑顔で言う。

スザクにとっては知り合いのいないアシュフォード学園だ。

経歴が経歴だけに色々不安も多かったためルルーシュという存在が心強いのだ。

最初は他人のふりをするつもりだったスザクもルルーシュに握られたかつての弱みの前に屈した。

その後強制的に生徒会に入れられた。

軍部のスザクにせめて学校にいる間だけでも学生をやらせてやろうと考えたのだ。

『安心しろ、一週間で馬鹿でもわかる集中講座をしてやる。』

訂正、ただ楽しんでるだけかも知れない。

「ははは、お手柔らかに。」

スザクも乾いた笑いをこぼす。

だがスザクもルルーシュのことをよく知る人物だ。

ルルーシュが優しいことぐらい知っている。

ただ厳しいことには厳しいが。

そしてそう言うことを話しながら昼休みを過ごす二人を周囲の女子生徒は。

「……（己、枢木スザク。私たちのルルーシュ様となんて親しい態度。許すまじ。）……」

よくわからないところで思わぬ恨みを買ってしまったスザクであった。

ちなみにスザクとルルーシュが親友であることは同級生も知っている。

スザクに嫌がらせをした生徒ルルーシュが叩きのめしたことがあるからだ。

放課後、二人は生徒会で仕事していた。

ミレイはアシユフオード関係で、リヴァルはさぼり、シャーリーは水泳部、ニーナは地下倉庫で何かしているのだろう。

「ルルーシュ、僕は。」

「お前がブリタニア軍に入ったことなら構わない。それがお前が信じた道なんだから。」

そう言うとスザクは驚いたような顔をするが、すぐに笑顔になる。

「うん。罪を償うと関係ない、僕は今度は軍人としてこの日本を守りたいんだ。」

「そうだな、なら守ってくれよスザク。」

「当たり前だよ、僕は君を守る者だよ。」

そう言っ二人で笑い合う。

この時間を大切にしよう、ルルーシュはそう思った。だが、この時既に彼が学園内に侵入していた。

「君を殺すよルル。」

そして翌日ルルーシュが授業を受けた後の休み時間。

ルルーシュが気休めのために屋上に来ていると携帯が鳴る。

『来たか。』

そう呟くとルルーシュは携帯を手に取り出る。

「ルルかい。」

予想通りの声にルルーシュは至って冷静に応える。

『なんだマオ、俺に用か。』

「君の学校の姿は見せてもらったよ。」

どうやらマオは既に学園内いるようだ。

面倒だな。

そして次に出された言葉にルルーシュは冷静さを無くす。

「其処の建物には爆弾を仕掛けてもらったよ。」

『何だと、此処の生徒は関係ないだろう。』

そう言うともオオは笑いながら応える。

「それこそ関係ないよ、僕は君を殺したいんだから。」

『くっ！！』

「君とゲームをしよう。」

『ゲームだと。』

おそらくチェスか何かだろう。

そして案の定マオはチェスを持ちかけてくる。

『良いだろう、そのゲーム受けてやる。』

「じゃあまってるよ。」

そう言うともオオは携帯を切る。

『これからどうする。』

そう考えているときであった。

「どうしたのルルーシュ。」

スザクが屋上に来たのだ。

おそらく俺を探しに来たのだろう。

『スザク、俺と一緒に来てくれ。』

そう言うともルルーシュはスザクを掴んで走っていく。

「ルルーシュどうしたの。」

『スザク、今この学校に爆弾が仕掛けられている。』  
『もしかして君の命を。』

『だろうな、皇族と知ってのことだろう。』  
暗殺者はこれまでも来ていた。  
それを知ってスザクも真剣な顔つきになる。

『この学園内で地盤を崩すに適した場所は地下しかない。』

『まずは爆弾を止めに行くの。』

『そうだ。』

そう言つて二人は地下と降りていく。

途中にあつたトラップを破壊して先に進むと其処には爆弾が重りに付けられながら揺れていた。

おそらくあれは別の力が加われば爆発するようになっているのだろう。

『スザク。』

『あれは僕に任せて。』

『ああ、暗殺者の方は俺が何とかする。スザクは爆弾を頼むぞ。』

『何とかするつて、大丈夫なの。』

『俺を誰だと思つている、ブリタニアの元皇子だぞ。』

そう言つと走つていく。

しかしスザクにもルルーシュが負けるとは思つていなかった。

『じゃあ僕はこっちを何とかするかな。』

礼拝堂の扉を開けるとその奥にはマオが立っていた。

『マオ。』

『良いね、その目。人を憎む目だ。』

『そんなご託は良い、さつさと爆弾を解除しろ。』

ルルーシュはそう叫ぶ。

『怖い怖い、だからこそそのゲームだろう。』

そう言つと彼の後ろにはチェス盤がある。

それをルルーシュに見せて、

「君が勝てば爆弾は解除され、僕が勝てばドカンだ。」

『良いだろう、お前を負かせてやるぞ。』

そう言つてルルーシュも席に着く。

だが相手の思考を読むギアスの前に圧倒的苦戦を強いられる。

「どうしたんだいルル、散々だね。ほらナイトが取られた。」

『くっ』

同時に幾つかの戦法を考えるもそれも通用しない。

そしてついに黒のキングが取られる。

「あーあ、これで君の負けだね。」

『くそつ。』

「それじゃあ、君の大事な友達はお終いだね。」

そう言つてキングを台に降ろす。

その瞬間爆発が、

「ドツカーン!!」

マオがそう叫ぶ。

爆発が起こるはずだった。

しかしいつまで経つても何も起きない。

それに不審に思ったマオが叫び出す。

「なんで、どうして。」

そして俺はその瞬間悟った。

どうやら上手くいったようだ。

ルルーシュは自らにギアスをかけることで爆弾についての記憶を無くしていたのだ。

ルルーシュがギアスを得たのはクロヴィスランドでCCを救出したときであった。

『シラユキ、俺にギアスをくれ。』

「なっ、ルルーシュ。」

CCCは驚く、これまで頑なにギアスを拒んできたルルーシュがいきなりギアスが必要と行ってきたのだ。

『俺は弱い、今の俺ではマオを倒すことは出来ない。』

「だがそんなことをすればお前は戻れなくなるぞ。」

CCCはルルーシュにそう言う。

『お前が魔女なら俺は魔王になろう。』

「ルルーシュ。」

そう言うとルルーシュはCCCに手を差し伸べる。

『シラユキ。』

「ああ。」

『俺の共犯者になってくれ。』

「それは私のセリフだ。」

シラユキは泣きながらルルーシュの言葉に応える。

「そんな、なんでお前がギアスを持つてるんだよ。」

『愚問だな、力に対抗するのは力。だから俺はギアスを得た。なあ』

CCC。』

そう言うとCCCが入り口から入ってくる。

「CCCなんでこんな奴にギアスを。」

「ルルーシュが望んだからだ。」

ルルーシュはマオに勝つために王の力を手に入れる決意をしたのだ。たとえそれが修羅の道でも。

『お前の負けだな、マオ。』

「うるさいうるさいうるさい。」

『俺がギアスを持たないと決めつけたのがお前の敗因だ。』  
するとマオは不適な笑い声を上げる。

「でも君は決定的なミスを犯した、僕の目の前に出てくれば君をのぞけるぞ。」

『覗いてみるか？俺の深層心理を。』

そう言って笑う。

「ルルーシュ!!」

CCCが焦ったように言う。

しかしルルーシュはなお不適に笑う。

「後悔しろ、僕の目の前に現れたことを。」

そう言ってマオはルルーシュのみに集中して心の中を見る。

そしてルルーシュの過去、母の死、兄妹との決別。

それらの多くがマオに入り込んでくる。

そしてそれがある一定の深さまで行くと急にマオが怯え出す。

「やめろ! やめろやめろやめろやめろ!!」

「何だ?」

CCCがいきなり怯えだしたマオに疑問を持つ。

マオが頭を抱えてルルーシュにそう言い放つ。

「なんで、なんでお前はそんなになっても生きていけるんだよ。世

界の全てを敵に回しても。」

『それが俺の選んだ運命だからだ。』

「そんなのあり得ない。誰からも愛されないのになんで生きて行け

たんだよ。」

マオは怯えたように体を縮込ませる。

それを見てルルーシュは銃を構える。

『俺は生きていく、たとえ悪と言われようと、再び世界を敵に回そ

うと。』

それが俺の運命なのだから

そう言って引き金を引く。

パン!

銃弾がマオの頭を貫く。

『さよならマオ、せめて来世が幸せであらんことを。』

そう言ってマオに笑いかける。

だがCCには泣いているようにも見えた。

「ルルーシュ。」

「なんだシラユキ。」

「私はお前の共犯者だ。」

「当たり前だ。」

後片付けをミレイに任せてルルーシュはクラブハウスに戻っていった。

## 第十七話 KMF

東京租界付近、新宿ゲッターに黒の騎士団の本部であるトレーラーがある。

トレーラーは何台もありそれぞれが役目を負っている。

まずは一つ目の黒のトレーラー。

主に幹部が仕事をするスペースでゼロの私室も此処にある。

重要な会議や作戦会議などは此処で行われることが多い。

いわばメイントレーラーである。

二つ目は蒼いトレーラー。

ここは訓練所を設けており団員達の鍛錬の場に使われることが多い。三つ目は赤のトレーラー。

このトレーラーではマッドサイエンティストことラクシャータ・チャウラー率いる科学者や整備班が作業をしている。

ルルーシュも良く訪れている。

シミュレーションも有りKMFの訓練なども行っている。

そして最後に緑のトレーラーがある。

これには多くのKMFが搭載されており最も巨大なトレーラーである。

そしていまルルーシュはラクシャータに会うために赤のトレーラーに来ていた。

一般団員の殆どはゼロの正体を知らないうえ、此処はブリタニア人も所属しているためゼロの格好をしなくとも良いのだ。

それに整備班や科学者もルルーシュが集めたため顔は知られている。

『ラクシャータ、次世代の新型機の方はどうなっている。』

「あれね、一応作つてあるけど。」

ルルーシュとラクシャータが話しているのは現在の黒の騎士団主力機体である月下と無頼改式のことだ。

これから先は困難な闘いが待っているだろう。

現在の戦力だけで勝てるとは思えない。  
その為に次世代機を作らせていたのだ。

「まずは各隊長達の月下を更に改良した暁よ。」

これは月下の発展機として考えて良いわ。出力も月下と比べて格段に違うわ。」

隊長機として作らせている暁。

「それに合わせて飛行ユニットの飛翔滑走翼を開発中よ。一応実験用があるけどね。」

そして飛翔滑走翼、この先作られるであろうブリタニアのフロートユニットに対抗するためだ。

空を飛ぶ相手に地上から撃破するのは難しい、ならば此方も飛ぶしかない。

「そしてこつちが無頼改式の代わりに配属される月下一式よ。」

月下一式は一般団に配属されている無頼の代わり開発されている機体だ。

幹部団が使う月下二式ほど出力は高くないが量産機としては異例の高出力である。」

「それと最後に岡崎の紫炎とナオトちゃんの蒼月も強化させてもらったわよ。」

『紫炎と蒼月をかか。』

岡崎の搭乗する紫炎はミラージユと並び黒の騎士団最新機であり蒼月もまた同じだ。

「蒼月には最新式の飛翔滑走翼の特化型を付けたその名も蒼月可翔式、そして岡崎には紫炎に変わる新しい機体を用意したわ。名前を紫電とさせてもらうわ。」

『さすがだなラクシャータ。これだけの期間でこれ程の成果を出すとは。』

「あなたの案もかなり役に立ったのよ。」  
そう言っつてキセルをふかす。

「でもまだ全員分が出来るのは先ね。」

『ああ、だかなるべく急いでくれ。』

そう言うとラクシャータはまた自分の仕事に戻る。

俺も帰るかとルルーシュが考えていると後ろから呼ばれる。

「ルルーシュさん。」

振り向くと一人の少女が立っていた。

『なんだリーナか。どうかしたのか。』

「はい、ルルーシュさんの機体のミラーージュについてなんです。」

そう言うと一つの資料を取り出す。

「実は先日の戦闘でルルーシュさんが使った輻射牆壁が他の機体にも使われることが決定したので。あくまで次世代機を中心にですが、

」

『そうか、これで無駄な損傷受けずにすむな。』

そう言いながら資料を読む。

そして一通り資料に目を通すとありがとうと言って資料を返す。

『いつもすまないな、まだ十六歳なのにこんな事に手伝わせて。』

「いえ、私はルルーシュさんがいなければ死んでいましたから。親から捨てられた私を拾ってくださいだったのはルルーシュさんとラクシャータさんですから。」

そうリーナはブリタニア人であるが親から捨てられたのだ。

それで死にかけていたがその時ルルーシュとラクシャータがリーナを助けたのだ。

当時まだ十二歳程度であったが優秀であったリーナはラクシャータの元で才能を開かせた。

『ラクシャータの相手を出来るのはリーナだけだからな。』

「はい、あの人のことをちゃんと理解できるのはルルーシュさんと私、それにナオトさんぐらいですから。」

おそらくリーナでなければ助手は務まらないだろう。

それほどまでに三人は信頼しているのだ。

『ありがとう、リーナはよくやってくれているよ。だがたまには休めよ。』

「なら今度食事に行きませんか。良いお店知っているんで。」  
『いいな、今度の休みにでも行こう。』  
そう言うトリーナは笑顔でハイという。  
内心ガッツポーズをしている。  
それを見て周囲の面々は、  
「さすがラクシャータさんの助手を務めるだけはある。」  
「デートの誘い方が上手い。」  
「だんだんルルーシュさんを狙う女性が活発に動き出したな。」  
などと口々に噂していたとか。

その後ルルーシュは黒のトレーラーに来て畑岡と会っていた。  
畑岡は黒の騎士団の事務総長を務めている人物だ。  
元々ゲッターに住んでいた一般人だが黒の騎士団の団員を集めたときにルルーシュが事務員として見いだしたのである。  
畑岡が加入する以前はルルーシュが事務などのことを一人で行っていたが畑岡が入ったことで任せられるようになったのだ。  
そして何よりこの畑岡という男は常識人なのだ。  
未だ本編で語られていないが実は赤坂や岡崎も中々の変わり者である。

別に普段が変わり者というわけではない、ただたまにおかしくなる  
と言っただけのこと。

その際起きたことの後始末をするのがこの二人なのである。

『しかしこうやって静かにお茶を飲むのも久しぶりだな。』  
ルルーシュが畑岡に言う。

「確かに。何せ最近は忙しかったからな。」  
畑岡は笑いながら応える。

シンジユクの戦い以前はこうやってよくお茶を飲んでいたものだ。  
だが反逆を本格的に始めてから、双方忙しくなっていたためそう言った時間がなかったのだ。

しかし次の作戦まではいささか時間があるためこうやってお茶を飲んでるのだ。

「ルルーシュ君、学園生活はどうだい。」

『楽しいよ、友達と共に馬鹿言つて笑つて遊んで。』

そう言つて思い浮かぶのは生徒会のメンバー。

リヴァルやシャーリー、ニーナなどはルルーシュがゼロだと言つてことを知つている。

本国に反逆する理由も、その為に戦っていることも。

全てを知つた上で共にいてくれる。

それがルルーシュにとつてどれだけ支えになつているか。

「なら良いさ、若い内は色々なことをしなければならぬ。私が若いときはよく遊んでいた。」

そう言つて畑岡はかつてのことを思い返す。

戦争で離ればなれになつてしまった友。

無くなつてしまつた者もいるがそれでも良い思い出だつた。

だからこそ今の時期をルルーシュには楽しんでもらいたい。

ただでさえ黒の騎士団を率いているのだ、その心労は計り知れないものだろう。

少しでも支えにならねばならない。

そう思いながら畑岡はお茶を飲む。

『そうだな、俺もあいつ等と友に過ごす時間は楽しいからな。』

そう言うルルーシュには一つの心残りがあつた。

それはスザクのことである。

現在ブリタニア軍のそれもあのランスロットに乗っているスザク。

これからも何度も戦うことになるだろう。

やはり親友と戦うのは辛いものがある。

だがそれでも戦わなければならぬのだ。

そんなルルーシュを見て畑岡が話し出す。

「俺達じゃあ君の支えになるのは難しいだろう。だが君は子供で俺達は大人だ、もっと人を頼つても良いさ。一人でため込まないでね」

『ああ、そうだな。』

そう言ってお茶を飲む。

二人の間には平和な空間が出来ていた。

だがそれは嵐の前の静けさでもあったのかも知れない。

## 第十八話 再会

シンジユク、ナリタと続けて撃ち破られたブリタニア軍。

日本解放戦線に代わりイレブン達の信望を集める黒の騎士団。

それにもない各地の反抗は激化。

圧倒的な力でエリアを掌握してきたブリタニア軍はこれに危惧を覚え軍部を増強させた。

だがこのエリアには大した財政力はない、と言うことは各貴族の財産から出してもらうことになる。

そうなればこれまで利権を我が物にしてきた貴族達にも負担が掛かることになる。

愛国心の強い貴族ならばすぐ様にでも差し出すだろう。

しかしこのエリアには愛国心よりも自らの利権に固執する貴族が多い。

その為コーネリアは軍事力に物を言わせて財産を徴収していく。

この行為自体は間違っていない、無い者からむしり取るよりある物から取った方が良いからだ。

それにこれまで裏で色々なことをしてきた貴族達は多くいる、その証拠を突きつけられて徴収されていくのだ。

コーネリアの方が正しい行いであると言えよう。

だが人間の心はそれでは片付かない。

自らの財産を奪われた貴族は反感を憶える。

ルルーシュはその貴族を狙って工作を開始していた。

ルルーシュには既にブリタニアと戦うために策はある。

今はその為の根回し、資金集めを行っているのだ。

ルルーシュはクラブハウスにある自室で作業に追われていた。

室内にはノートパソコンを打ち続ける音が鳴り続ける。

隣の部屋ではシラクキが眠っているだろう。

咲世子も既に下がらせてある。

ルルーシュは黒の騎士団の活動のために夜遅くまで作業することは  
ざらではない。

増強された黒の騎士団の団員達の名簿を見ながら作業を続ける。

適材適所、ルルーシュが好きな言葉である。

人材を上手く使いこなすためにはその人物にあつた場所で働かせる  
必要がある。

その理念の元ルルーシュは名簿を見ながらどの部署に置くかを決め  
ていく。

基本的なことはルルーシュが決めて、後に会議の時に幹部達に尋ね  
て決定する。

それに黒の騎士団の噂を聞いて集まつた者達の採用も行わなければ  
ならない。

『連続徹夜記録これで更新だな。』

そう言つてブラックコーヒーを飲む。

相当な量の作業にルルーシュもさすがに疲れていた。

ちなみに現在黒の騎士団のトレーラーにいる畑岡も同じく徹夜記録  
を更新していた。

「『絶対事務員を増やす。』」

二人の心が一致したとかしてないとか。

『やっと終わったか。』

そう言ったのはそれから二時間後の話であつた。

既に日が昇りかけており今日が休日であることが救いである。

背伸びをして固まつた体をほぐす。

するとルルーシュの部屋の扉が開いて誰かが入ってくる。

「まだやってたのかルルーシュ。」

『今終わったところだ。それでどうかしたのかシラユキ。』

「私がコーヒーでもごちそうしてやるうと思っただ。」

ごちそうすると言ってもそれはルルーシュが買ってきたものだが。だがルルーシュはそんなことなど気にしない。それよりもっと気になることがあったからだ。

『シラユキ、コーヒーを入れられるのか。』

「失礼だな、私だってそれくらい出来るさ。」

そう言っただルルーシュを少しばかり睨む。

『冗談だ、ありがとう。』

そう言っただコーヒーを受け取る。

シラユキはルルーシュのベットに腰掛けて近くにあった雑誌を手取る。

コーヒーを飲み終えたルルーシュはベットに向かう。

しかし其処にはシラユキがいる。

眠たそうにするルルーシュを見たシラユキは少し意地悪をしようと考えてる。

「ルルーシュ、眠いなら私と寝るか。」

そう言えばルルーシュは少しばかり不機嫌になって応える。

前にやったときもそうであったからだ。

その時はルルーシュがシラユキの願いを一つ叶える形で終わった。だが今回ばかりは状況が違った。

『そうだな、良い抱き枕になりそうだ。』  
「は？」

前回と違って今のルルーシュは極限状態に近い。

その為シラユキと共に寝ることなど構わないのだ。

困惑するシラユキをよそにルルーシュはシラユキの隣に寝て布団を被る。

そして言葉通りシラユキを抱く形になって睡眠に入る。

「お、おい。ルルーシュ。」

どうにか抜け出そうとするがルルーシュの抱きつく力が強くて抜け出せない。

既に寝に入っているルルーシュには届かない。

「お前みたいなのは初めてだよ。」

そう言っただけで微笑み自らも眠りにつく。

十分に睡眠を取ったルルーシュはこの先起こるであろう戦いのための準備をしていた。

ユフィは死なせない。

その為には彼女が行う特区日本を辞めさせなければならぬ。

生憎ユフィはルルーシュと出会っていないためこの考えは浮かばないだろう。

しかしスザクと出会っているのですその事からそう言う考えを持つ可能性もある。

まあ黒の騎士団幹部はルルーシュの願いを知っているのです大丈夫だろうが。

しかし今日は何だが嫌なことが起きそうな気がする。

別に確証があるわけではない、ただ何となくそう思っているのである。

たとえばいきなりユフィが訪ねてくるとか。

「ルルーシユ、会いに来たわよー。」

そう言つてクラブハウスの扉を勢いよく開けて入ってくる。

ブーーーー!!

飲んでいた紅茶を霧のようにはき出す。

誰とは言わない、言う必要もない。

元気よくルルーシユに声をかけた少女は満開の笑みで此方に駆け寄ってくる。

その後ろでスザクがかなりすまなさそうにしている。

それを見たルルーシユは立ち上がって怒りをあらわにした表情をしてスザクに向けて叫ぶ。

『スザク!!俺をブリタニアに売ったのか!!』

それを聞いたスザクが顔面蒼白になって弁解しようとして口を開く。

スザクはルルーシユがブリタニアに帰るのを嫌っていることをよく知っている。

この場合そう思われても仕方がないが。

「ち、違うよルルーシユ。僕は。」

「そうですルルーシユ、スザクは何も。」

ユフィもスザクのためにルルーシユに向かって声をかける。

それに対してルルーシユは椅子に座って。

『冗談だ。』

そう言つて紅茶を飲む。

それを聞いて二人はへ？と言つ表情になる。

当たり前だ怒りをあらわにした表情のルルーシュがいきなり冗談だと言つたのだから。

「えっと、ルルーシュ。」

『スザクもユフィも椅子に座れ。咲世子さん、二人の分の紅茶をお願いします。』

かなり情けない声でルルーシュの名を口にするスザクに対して気にせず着席するように呼びかける。

「わかりましたわルルーシュ。」

そう言つてユフィはすぐに椅子に座る。

そして運ばれてきた紅茶に口を付ける。

スザクはこの二人の早業に自分がおかしいのかと疑問を抱く。

『スザク早く座れ。言つておくが俺は今とてつもなく動揺している。』

そう言われてみるとルルーシュの表情がいつもより硬い。

それに紅茶のカップを持つ手も少し震えている。

それだけで彼がかなり動揺していると言つことが本当だとわかる。

スザクが席に着いたのを確認するとルルーシュは口を開く。

『さて、まずはどこから突つ込もうか。』

ルルーシュはかなり真面目な顔つきでそう言つ。

ルルーシュは現在自らの高性能な頭脳を使って現状を理解しようとしている。

何故だろう、この小説はシリアスな展開を得意としているはずだ。なのにどうしてこうなったのだろうか。

結構前にもこんな事があったような気がする、こっちの考えを全てぶっ壊されたことが。

だが展開が急すぎやしないだろうか。

確かにこういう事にはするつもりだった。

ユフィとスザクと協力して作戦を成功させる。

だが段階をかなり省いたような気がする。

ならばどうにでもなれだ、此处でユフィとスザクを此方に引き込むか。

ちなみにこの考えに至まで約一秒。

『それで、今日は何の用が合って来たんだ。』

そう言っつて二人を見る。

スザクはユフィを見て黙っている。

と言うことはスザクはユフィの案内としてきたのだろうか。ならば用件があるのはユフィと言うことになる。

「ルルーシュの顔を見に来ました。」

ユフィは満開の笑みでそう言う。

『予想通りの答である意味安心したよ。』

予想は出来ていた、こういう理由であると、だがこれだけではないはずだ。…………たぶん。

「ごめんねルルーシュ、ユファイがどうしても言っから。」

すまなさそうにしながらスザクが頭を下げる。

『気にするなスザク、ユファイなら別に構わない。だいたいクロヴィスも知っているからな。』

「そうなのルルーシュ。」

その事実二人は驚く。

当たり前だろう実は既に知られていたのだから、しかもブリタニア皇族の中に。

「でもクロヴィス兄様は何も仰っていませんでしたけど。」

『黙ってもらったに決まっているだろう。』

それぐらいわかるだろう。

そう思いながらルルーシュは応える。

『それで本当のところ何故俺を訪ねたんだ。』

そう言っ少しばかり鋭くした目で見る。

するとユファイも意を決したのか口を開く。

「私はこのエリア11で不当な扱いを受ける日本人の方達を見てきました。」

ユファイのことだ、独自で探索でもしていたのだろう。

それは良いことだが黙って一人で行くことは駄目ではないだろうか。

「そこで私は考えました。」

その言葉を聞いてルルーシュは気が付く、ユフィが何を言おうとしているのかに。

『行政特区か。』

## 第十八話 再会（後書き）

かなりのご都合設定でした。

これから第一部の最終局面へと移行していきますので宜しくお願  
い  
します。

## 第十九話 特区の欠点

「え？なんでわかったんですかルルーシュ。」

やはりそう言うことだったのだ。

ユフィは優しい、そんな現状を見れば必ずそう言うことを行うであろうと予想できていた。

「ならルルーシュ、あなたに特区を手伝って欲しいんです。」

そう頼み込んでくるユフィ。

スザクも同じ想いのようにだ。

だがルルーシュは頷くわけにはいかなかった。

『ユフィ、俺は特区には賛成できない。』

「え？どうしてですか。」

ルルーシュの言葉を聞いたユフィは信じられないような顔をしている。

必ずルルーシュなら手伝ってくれる、そう思っていたのだろう。

スザクも同じように思っていたらしく驚愕の表情をしている。

「ルルーシュ、何故君は賛成できないんだ。」

『スザクもユフィもよく聞け。その特区は所詮一時しのぎでしかない。』

「何故ですか、特区を布けば暮らしが良くなる」

『その特区に漏れた日本人はどうなる、今以上の苦しい暮らしを強いられることになるぞ。』

ユフィの言葉を切つてルルーシユが言う。  
その瞳には先程の優しなど欠片もなかった。

「だんだんと特区を広げれば。」  
『それをブリタニアが許すはずがないだろう。』

広げることなど不可能。

ブリタニアにしてみれば不利益になること、それを進んでやるはずがない。

オデュッセウスならしてくれるかも知れないが。

『それにそんな特区などすぐに限界が来る、その特区の中にいるブリタニア人との衝突ですぐに瓦解し、最悪特区に参加した人間は参加していない人達以上の圧政を敷かれるぞ。』

それでもやるのか、そう目で尋ねる。

それを聞いてユフィは狼狽している。

「そんな、わたしは、そんなつもりじゃ。」

『ユフィ、君の善意は確かに素晴らしいものだ、だが先のことを考えず行動してはならない。そしてきつとわかつてくれると言って自分の考えを押しつけてはいけない、押しつけただけの善意は悪意と何らかわりのない。』

ルルーシユはユフィを諭すように言う。

スザクもルルーシユの言葉に気付いて動揺している。

やはりまだ高校生だ、目の前にある答が正しい物と思ってしまう。

『だが、何もする必要がないというわけではない。』

そう言つてルルーシュは立ち上がる。  
その言葉に二人はどういう事だと耳を傾ける。

『悲しんでいる人達が目の前にいる、救えたはずの命が消える。それは許してはならないことだ。』

思い出すのはこの七年間で見てきたこと。

イレブンだから、ナンバーズだから、それだけで治療を受けられない者達。

ルルーシュが幾ら動こうと救える命は数少ない、それは黒の騎士団を率いても同じだ。

所詮ルルーシュは一般市民である、そして表に出れば面倒ごとになる。

そうなれば直救える命は少なくなる、本国に帰らされるからだ。

『だからこそ、俺は異議を唱える。』

二人はルルーシュは何を言っているのかという顔だ。

『強者が弱者を虐げるこの世界を、俺は認めない。』

そう二人に言い放つ。

これは賭け、二人がこのことをコーネリア達に伝えれば計画は全て崩れる。

「ルルーシュ、君は本気なのかい。」

『スザク、こんな時に冗談を言うほど俺もいたずら好きじゃないさ。』

それでどうするという視線を送る。

「ルルーシュ、あなたはブリタニアの反逆するの。」  
『正確にはブリタニア皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアにな。』

皇帝に逆らうことはブリタニアに逆らうことである。

それほどまでの覚悟を持っていると二人は思った。

スザクは考えていた。

ルルーシュの言葉を、己の心を。

そして一つの決心が付いた。

「僕はこれまでこの国を、君が住むこの国の平和のために戦ってきた。」

スザクは呟くように言う。

「でも気付いた、所詮そんな物はかりそめの平和じゃないかと、力で押さえつけられた平和、俺はそんな物認められない。」

スザクの一人称が俺に変わる。

「だから俺はユフィの考えた行政特区に賛成した、でもそれは一時しのぎだと君に教えられた。そう言われても諦める気はない、だから俺は君に、ルルーシュに力を貸す。それが俺が導き出した答だ。」

そう言つてスザクは信念の籠もった瞳でルルーシュを見据える。

『スザク本当に良いのか。』

「ああ」

『軍人を辞めなければならぬかも知れないぞ。』

「構わない。」

『ブリタニアと戦うことになるぞ。』

「それでも、俺は君を守りたいんだ。」

スザクはそう言って微笑む。

「私もですルルーシユ、私も力を貸します。」

ユフィも立ち上がりそう言う。

『ユフィ。』

ルルーシユは驚きながら名を口にする。

「私も虐げられる人々がいる世界なんて認めません。」

力強く言い放った。

二人の瞳にはもう迷いはなかった。

『そうか、なら二人には話しておかなければいけないことがある。』

「なんだいルルーシユ。」

スザクが尋ねる。

『二人ともよく聞いてくれ、俺がゼロだ。』

「「え？」」

二人は最初何を言っているのかわからなかった。

ゼロ？あのゼロなのか？

そう言う表情をしている。

『まあ信じられないかもしれないかもしれんが俺がゼロ、黒の騎士団を率いて現  
在このエリアで戦っている。』

ルルーシュがそう言って説明する。

『ちなみにこれも兄上は知っている。』

「それも、もしかしてシンジユクでいきなり停戦したのって。」

スザクはあの不自然なタイミングでの停戦のことを思い出す。

『そうだ。あの時は俺が兄上の目の前に現れて正体を明かして説明  
したからな。』

色々と疲れたが。

『俺一人で出来ることはたかが知れている。だから俺は組織を作っ  
たんだよ。』

それを聞いてスザクは思う。

ルルーシュは自分が軍人として戦う以前から戦っていたのだと。  
まだ幼く、中学に通っていた時期から活動をしていたのかと。

それにスザクはルルーシュがゼロであるというのは理解できる。

驚きはしたもののすぐに理解できていた。

ユフィは未だに混乱中だが。

それを見てルルーシュが説明している。

相変わらず妹想いな兄なことだ。

かつてもよく兄弟のことを自慢していた。

ブリタニアの敵になるかも知れない、だと言うのにスザクの心は何  
処か晴れやかであった。

『スザク一人で完結して暇があったらユフィを説得しろ。』

親友が何か叫んでいたがそんなこと気にすることもなかった。

中華連邦の支援を受けた澤崎がキュウシュウエリアを占拠。

ブリタニアに対して反抗、エリア11全体に一斉決起を促した。

しかしキョウトは澤崎等の支援をせず沈黙の体勢を取っていた。

このエリアの抵抗組織は主に京都からの支援で戦っている。

その為京都が沈黙の姿勢を取っているため動くことが出来ないのだ。ただしキュウシュウエリアの抵抗組織は決起して澤崎等に協力しているようだ。

そしてその報を受けたブリタニア軍は早急に澤崎等を撃つためにキュウシュウに進撃した。

しかし悪天候な上に圧倒的な量を持つ中華の軍に進軍を阻まれる。だがコーネリア率いる本隊の電撃作戦によって澤崎等は逮捕された。この戦いを機にエリア11での抵抗活動は沈静化するかに思われたが活発化していく。

それに合わせて解放戦線も拠点を移して活動を再開していた。かつてほどの力はないがそれでも周辺の組織と併合して巨大化していった。

それと時を同じくしてルルーシュは関東を中心に信頼における抵抗組織と接触を開始した。

日本奪還に向けての味方を作るためだ。

他の抵抗組織を手を組むことで広範囲の情報が入るようになる。

そしてめぼしい人材を引き抜いたり信頼できるグループとは併合したりしていた。

その為実質上北日本の抵抗組織は黒の騎士団の手に収まりつつあった。

ルルーシュが暗躍を続ける内に月日は経ち文化祭シーズンへと移っ

ていた。

第十九話 特区の欠点（後書き）

感想宜しくお願いします。

## 第二十話 文化祭

『文化祭で巨大ピザ？』

ルルーシュはミレイが出した文化祭での出し物の案を見てそう言った。

またするのかと。

去年はルルーシュがガニメデで成功させているが今年はスザクが操縦するようだ。

その方が楽なため異論はないが。

ちなみにミレイには既にスザクが協力者であることは話してある。その時はいい顔をされなかったが仕方ないだろう。

実際この学園にスザクがいることでルルーシュの正体がばれてしまう危険性があるからだ。

まあそうなってしまった場合はそれを逆手に取り行動を起こすのも一つの手だろう。

「そうなのよ、去年より更に巨大なピザを作るわよ。」

『このクソ忙しい時期になんて面倒な物を。』

「忙しい時期だからじゃないかなルルーシュ。」

スザクがルルーシュを諭す。

『どついう事だ？』

「息抜きしろって事だぜ。」

リヴァルが笑いながら言う。

「私もそう思う、ルルーシュ君この頃頑張りすぎてるから。」

ニーナが心配そうに呟く。

「そうだよルル、文化祭の時ぐらい騎士団のことを忘れて気楽に行こうよ。」

シャーリーは満開の笑顔でルルーシュを元気づけようとする。

「そういうことよルルちゃん。」

『リヴァル、ニーナ、シャーリー、ミレイ、ありがとう。』

「僕に礼は。」

スザクが自分の名が呼ばれなかったことに突っ込む。

「スザクくんはこれまでいっぱい迷惑かけたからよ。」

「そんな〜。」

ミレイの辛痛の言葉にスザクは情けない声を出す。  
そんな中ルルーシュが立ち上がり注目を集める。

『とりあえずまずはこの書類から処理をしよう。』

文化祭当日。

ルルーシュは今日一日生徒会の仕事をお休みという事をミレイから告げられたため校内を散策していた。

学園の敷地内は生徒達による出し物で溢れている。

さすがはアッシュフォード学園の生徒、作る物一つ一つが精密だ。  
食品関係でもかなりレベルが高い。

話によればたこ焼きなどの物は租界の公園で店を出している所に弟

子入りしたのだとか。

客もかなり満足している。

これなら大丈夫だなと思ひ散策を続ける。

ルルーシュはこの学園祭を行うのにかかなりの熱意をかけた。

何せこのまま順調にいけばこれが生徒会長であるミレイの最後の学園祭となるのだ。

恩義あるルーベンの孫娘であり黒の騎士団一番隊隊長、そして大切な人であるため中途半端な物では許せない。

その想いは生徒一同同じだったようで皆が全力で取り組んでいる。

さすがはミレイ、生徒から尊敬されているというのがよくわかる。

学園祭には多くの来訪者が来る。

何せ珍しい校風の学園だ、それに学園祭はかなり盛大に行われるため此処近辺では一種の楽しみになっていた。

しかし、しかしだ。

『ブリタニアの皇族まで来るのはおかしいだろう。』

そう言うルルーシュが見つめる先には帽子を深く被りサングラスをはめたユフィの姿であった。

そう言った声が相手にも聞こえたのかユフィがルルーシュの方に駆け寄る。

「ルルーシュ、来ちゃった。」

そう言うてはにかむ。

そうやって笑えば許されると思っっているのだろうか。

まあ実際ルルーシュには怒る気は全くないのだけれども。ただしかなり呆れているが。

『ユフィ、なんで此処にいるんだ。』

予想は出来ているが一応聞いてみる。

「スザクが学園祭があるって言ってたから、行きたいなって思っ

て」  
『やっぱりか。』

肩を落としながら言うルルーシュ。

「やっぱり不味かった？」

『ものすくくな。』

もう言うことはないと言った風に呆れてしまう。

するとユフィも落ち込む。

落ち込んだ姿が犬のように見えて仕方がない。

どうやらかなり疲れてしまっているようだ。ルルーシュは頭を振って幻想を頭からはじき出す。

『全く、なら行くか。』

「え？行くって。」

『学園祭を見に来たんだろう、案内ぐらいはしてやるぞ。』

そう言ってルルーシュは歩き出す。

ユフィはそれを呆然としてみる。

それに気付いたルルーシュは後ろを振り向いて言う。

『ほら行くぞ。』

「はい！」

ルルーシュの言葉で我に返ったユフィは賭けだしてルルーシュの横

に並ぶ。

それからルルーシユはユフィと共に学園の中を回った。久しぶりにあった兄との時間はユフィを楽しくさせた。

またルルーシユも同じように終始笑顔であった。

途中でスザクも参入して三人で回った。

その時間は三人の中で忘れられない楽しい思い出となるだろうと思っていた。

……… あんな事がなければ。

学園祭も終盤に差し掛かり出し物が片付けられていく。

生徒全員が中庭に集められて談笑していた。

最後の大仕事、生徒会による巨大ピザ作りの片付けも終わって全てを終わらせたため会長のミレイによる閉会の一言を終えれば解散であった。

そんな時であった学園の正面玄関に取り付けられた野外用モニターのスイッチが入る。

あれは基本ミレイによる行事の時ぐらいしか使われていないため月一の頻度で使われている程度だ、ミレイにしてみれば少ない方である。

それがつくと言うことは何かのエリアで会ったのかも知れない。

一応テレビも兼ねているのだ。あんな巨大な物は必要ないと思うが、少しするとモニターに一人の少女が映し出される。

ちなみに現在を時間にすると夕方五時半。

其処に移っているのは。

『…………… ナナリー』

ルルーシユが呆然と呟く。

それを見たスザクもユフィも声を無くしている。

一体どういう事なのだろうか。

「皆様初めまして私はエリア11副総督補佐であるナナリー・ヴィ・ブリタニアです。」

それにアツシユフォード学園の生徒はどよめき立つ。  
いやこのエリア全体がそうなっているだろう。  
そしてナナリーは口を開いた。

「私はこのエリア11で行政特区を開きます。」

それからナナリーの説明が始まる。

「この行政特区はブリタニアの元で日本人の名を保証することが出来ます。」

『やめる、やめるナナリー。』

ルルーシュは呟くように言う。

ユフィに説明したとおりそれはしてはいけない。

「つまり特区の中では日本人として生きることが出来るのです。」

そして直ナナリーの説明は続く。

「そして私はゼロにも是非にも特区に参加していただき、協力していただきたいのです。」

その中でルルーシュはある決意を固めていた。

『スザク、ユフィ。』

二人の名を口にして此方に注意を向ける。

『今のうちに帰っておけ。』

こんな事をすれば今頃政庁は大騒ぎだろう。

その騒ぎの内に政庁内に帰還すれば怪しまれずすむだろう。

こそその先何が起きるかわからない、だがおそらく黒の騎士団には厳しいことになるはずだ。

『作戦を速めるしかないか。』

そう言うルルーシュの表情には哀しみで満ちていた。

「ルルーシュ様。」

そんな表情をしているルルーシュを心配そうに見つめるミレイがいた。

ルルーシュは現在アツシュフォード学園では無く孤児院の方にいた。久しぶりに顔を見せに行こうと思ったからだ。

しかし孤児院に入った途端、柵に連行されてしまった。

それをルルーシュは啞然としながらも抵抗せずに連れて行かれた。

ルルーシュは中庭のベンチに座らせられる。

『どうした美代、いきなり引っ張って。』

「ルルーシュさん、何を迷っているんですか。」

『！』

呆れながら言うルルーシュの言葉を遮って口を開いた柵の一言にルルーシュは目を見開いて反応する。

ルルーシュは演技が上手い、心で思っている事を表情で出すなどしない。

第一今朝会ったミレイやココも気付いていなかったはずだ。

『何の事だ美代、俺は別に。』

「そんなことはありません、だって悲しそうにしているじゃないですか。」

『何言ってる俺はいつもと』

「違います、ならなんでそんな悲しそうな目をしてるんですか。」

そう言つて柊はルルーシュのことを真っ直ぐ見つめる。

そう言われてルルーシュはハツとなる。

柊だけではないかも知れない、ミレイやココも気付いていたのかも知れない。

「ルルーシュさん、話してください。」

柊はルルーシュにそう言う。

それに対して表情をゆがめて視線を逸らす。

そんなルルーシュに柊が抱きつく。

『美代、何を』

「私はルルーシュさんに命を救われました、だから少しでも助けになりたいんです。」

身の丈はルルーシュの方が大きい、自然に柊がルルーシュの胸に顔を埋める形になる。

「特区のことでしょう。」

『……………フツ。やはりばれていたか。』

そうルルーシュが悩んでいるのは行政特区のこと。

「やはり妹さんのことが。」

『いやそうじゃない、ナナリーは自分の道を選んだのだろう。』

ルルーシュはナナリーのことは別に気にしていない。

血を分けた妹といえどもそれは過去のことだ。

いまさらかつての自分に綴る気はない。

ルルーシュを悩ませる物は他にあった。

「ならなんで。」

『俺に力を貸してくれる日本人達のことだ。』

「ルルーシュさん？」

『行政特区は日本の名を取り戻すことが出来る。だからお前達に俺に付いてくるように強制することは出来ない。お前達が特区に参加する』

なら構わない、戦わずに名を取り戻すことが出来るならそれが一番だからな。』

ルルーシュの悩みの種は其処である。

自分一人なら行政特区に参加せずに別にエリアに行つてまた反逆行為を続ければいい。

しかし今は既に守るべき者が出来てしまった。

『俺は所詮ブリタニア人だ、名を奪われたお前達よりも優遇されている。だから』

「ルルーシュさんは馬鹿です。」

柊がそう言う。

その一言に驚いてルルーシュが柊を見つめる。

『何を。』

「本当にルルーシユさんは大馬鹿です。私はいや私たちはあなたの生きるその姿に魅了されて一緒にいるんです。名前なんて関係ありません。確かに日本人としての名を取り戻すことが出来るかも知れませんが、与えられた名前なんかより愛する人の側にいたいんです。」

『愛する人って。』

その言葉に更に驚かされていると柊がルルーシユに口付けする。手をルルーシユの頭の後ろに回して抱きつく形でキスをする。ルルーシユも驚いていたものの目を閉じて柊を包み込むように抱く。少ししてどちらからと無く唇をはなす。

「ルルーシユさん、私はあなたについていきます。」

そう言って微笑む。

『ありがとう美代。』

既にルルーシユの心に迷いはなかった。

『俺は日本人に奇跡を見せ続けた、ならば最後まで見せてやる。』

新たな国を、新たな世界を、その全てを始めてみせる。たとえその世界がこの手で届かぬものならば、共に力を合わせ、仲間と共に無理矢理にでももぎ取ってくれる。

『俺はゼロ。虚でも無でもない奇跡をおこし、全てを始める者だ。』

それが俺の選んだ奇跡の形なのだから。

このあと、ルルーシュは予期していなかった事態に直面することになる。

第二十一話 激動する事態（前書き）

めっちゃお久しぶりです。

これから何とかがんばります。

## 第二十一話 激動する事態

特区の宣言を終えたナナリーは安堵の息を漏らしていた。

演説がうまくいったことが何よりも安心したのだ。

これまで人前に出てくることがほとんどなかった皇女である。

この演説も何度も練習を重ねたのだ。それが功を奏したのが嬉しいのだろう。

「お疲れ様ナナリー」

そう言って隣に立っていた青年が飲み物を渡す。青髪の少年の名はハイド・ヴァインベルグ。

幼き頃からルルーシュ達と交流していた人物だ。

「ありがとうございます。ハイド」

ナナリーは礼を言いながらそれを受け取る。

ハイドはヴァインベルグ家の三男で幼き頃から優秀である。

一を聞いて十を知る、いわば天才と呼ばれる部類に入る存在だった。

彼は専任騎士としてナナリーに仕え、サポートしている。ハイドがなぜナナリーの騎士かというのは追々話すとして。

ハイドも演説がうまく行ったことを安堵している。

ハイドは別にイレブンに対して特に思い入れはない。だがこの特区でナナリーの評価を上げることが考えている。

ナナリーは皇位継承権においても高くはない、むしろ低いほうだろう。ブリタニアでは力が正義だ。権力闘争の中では力がなくては生きてはいけない。

そのためハイドはナナリーの評価を上げることである程度の安全を保とうとしているのだ。

ナナリーは純粹にイレブンのことを思っている。

これからこの国の人たちの暮らしをよくしようと。だが、この演説がこのあと二人が予期せぬ事態へと発展する。

西日本のレジスタンスによる一斉武装発起。

その情報がエリア11を駆け巡った。

それはナナリー・ヴィ・ブリタニアが特区を宣言した数時間後の話であった。

そのすぐにエリア11総督でもあるコーネリア・リイ・ブリタニアは親衛隊と周辺のブリタニア基地の軍を収集して討伐へと向かった。

ルルーシュが武装発起の情報を得たのは孤児院にいたときであった。

『なに！西日本のレジスタンスたちが一斉に武装発起だと？』

「そうだ」

『いったい誰が』

「わからない、調べてみたが西日本の名のあるレジスタンスたちは全て発起しているといい」

くそつたれが、ルルーシュは内心舌打ちをしながら情報をまとめる。

西日本のレジスタンスが一斉発起したことはさすがに予想できていなかった。

武装発起するとは思っていたがせいぜい近畿周辺のレジスタンス達だけだろうと思っていた。

そして発起するにしても特区を破壊するという意味合いで当日か、前日辺りだと踏んでいた。

だが彼らはルルーシュが予想したよりも早く、さらに数も多い。

『（だが何故だ？何故西日本全てのレジスタンスが立ち上がった。この特区を受け入れようとするレジスタンスも少なからずいたはずだ。それに武装発起の早さ、これは明らかに仕組まれたものだ。だがこの特区をどうやって知った、これはナナリーが思いついたものと見て間違いはないはずだ。つまりこの宣言は電撃的なものだったはずだ、故に総督府に潜り込ませていたスパイからも情報は入ってこなかった）』

まるでわからない。それほどまでにこの武装発起は予想外すぎたのだ。

少なくとも西日本のレジスタンスはこの特区が宣言されることをわかっていただ。だがどうやって？

『（おそらくあれを知っていたのはナナリーとその騎士ハイド、そして原作でユフィに相談されていたシュナイゼル。彼らが他人に喋ると思えない、むしろ黙っているだろう。ええい、全てがこちらの予想したものを上回っている）』

「黒の騎士団の本部もいきなりの武装発起の原因を調べるために奔走しているが芳しくないらしい」

車を運転しているナオトがいう。現在黒の騎士団はルルーシュが不在だったため岡崎が変わりに指揮を取り動いている。

零番隊隊長のナオトはルルーシュを向かいに来ていて今は車で本部へと向かっている。

『だろうな、俺も未だにわからないことが多い。それに不可解な点が多すぎる』

「とうとう?。」

『まずはタイミングだ、何故このタイミングで動けた。俺たちですら特区の情報をつかめなかったのに』

黒の騎士団はブリタニア軍にもスパイを潜り込ませている。

そのため相手方の作戦や動きをすぐに察知することが出来る。

「同盟を結んでいるレジスタンス達とも連絡を取ったが特区の件も武装発起の件も一切知らなかったそうだ」

『東日本のレジスタンスの中にも西日本と連携をとっていたグループはいた筈だ。だが、それらも同じように知らなかったということか』

「どうやらな。で、次に不可解なことは」

『次に戦力の多さだ。一斉にこの数のレジスタンス達を連携させるなど無理だ。この頃西日本のグループはかなり沈静化していたはずだからな、それら全てを終結させるだけの求心力があるとは思えな

い。おそらく後ろで糸を引いている黒幕がいるはずだが、この戦力を集めるのは普通のやり方では無理だ』

「そうだな、西日本にそれほどの逸材がいるという話も聞いたことがない」

圧倒的なカリスマを持つものがない限りこれほどの戦力を纏め上げるのは不可能に近い。

だがそのカリスマを持つものが現れれば話は別だ。

「それで俺たちはどうするんだ」

『まずは本部に帰る、話はそれからだ』

二人が乗った車は黒の騎士団の本部へ進んでいった。

その頃、西日本レジスタンスの武装発起に対して迅速に対応したコーネリアはブリタニアの正規軍を討伐に向かっていた。

「何故これほどの数が」

「わからぬがやるしかあるまいギルフォード」

「ええ、將軍」

コーネリアの騎士であるギルフォードはコーネリア親衛隊隊長のダールトンはこの武装発起を不可解に思いながらも出撃の準備を進める。

主が戦うと知っているのだ、それに従わないわけにはいかない。

「姫様、全軍出撃準備整いました」

「そうか、では我らは周辺のブリタニア軍と合流しつつ東キンキ基地へと向かう」

「はっ」「」

コーネリアの指示に全軍が動き出す。

それから数時間後、ブリタニア軍はレジスタンスと激突することになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8759n/>

---

コードギアス反逆のルルーシュに憑依したぜ

2011年12月30日01時46分発行